
これはゾンビですか？ ～～いいえ。神殺しです～～

深刻の溝（デットクレパス）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

これはゾンビですか？ ～いいえ。神殺しです～

【Nコード】

N3893R

【作者名】

デットクレバス
深刻の溝

【あらすじ】

いきなり目の前に1人の男が現れ、俺にこう言ってきた。

男「転生、憑依、トリップどれにします？」

そんなこんなで俺が逝きます物語は、はたしてどうなるんでしょうね？

□ プロローグ □ (前書き)

今回、初めて投稿します。
東方不敗です。

初めて書きますので、どうか暖かく見守ってください。

出来るだけ頑張りますので辛口な評価などはあんまりしないでください。

□ プロローグ □

〳〵プロローグ〳〵

？「転生、憑依、トリップどれにします？」

いきなり目の前に変な男が現れた。

俺「どうしてこうなった？」

数秒前……

俺は道を歩いていて、すると…冒頭に戻る。

男「ねえ、ねえ、聞いてる？ねえどうすんの？　　つつか聞いてる？」

俺「よし。帰るか。」

男「ちょ、ちよと待って！！！！」また目の前に変な男が現れた…俺がいま出来る行動は？

俺のコマンド

たたかう

しゃべる

逃げる

寝る

↑

とりあえず……

コマンドにない警察の所に一緒に行く…でいいか♪

俺「それじゃ、行きましょうか。」

男「あ、はい。……え、あ、あのドコに行くんですか？……え、えっ、ちよつとあの………グスン（涙）」

俺「キモイわ！……！」

コマンド

殴る
↑

ゴッ！……！ 「グハッ！……」 バタッ

どう見ても30代後半ぐらいの男が人に話を聞いて貰えなかったぐらいで泣きだすなんてキモすぎるわっ！！、思わず殴っちまったじゃねーか………ってあれ？さっきからすこしも動いてないような？

俺「ツンツン、ツンツン（突っついてみる） 反応が無いな………殺ちゃった？ おーい、おーい……ま、いっか！」

～～BAD END～～

俺「ん？今、どこからか変な電波が来たような？」

そんなことを言っていると体がいきなり光出し俺の意識がなくなった。

気づいたら俺は……………赤ん坊になっていた。

高杉神威

0歳

職業

神殺し

□ 第1話 □ (前書き)

第1話です。

意外に早く投稿できました。

誤字とかもありましたらどうか言ってくれと助かります。

感想もよろしくお願いします。

それではどうぞ。

□ 第1話 □

〳〳 第1話 〳〳

どうも高杉神威0歳だ。

あれから何があつたのかを話そうと思う。

今思い出してもムカつくあの時の男の話が含まれてるが頑張つて話
すからとりあえず気づいた時からの話してから聞いて欲しい。

×
×
×
×
×
×
×
×
×

〃〃回想〃〃

神威「あぶばぶあばほ！！！！（なんじゃこりゃ！！！！）。」

とりあえず某熱血刑事のセリフを言ってみたけど赤ん坊だから何言
ってるか分かんね！。

そんな事を考えてると上から、

？「お！、母さん、神威が起きたぞ！！！」

？「あら、ほんとね。神威、お母さんよ。」

そう言って俺に話かけてきたその女性と男性はどちらもとても美形な人達だった。

え、マジで何これ？どうなってんの？つつか誰？この無駄に美形な人達は。

ちよ、ちよっと待ってよ。冷静に冷静にc o o 1になれ俺、少しずつ整理しよう。

まず道を歩いてたら変な男に会って、

いきなり変な事を言ってきたから一緒に警察の所に行こうとしてたら、

話かけられたから無視してやったら泣きだしやがって、

あまりのキモさに殴ってしまっい、

それから男が動かなくなっただから立ち去ろうとしたら、

いきなり体が光出して意識が無くなっちまって、

んで気づいたら赤ん坊？

分かんねー！！！！！！！！！！

いきなり急展開過ぎんだろ！！！！何で気づいたら赤ん坊？訳分かんわ！！！！！！！！！！

何でこんな事に。誰か説明してくれ（泣

？【その言葉待ってました！！！！】

うわっ！！！！だ、誰だ？

？【ん？忘れたの私だよ私？】

もしかして……………

オレオレ詐欺か？まあ老人は引つかかるけど俺は引つかからないな
いよ。

？【そうなんだよね。老人ってすぐ引つかかるからさ、めっちゃ儲
かつるんだよね……………って違うからね！！！詐欺じゃないからね
！！！！君に殴られた人だからね！！！！！！】

ノリツツコミかよ……………って、

ああ。殴って動かなくなった変な人か。
んでその変な人はまた俺に何か用すか？

男【君、けっこうヒドいよね。まあ良いけどさ、ゴホン。それじゃ
話聞いてもらえるかな？】

別にいいけどあんまりキモイ事言わないでくれよキモ過ぎて吐きそ

うになるから。

男【キ、キモイって。と、とりあえず最初に私の正体から言っね、私の正体は……………神です。】

……………うわ……………。どんなキモイ事を言っのかと思ったら今度はイタイ発言ですか？正直、吐き気を通り越して嫌悪感しか出てこないわ。

神【そこまで言う?!?!?!ただ、自分の事を神って言うただけでそこまで言うの?!?!?!?】

うるさいな、まだそこまで言ってないじゃん。

神【今までそんなに言われたこと無いんだもん（泣）】

自分の事神とか言ってる奴が、もん、とか言っなよ。余計キモイから。

それで、そのキモくて、イタイ、自称神（笑）さんは、俺に何の話を他に聞かせてくれるんですか？

神「やつぱり、ヒドいよね……！！もういい話進めるよ（泣）まず、君の今の現状を言いますと、赤ん坊になってますよね。あなたは転生したんです。」

「あゝ。まあ予想はしてたよ、それで何で俺は転生したの？」

神【さあ？】

はあ！？！？！？！？！？

神【まあ予想はだいたいついてるんだけどね。多分、君が私を殺したからだろうね。

】

……ちょっと待って、俺が殺した？殴っただけで？そもそも、お前神だろ、死なないんじゃないのか？

神【そのはずなんだけどね。

でも実際殺されたからね。何でか知らないけど。まあ神だから生き返るんだけどね。】

神【それで君、私を殺しちゃたでしょ、だから罰として転生して貰おっかな的な？感じなんだよね。っても、そうなる事は前から決まってるんだけどね。】

決まってるって、どういう事だよ。

神【ま、まあそれは……こ、こっちの都合があって言えないんだけど、と、とにかく君は転生したんだよ。】

あっ？言えないってなんだよ。それに今の間はなんだ？

それで納得すると思ってるのか？

神【い、言えないもんは言えない。ま、間何て作ってないし（汗）
そ、それで君がいる世界はね、小説の『これはゾンビですか？』っ
ていう世界なんだよね。】

あゝゝゝ確か、主人公がゾンビで他にネクロマンサー？だっけ、それと他にもいろんな奴が居る世界だっけ？

神【あれ、意外に知ってるんだね。】

俺の友達がマンガ持ってたからな。それに、アニメになるー！！とか言ってたし。

神【それなら話が早い。君には原作に介入して貰うんだけど、君、普通の人間だから能力をあげちゃいます♪】

いや、原作に介入とかしないからな。マンガで見たけど死亡グラフ結構あるからな！！！！！

神【そんな事言っても無駄なんだよね。強制的に介入するようにしたからさ（キラッ）】

うわっ、何コイツ殺してー。

神【そんな訳で能力あげちゃうんだけど言つのめんどいから脳に直接ぶち込みます♪】

はあ!?!?!直接ぶち込むってなんだよ!?!?!?!?

神【それじゃあ帰るね♪まっ、頑張ってくれたまえ(笑)さよなら
♪】

ちよっと待ってよ!?!?!!

ふざけ　　ッ　　ツキン　　んな…………痛って…………!!!!!

頭が割れる!?!?!?!?!?!?!!

そのあまりの痛さに俺は意識を失った……………

っていうか新しい母親と父親ほったらかしてたな(汗)

□ 第2話 □ (前書き)

ども、東方不敗です。

何とか更新することが出来ました。やっぱり小説って難しいですね。

それと、いーちゃんさん、感想ありがとうございます。
(。・ω・。)

これからも頑張っていくので駄作ですがどうか読んでください。

それでは、第2話
どうぞ。

□ 第2話 □

〃〃 第2話 〃〃

「あ、ぶあ、だあぶ？（ん、んあ、ここは？）」

そうか、俺気絶したんだっけ？頭の痛み引いたみたいだな。

……………それにしてもあのクソ神。絶対次、目の前に現れたら殺す！！！！盛大に血祭りに上げる！！！！

〃〃 閑話休題 〃〃

とりあえず能力だっけ？確認してみっか。多分、脳の記憶に入ってるから。

んと……。おっ♪在った、在った。

何ナニ……………。

能力名

〃〃孤独な勝利者〃〃

能力

相手より強くなる。

発動条件

自分が瀕死状態である。

発動の為の呪文。

.....何だコレ。

能力的にすげーチートなのに、発動条件悪すぎんだろ！？！？

まだ発動の為に言う呪文ならまだしも、

自分が瀕死状態の時だけってどんだけだよ！？？！？！？

言う前に殺されるわ！！！！！！

原作入ってから俺やって行けるんだろうか？OTL

神様どうか助けて下さい。

あつ、もちろんあのクソ神以外の神様に願ってますよ。

またまた閑話休題♪

さて、能力の確認は終わったけど、これからどうしたもんか。

まだ赤ん坊だから体は鍛えられないし、能力を確かめるにしてもこの状態じゃ何も確認する事出来ないからなあ。

でも能力を確認する為だけに死ぬ一歩手前まで体を傷つけるって…

……………ヤバい考
えただけで鬱になる。OTL

しかもただの変態マゾ野郎じゃねーか。(´・ω・`)

まだ、警察のお世話になりたくはないよ、俺（泣）

まあ、まずは一人でいろいろと出来るようにならないとな。

それにしても腹、減ってきたな。

.....ん??

何か引つかかるような？

母「神威〜。ご飯の時間だよ〜。」

……アハハ、ナルホド。コレガアリマシタカ。

ト、イウコトハ、トイレモ。

トイウコトデスネ。

ワカリマス。

これから俺の黒歴史が始まるんだね。

きっと俺は耐えきれなくて鬱病か、もしくは精神崩壊するんだろうね。

もし、ならなくてもきつとイタい人になっていることだろうさ。

ああ、時が見えるヨララア。

ん???

また、変な電波をキャッチしたみたいだな？

とりあえず、精神が壊れないように頑張るから、また、逢おうな。

.....逢えたらの話しだけだね。

それじゃ神威、逝ってきます。

□ 第3話 □ (前書き)

こんにちは？こんばんは？

東方不敗です。

隼さん、ライさん、感想ありがとうございます！！！！！！！！！！（。
ω。。）

隼さんの感想でもあったように前話の改行を修正いたしました。指
摘ありがとうございます！！！！！！！！！！

ライさんのアレは原作に入ったら是非使ってみたいです！！！！本当
にありがとうございます。

それと能力の名前を変更いたしました。

こんな駄作ですが見て頂けると光栄です。

それでは第3話
どうぞ

□ 第3話 □

〳〳 第3話 〳〳

やあみんな、この前まで精神崩壊しそうになった高杉神威だよ。

あれからもう6年も過ぎて俺も立派な小学校1年生だぜ。

アレがあってから何度、自殺しようと思ったか、

たまに天使さんが迎えに来てくれた気がしたよ。

全く持っていていい思い出だよ!!

まあ、まだ黒歴史は終わっていませんがね!!!!!!!!!!

食事やらトイレ・風呂は1人で出来るようになったんだけど、

今度はふ、服を両親、特に母親の方がいろんなものを着せて来ます
(泣)

1番多いのは勿論.....
.....女の子の服です。OTL.....

アハハ、スカートがスースーするよ。(涙)

父親は、この姿を見て.....。

父「グハッ！.....！こ、これがお、男の娘！.....
も、燃える（誤字にあらず）母さん！.....！
至急デジカメを持って来てくれ！.....！
こ、この熱いパトスが冷めない内に！.....！早く！.....！.....！」

とかほざいてデジカメで激写してくるし。

母親は母親で……………。

母「あらあら、お父さんったら張り切っちゃって。

お父さん、ビデオ、ビデオもお願いね」

あつ、それとPCに保存と引き伸ばして玄関に飾らなくちゃね」忙しくなるは」

とか言うし、俺どうしたらいいんだろうね？

あれ、何故だろう目から汗が出てくるよ。（涙）

もうだいぶいろいろ諦めたよ。

いろいろ……………ね。

〳〳閑話休題〳〳

只今散歩中だ。

ん????服?流石に外までは着ないよ?

当たり前じゃないか。

もし着たら本当に変態じゃないか……………もう家で着てるから変態か。(泣)

両親は外まで着せる気マンマンだったけどな(汗)

何とか阻止したよ。

O H A N A S H I……………でね♪

ちゃんと某白い魔王みたいに出来たと俺は思うよ♪

とりあえずこの話は終わりにして散歩を楽しもうと思う。

しっかしあと10年したら原作開始か。

……………面倒くさ。

俺の能力じゃ最初は役に立たないし、邪魔になるだけじゃ無いのか？

それも毎回、死の一手手前までやられないと発動しないし。
身体、絶対保たないな。

あのクソ神め。

もうちょっと発動条件良くしろよな。

前を見ずにそんなことを考えていたら……………。

ドン 「イッテ。」

『人』とぶつかって屍餅を付いてしまった。

？「ご、ごめんね！！ぶ、ぶつかって！！」。あ、あの大丈夫？」

そう言って頭を下げてきた。

俺「あ、大丈夫ですよ。こっちもぶつかってすみません。」

それにしても綺麗な金髪の男性だな。まるで最初に話した天使さん
見たいだな。

男「本当にごめんね！！！」。

俺「もう大丈夫ですから、顔を上げてください。」

男「そ、そうかい？、でも本当にごめ　　っっ！！！！！！！」

そう言って頭を上げたらいきなりビックリしたように目を見開いた。

俺「????どうしたんですか？」

男「……つた。」

俺「え？」

その瞬間……………シュツ。

そんな音がしたと思ったら

ズパッ！！！！

俺「グワッ！！！！」

俺の肩が……………切れていた。

□ 第4話 □ (前書き)

今入試休みに入っている

東方不敗です。

いつの間にかP Vが5 , 0 0 0以上、ユニークが1 , 5 0 0以上になっ
ていました!!!!!!

皆さん!!!こんな駄作を見ていただき本気にありがとうございます
!!!!!!

これからも頑張っていくのでよろしくお願いします!!!!!!

今回は戦闘が入ります。やっぱり戦闘を書くのは難しく大変ですね。

あんまり出来てないかも知れませんが暖かく見守ってくださいると助
かります。

長くなりましたが第4話です。それではどうぞ。

□ 第4話 □

〃〃 第4話 〃〃

俺「グワツ!!!!」

俺は肩を切られたあとに、腹を蹴られ数メートルほど飛ばされた。

俺「ゲホ、ゲホゲホ、痛ツツツ!!!!何なんだってんだよ、いったい。」

そう言いながら俺はその男を見ると。

男「見つけた、見つけたぞ!!!!神殺し!!!!!!」

その男は人間じゃ出せない程の殺気を俺に向けてきた。

俺「つつ!!!!!!.....なんでそんなこと知ってたんだ?」

俺は殺気に耐えながらその男に聞いた、俺とクソ神しか知らない事

を。

男「知れたこと、私は神の眷属。貴様が神を殺した事など知らない訳が無いだろう！！！！」

俺「て、言う事はあんたは天使か？」

天使「そうだ！！！！そしてこれから貴様を神殺しの罪で罰する！！！！」

俺「確かに、俺は神を殺した事は事実だがその神は生きてるんだぜ。殺すまでは無いだろう。」

天使「黙れ人間！！！！確かに神は神同士の闘いでしか死にはしない。しかし、たかが人間が神を殺すなどあつてはならない！！！！」

天使「よってこれより罰を執行する！！！！」

そう言った瞬間に天使の手に剣にも銃にも見える武器を出現させた。

俺「それでさっき俺を切ったのか。」

天使「ああ。私達、天使は神のような能力などはないその代わりに神から送られる、武器を持つ。そしてこの武器の名は

『ガンブレード』。」

俺「なるほど。その武器で俺を殺すのか？」

天使「殺す？いいや、違う。魂そのものも永遠に消滅させるのだ。」

どっちにしても同じようなもんだろ。しかし、どうすつかね？と
りあえず避けて攻撃、かな？

天使「何を考えているか知らないが諦めろ。
人間ではその上位種である天使私には勝てん。
絶対にな。」

絶対？なんだそれ？知ったこっちゃないな。

俺「そんなのやってみなきゃ、分かんない……………だろ！！！！
！」

そう言って俺は足に力を入れて地面を蹴った。

俺「おらあ！！！！！」

その勢いで腕を大きく振りかぶり天使を殴った。

天使「な、何！？！！！？
グッハ！！！！！」

天使は驚愕した。油断していたとは言え、たかが人間が上位種である天使に一撃入れるとは思ってはいなかったのだ。

そして殴った本人もビックリしていた。それもそのはず、普通の人が出せるスピードもパワーも神威は越えていた。

俺「な、何だ？？何時もより力入れたらものすごく速くなったぞ？
??」

天使「き、貴様！！！！
その力は人間が出せる力じゃない！！！！
その力、神から奪った力か！！！！！」

そうなのか？だから最初、あの近距離から切られたのに肩の傷が浅いのか。

そう思いながら切られた肩を触った。

……だから俺は勘違いしていた。この力だったらいけるかも知れないと、勝てるかも知れないと。天使「なるほどな。普通の人間よりは強いと言うことか。ならば、本気で行くぞ！！！」

……そう勘違いしていた。
いくら神に力を貰おうと能力を使わなければ人間では勝てないことを。

天使「ハア！！！」

天使はその手に持つガンブレードで斬りつけてきた。

俺「ッ！！！！クソ！！！！！」

それを辛うじて俺は横に転がって避けた。だが、それがいけなかつ

た。

天使が持っていたのは剣ではなく『剣銃』なのだから。

天使「フッ！！！」

斬りつけたガンブレードをそのまま横に向け、転がった神威にその引き金をひいた。

『ダンッ！！！！！！』

カラン。

俺「グッ！！」その銃弾は俺の左肩を撃ち抜いた。

天使「フン。これは剣と銃、両方を兼ね備えている。いくら神の力を奪って身体が強くなろうと所詮は脆弱な人間、私には勝てはしない。さあ諦めて罪を償え。」

チッ！！

やっぱりキツいな。

運よく能力が発動出来るまで身体が保つても、呪文を言っている間に殺されるし、

このまま闘っても勝てる気がしないしな……………

…詰んだか？

じゃあ諦めんのか？

このまま何もしないで？

ただ黙って死を、

殺されるのを待つのか。

ざけんな！！！！

闘って死ぬのは嫌だ。

だけでもっと嫌なのは……………

ただ何もせずに黙って殺されるのは絶対に嫌だ！！！！！！！！！！

俺「諦める？俺は諦めが悪いんだよ。だから最後まで足掻いてやるよ！……！」

そう言っただけ俺は天使に向かって飛び出し。

天使「まだ諦めないか。それが人間………か。いいだろう、ならば苦しまずにしてやる。」

そう言っただけ俺はガンブレードを構えて地面を蹴った。

□ 第5話 □ (前書き)

こんにちは。

東方不敗です。

いーちゃんさん感想ありがとうございます!!!。

今回、やっと主人公の能力発動です。
まだ対天使ですがお付き合い下さい。

それと昨日PVを言ったのに今日の朝みたら10,000超えていた……ビックリです!!!!

また今回は微妙かも知れませんが見て頂けると幸いです。

それでは第5話
どうぞ。

□ 第5話 □

〳〵 第5話 〳〵

神威「オラア！！！」

天使「ハアア！！！」

ブン！！ シュ！！！！ ガアッ！！！！！！

天使が切りかかり、神威が避け、そして神威が殴りかかると天使がガンブレードで受け止める。

それを繰り返していた時、

天使「そこだ！！！」

天使が神威の拳を受け止めた後に、隙を突いて銃を撃ってきた。

ダンッ！！　ダンッ！！！！

カラン、カラン。

神威「チィ！！！！」

それを神威は辛うじて避けるが横腹と太股に掠ってしまった。

神威「クソッ。」

神威は僅かにだが少しずつ押されていた。

それは何故か？

武器の有無か？

それもあるのだろうが神威はそれを補える身体能力があった。

何もパワーやスピードだけが神から奪った？力ではない。

神威の身体能力、全てが上がっているのだ。

動体視力の向上、脳からの電気信号による神経伝達速度増加、その他もろもろの身体能力が通常の人を遙かに超えていた。

だがそれが神威が押されている理由ではない。

それは……………『経験値』。

圧倒的に神威は『闘いの経験値』が足りないのだ。

前世でも、転生してからも一度として喧嘩や格闘技をしたことない神威にとって致命的であった。

それでは天使は？…となるが、天使は人間と同じように歳をとるが不老である。

それに天界の他に、魔界もありそこには悪魔や魔神、魔王などい

る。

昔、天界と魔界の住人は仲が悪くいつも戦争があった。

今ではそれは無くなり互いの最高の位にいる者が互いを牽制（監視）しあって戦争がなくなったが、

その争いの名残で天界の住人は闘いの訓練がある。

話はズレたが、神威の前にいる天使もその訓練を行い闘いの経験を培ってきたのだ。

天使「そろそろ終わりにしよう。」

そう言っ天使は、俺にガンブレードを向けてきた。

神威「まだ終わらねーよ！！！！」

俺は、脚に力一杯力を込め、天使に右蹴りを放った……………

ガッシ！！！。

簡単に掴まれ、防がれた。

天使「無駄だ。なんの訓練もしたことが無い貴様に俺が倒せるものか。」

神威「クッ！！！」

天使はガンブレードを上に掲げそのまま……………。

天使「終わりだ。」

振り下ろした。

ザン！！！！　　ブシユユ！！！！

神威「ガハア！！。」

ブンッ！！　　ガアア！！

そのまま天使は掴んだ脚を投げ、神威を飛ばした。

神威「グッ……………ッ!!」

天使「まだ生きているのか？神の力のおかげだな。」

ガンブレードを肩にかけ、近ずいてきた。

くっそたれ、メツチャ痛いじゃねーか。もう俺、メツチャ死にそうじゃねーか。……………やべーな口調も可笑しくなってきた（汗）

天使「もう楽にしてやる、罪を……………償え。」

神威「ま……………だ……………死……………んで……………たま……………るか。」

天使「もう無理だ。諦めろ。」

本当に無理なのか？終わんのか？諦めなきゃいけないのかよ。

まだ何もせずに……………死ぬのかよ。

……………そんなの認めねえ!!!

最後まで足掻いてやる!!!!!!

神威『我、……………常に勝……………者……………である。』

生きるんだ。

天使「????何を言っている?」

神威『…我、…人生……………に敗…北は……………なく。』

生きるんだ！

天使「何をする気が知らないがこれで終わりだ！！！」

天使はガンブレードを俺の心臓めがけて突いてきた。

それを神威は………
ガッシ！！！！

手で掴んだ。

天使「何！？！？貴様、まだ！！！」

神威『虚しい……勝利だ……け……が全て……を示……し語……る。』

生きるんだ！！

天使「離せ！！この、さっきまで虫の息だったのに、何故こんなに力がある！！！！」

神威「その…人生は…孤独で…あり、隣に立…て…るもの…など…誰も…いない。」

□

生きるんだ！！！！

神威が言葉を紡ぐ事に、力が増し、そして傷が治っていく。

天使「き、傷が治っていくだと！！！！貴様！！！！」

天使は無理やり神威からガンブレードを剥がしとり神威を斬りつけた。

だが、それは……………空を切っていた。

天使「何！？！？ど、どこにいる！？！？」

神威『いつ何時…でも…常に勝利…し、億千万…全ての…命を…奪う』

天使「後ろか！……！」

天使は声がした方にガンブレードを回り振りした。

神威『私の言葉…に敗北は…無く、死する…ことなど…ありはし…無い。』

それを神威は右腕で受け止めた。

天使「な、何！？！？」

神威『その者の名は【孤独な勝利者】。』

その瞬間、神威の周りに風が巻き起こり。

ゴワアアアアアア！！！！！！！

天使「グッ！！！」

風が止むとそこに立っていたのは、黒髪黒眼ではなく銀髪紅眼の神威がいた。

神威「さあ、第2ランドだ！！！」

□ 第6話 □ (前書き)

この頃よく布団で四六時中寝ている、

東方不敗です。

少し書き直しをいたしました。

とりあえず、ライさん・zeroさん・kr gさん感想ありがとうございます！！！！
ございます！！！！

これからも頑張っ て行きますのでよろしくお願いします！！！！
あと、後書きにアンケートをしたいと思ひます。
どうかご協力お願いいたします。

□ 第6話 □

〵〵 第6話 〵〵

神威「さあ、第2ラウンドだ!!!」

天使「クッ!!!姿が変わった所で!!!」

神威「姿だけじゃ無いぜ。周り、見て観ろよ。」

天使「何？」

そう言つて天使が周りを見た瞬間.....

.....そこは夕暮れで、周りに在るもの全てが『墓標』意外何も無い世界。

天使「な、何だこれは!?!?貴様何をした!?!?!?」

神威「俺の能力だよ、天使。名は【孤独な勝利者】。墓標しか居ない『孤独』な寂しい場所さ。

準備は整った。さあ、始めようこの墓標に新たな名を刻む事を。」

そう言つて神威は墓標に手を置きその墓石を剣に変化させた。

天使「クツ、戯れ言を！！その名に刻まれるのは貴様の方だ！！！！」

天使はガンブレードに込められている弾丸3発を神威に放った。

神威「フツ！！！！」

だが神威はその3つの弾丸を全て避け、そのまま天使に接近し、天使を墓石で出来た剣で切り裂き吹き飛ばした。

天使「ゴハッ！！に、人間…なんかに…負けて…なるものか！！！！」

天使はガンブレードを杖代わりにしながら立ち上がった。

神威「ああ、そうだな。でも俺もまだ死にたくは無いんだ。だから………あんたを倒す！！！！」

天使「ハア、ハアハア……オオオオオオオオオオオオ！！！！」

神威「ハアアアアアアアアア！！！！」

ガンブレードを右下、に振りながら斬りつけて来たのを、神威は左下に避け墓石の剣を右上に放った。

それを天使はガンブレードを戻し神威の剣を受け止めるがいつの間にか持っていた墓石の槍で天使ね腹を突き刺した。

天使「ガッ！！！！」

神威「そらっ！！！！」

槍を引き抜きそのまま槍で上に振り上げ、天使の後ろに周り込み剣を振り下ろした。

天使は切られながら地面に叩きつけられ、そこにクレーターを生んだ。

天使「な…何故だ！？！？人間が…天使を…倒すだと！？！？あ…つては…ならぬ。
そんなことは！！！」

神威「そんなの、あんたが決めつけるんじゃないー！！！！」

天使はガンブレードを神威に突き出したが……………

神威に届く事はなく、変わりに神威の剣が天使の腹に突き刺していた。

神威「俺の……勝ちだ。」

天使「その…ようだな。」

言った後、天使は地に倒れた。その瞬間、空に罅が入り世界が砕け散り、神威の髪も銀髪紅眼から元の黒髪黒眼に戻った。

天使「私が…倒れた…今、次は…他の天使や…神がやって…来る。せいぜい…最後まで…足掻くのだな。」

神威「ああ。足掻いてやるよ……………最後まで。」

天使「そ…うか。」

神威「ひとつ、聞きたい事がある。さっきまで、あんたと闘って気が無かったけど、こんな昼間から人が居ないのは何でだ？」

天使「それ…は…『結界を張っているのですよ。神殺しさん』ッ
！……！！」

神威「誰だ！！？！！？」

そう言いつて拍手しながら近付いて来たのは見た目20代前半の男だった。

？「パチパチパチ。いやあゝまさか天使を倒すとはビックリしまし

たよ
」

神威「誰だつて聞いてんだよ。」

神威はその男を睨み付けた。

？「ん？？？おつと僕としたことが自己紹介がまだでしたね？初めまして、神殺しさん僕の名は【プロメテウス】。
一応神をやつて下ります」

神威「天使の次は神様かよ。んでその神様は俺に何の用だ？」

プロ「それ何ですが。僕、本当はただ傍観してるだけだったんですよね？」

ただ、貴方がその天使を倒したおかげで出て来て貴方を消滅させないといけないだけですよ。神、直々に………ね」

マジかよ！？！？

いきなり連戦！？？！

しかも相手、神様何ですけど！？！！？

……死亡グラフ立ちましたね。

分かります。

プロ「まあ『他にも理由が在るんですけどね?』とりあえず。」

プロメテウスがそう言った瞬間にはもう……天使の横に立っていた。

天使「……プロ……メ……テ……ウス……様」

プロ「良く頑張りました。名前、聞いてもいいですか?」

天使「名……前は、ライオ……ネル……です。」

プロ「ライオネル。いい名前ですね。さあ、ゆっくり休みなさい。」

ライ「はい。ありがとうございます……ます。」

そう言って天使【ライオネル】は光の粒子になって消えた。

神威「天使はどうなったんだ？」

プロ「ライオネルは魂ごと消滅しました。神の能力を受けたんです。神の力はその存在を消滅させる力が在りますからね。さて、それではライオネルの意志を継いで貴方と闘いましょうか。」

神威「その前にさつきも天使に聞いた事何だがあんたにも聞きたい事がある。」

プロ「【結界】の事ですか？」

神威「それもあるが、あんたさつき『他にも理由がある』て言つたよなそれは何だ？」

プロ「それですか。まあ、まずは【結界】の事から話をしますね。」

神威「ああ。」

プロ「まず、天使も神も人間界にはメツタに降りてきません。それは人間の魂が僕達の魂の存在に耐えきれなくなり死んでしまうからです。
【結界】で人を遠ざけ人が入らないようにして隔離するんです。」

神威「なるほどな。じゃあ何で俺は耐えきれるんだ？」

プロ「貴方は神殺しで、神の能力を持っています。そのおかげで魂が僕達に近い存在になっているからでしょうね。」

神威「そうか。だったらもう一つの方は何だ？」

プロ「あんまり言いたくないんですが、まあ一言でいいますと喧嘩ですかね？」

神威「はあ????」

プロ「ですから喧嘩です。貴方が殺した神は僕のライバルでね、いつも嫌がらせするんですよあの人。しかも今回は、僕が大切に大切にしていたプリンを勝手に食べたんですよ！！！！許せませんよ！！！」

神威「ちょ、ちょっと待て……………もしかしてそれが理由か？」

プロ「ええそうですよ？僕達、神は争うことは出来ません。ですからあの人と同じ能力を持つあなたに償って貰おうかと。」

神威「ざけんな！！！！ただの八つ当たりだろうが！！！！

しかも理由がシヨボいんだよ！！！！

そんなもんに俺を巻き込んでんじねえ！！！！

それにさっきあんた『天使の意志継ぐ』って言ったじゃねーか！！！！！！

それはどうした！！！！！！

プロ「失敬な！！！！八つ当たりじありません！！！！理由もシヨボくありません！！！！それに、ちゃんと意志を継ぎますよ。

ただ、あなたにプリンの罪をあの人の代わりに償って貰おうとしてるだけです！！！！」

神威「やっぱりただの八つ当たりだろうが……!!」

プロ「……………貴方とは話が合いそうにないようですネ。
そろそろ闘いを始めましょう。」

神威「今の間は何だ……!!あんな実際、八つ当たりだって分かってんだろ……!!」

プロ「聞く耳持ちません……!!行きますよ……!!」

神威「あんな最低の神だ……!!」

こうしてこの小説主人公と理不尽な理由の神との闘いが始まった。

果たして連戦の神威は勝てるのか?!?!

神威「いや、勝てるきしないからな!?!?」

頑張れ神威!!--負けるな神威!!--きっと勝てると信じてる!!--!
!(by作者)

神威「ちょ、話を聞い(r)y」

あまり期待しないで待っていて下さい!!--!!!--!!

それでは。

□ 第6話 □ (後書き)

ええと。前書きで言った通りアンケートを行いたいと思います!!!

何のアンケートかと申しますとヒロインとこれからの事です。

まず、ヒロインは、1人につき、2人まで。

今後の事だと。

? 原作に殴り込みじゃあ!!!

? 日常入れて原作にGO!!!

? このまま主人公の成長を見えます!!!

のどれかです。

投票の仕方は

例: ユーとセラを希望、 今後は? で。

とこんな感じでお願いします。締め切りは、
14日のAM00:00までです。

皆さんのご協力お願いいたします。

□ 第7話 □ (前書き)

こんにちは。

東方不敗です。

まずは、ユウトさん、zeroさん、いーちゃんさん、ブラック
インさん、ライさん、感想ありがとうございます！……！！

まだアンケートは続いているのでご協力お願いいたします！……！！
！！！！

では第7話です。
どうぞ。

□ 第7話 □

〳〵 第7話 〳〵

プロ「行きますよ!!!」

神威「やっぱり闘わないといけないのか。(´・ω・｀)」

神、プロメテウスが落ち込んでいる神威に向かって手を前にかざした。するとプロメテウスの手から炎が放たれた。

神威「オワッ!?!?!」

それを神威は間一髪で何とか横に転がって回避した。

神威「落ち込んでる最中に攻撃すんなよな。それにしても今の炎があんたの能力か?」

プロ「さあ？どうでしょうか？そうかも知れないし、そうじゃ無いかも知れませんよ」

神威「意地悪だな。あんた、クソ神のライバル何だろ？だったら俺の能力知ってんじゃん、不公平だろ。」

プロ「確かにあのクソみたいな人のライバルしてますし、貴方の能力を知っていますが、だからと言って自分の能力を明かす何て事普通しませんよ？」

神威「やっぱり簡単には教えてくれないか。」

プロ「当たり前ですよ。もし知りたいなら自分んで考えてみて下さい」

神威「そんな事は分かってんだよ！！！！」

プロ「じゃあ続きを始めましょうか！！！！！！」

今度は炎を拳に纏って神威に接近してきた。

プロ「ハアア！！！」

神威「くっ！！！」

それを神威はギリギリで避けたがプロメテウスは神威の腹に膝を打ち込み拳で何十発も神威を殴った。

神威「ガッ！！！」

崩れ落ちそうになるのをプロメテウスはそのまま蹴り飛ばした。

プロ「神殺しさん、能力使ったらどうですか？そのままだと死にますよ？張り合いが全くないですよ。」

神威「ガハッ、ガハッ。俺は……高杉……神威だ……間違えんな。それに……あんたも……知ってん……だろ、俺の能力は……瀕死の状態……じゃないと使えないってよ。」

神威は血を吐きながら何とか立ち上がるとする。

プロ「あれ？あのクソでキモイあの人は教えて無いんですね。貴方の能力は使い勝手が悪いから応用してましたよあの人？」

神威「応用…だって？結局それもあんたは…教える気、ないんだろ？」

プロ「当たりです、出来るよう頑張つて下さいね？………まあ、出来る前に死ぬかも知れませんが。」

手に炎を出しさつきより大量の炎を神威に放った。

このままじゃ避けられえ！？！—か八か………やってやる！！！！！！
集中しろ！！！！

集中しろ！！！！！！

集中しろ！！！！！！！！

神威「おおお！！！！！！！！！！」

神威は右手を地面に叩き付けた。すると……………神威の目の前に地面から壁が生まれ、炎を防いだ。

神威「何とか防げたか。」

そう言つて壁から身を乗り出そうとした瞬間……………背中に悪寒を感じ直ぐさま前に飛び出した。

プロ「気づきましたか！！」プロメテウスは今まで持っていなかった『剣』を神威に向かって斬りつけた。

それを神威はさっき自分で作った壁に手を当て『槍』を作り出し剣を受けた。

プロ「出来たようですね。」

神威「ああ。俺が能力を使った時『墓石』を使ったからな。似ている『土』だったらもしかしてと思って、地面に手を置いて壁を想像したらちゃんと壁が出てきたし槍も出せた。」

プロ「正解です♪これで少しはマシになりましたね。良かった、良かった♪」

そう言つてプロメテウスは剣を人体の急所に的確に斬りつけてきたのを何とか槍で防ぎ距離を取る。

神威「はあ、はあ。それに、あんたの能力、炎の次は武器の剣を持つてる。あんたは、もしかしていくつも能力を持つてるんじゃないか？」

プロ「うーん、惜しい♪半分正解ですね。まあ、良いでしょう。僕
の能力の名前は【万能なりて不滅】。『攻撃方法』が炎から始まり
武器など、いろんなものに変えることができます。」

プロメテウスが持っている『剣』が『炎』になり、そして『槍』なる。

神威「それじゃあ俺と同じであんたは炎を武器に変える事が出来るのか？」

プロ「ふむ。貴方は少し勘違いをしていますね？」

神威「勘違い？」

プロ「ええ。貴方は自分と同じ、と言いましたがそれは間違いです。貴方の能力は土を武器に変えるんですよね。ですが僕の能力は炎を変える事はもちろん、他の『攻撃方法』があると云う事です。」

神威「炎を武器に変えて攻撃する以外にもあるってことか？」

プロ「そうですね。じゃあせっかく名前も能力も教えたんです、見せてあげますよ。他の攻撃方法をね。」

プロメテウスと神威は槍を構え、同時に駆け出し槍を放つ。

神威「疾っ！！！」

プロ「破っ！！！」

片方が槍を心臓に向けて放つともう片方が受け止めながら首に目掛けて横に振るう。

それをしゃがむ事で避け、そのまま上に向けて振るう。

次にバックステップで離脱した後に脚に力を込め勢いよく突進する。

そうして両者が拮抗している時、プロメテウスが神威の攻撃を受け止め様として、そのまま攻撃を受け流した。

その瞬間、神威に隙が出来てしまい。

その隙を逃す訳がなくその一瞬で神威の横腹を切り裂いた。

神威「グワッ！！！」

プロ「隙を出したらダメですよ、神威さん？そのおかげで準備が整いしたけどね。」

神威「グッ！！準備…が整った…だと？」

切られた横腹を抑えながら神威はプロメテウスに聞いた。

プロ「ええ。神威さん、僕の槍は炎で出来ていますよね？その炎の槍で切られ、炎が一部でも貴方の身体に入ったらどうなると思いますか？」

そう言いながら手を少し上に掲げ、

パチン！

指を鳴らした瞬間……………。

神威「グワアアア！！！！！！」

神威の身体が焼けるような痛みに襲われ倒れた。

プロ「どうですか？神経が焼き切れる痛みは？痛いでしょう？」

神威「ガアアアア！！！！！！……………ハア、ハアハア。」

プロ「これが僕のもう一つの攻撃方法です。まだ他にも在りますが、もう貴方は動けそうにないので終わりにしましょうか。」

神威「ハア、ハア…グツ！！」

神威は何とか身体を動かそうともがくが、

プロ「無駄ですよ。神経が傷ついてるんです、普通の何の力も無い

人間ならとづくにさっきの攻撃で神経が燃え切って死んでるんですよ？

貴方だからまだ焼き切れていませんがそれでももうほとんど動けませんよ。」

神威「く…そつ…。」

プロ「それでは神威さんサヨウナラ。」

プロメテウスは槍を神威の心臓に突き刺した……………

グサッ！！！！

……………ハズだったが、貫いたのは神威の心臓ではなく、

プロメテウスの心臓に『刀』が貫いてていた。

□ 第8話 □ (前書き)

どうも、もう入試休みが終わって明日から学校が始まる

東方不敗です。

昨日、更新が出来すぎ申し訳ありませんでした。

そして学校が始まるので週一になると思います。
すみません。

感想をくれたランチャーさん、たまごさん、TOMさん、零崎人識、
フレデリカ・ベレンカステルさん
ありがとうございました！！！！！！

今回も駄作ですが、見てくれると嬉しいです。

アンケートの結果を後書きに在りますので観てください。

それでは第8話です。
どうぞ。

□ 第8話 □

くく 第8話 くく

プロ「ゴフッ！！！」

プロメテウスの胸に貫いていた『刀』。その刀がいきなり引き抜かれ、プロメテウスの胸から大量の血が噴き出した。そのままプロメテウスは地面に膝を着き、胸から出る血を抑えたが、止まること無く流れ落ちる。

プロ「こ、…これ…は、もし…かし……て。」

？「そうですよ、神様。貴方が考えてる通り、刺した刀は『神殺し』の概念が施されています。」

神威とプロメテウスは声が聞こえた方に顔を向けた。
そこに立っていた者は……………神威より少し背が高い黒髪黒眼の女の子がいた。

プロ「やはり、そう……ですか。と……いうことは……貴女は……」

女の子「ええ。私は神殺しですよ、と言っても『やっど』ですが。」

神威「『やっど』……だと？」

女の子「貴方は？………そうですか、貴方が。もう一人の神殺しの高杉神威さんですか。」

神威「何で、俺の名前を。それに………」

神威は女の子が手に持っている物に目を向けた。

女の子「この『刀』ですか？」

女の子は『刀』を少し前に上げた瞬間………。

ピシッ！！

音が鳴ったと思った、その時『刀』の刀身に罅が入り、砕け散った。

女の子「やはり使えるのは一度だけでしたか。」

そのまま刀身が砕けた刀を投げ棄てた。

女の子「とりあえず、早く死んで貰えませんか？神様。」

プロ「言わ…れなく…ても、もう…僕は…死ぬ…よ。」

女の子「そうですか。これで私の『願い』に一步近づけます。ありがとうございます、高杉神威さん。」

女の子は神威の方を向いて、今まで表情が無かった顔に少しだけ笑顔が浮かんだ。

神威「ど、どうゆう意味だ？」

神威は女の子の言っている意味が解らなかった。

女の子「貴方が神様に殺されそうになった時、神様に大きな隙が生まれました。私はその隙を突いて、背後から刀を神様の心臓に刺す事が出来たんですよ。ですから、」

「ありがとうございます」

神威は背中に悪寒が駆け巡った。それは神・プロメテウスとの闘い以上のものが、走り、神威の脳に警告が鳴り響いた。

『危険』

その言葉だけが神威の本能に訴える。

プロ「ゴハッ、ゴハッ……もう……無理……みたいだ……ね。神威……くん、もう……少しで……君に……償って……貰えた……のに……な。」

プロメテウスは、そう言った後、天使と同じように光の粒子になっ
て消えていた。

女の子「死にましたか。そして、これが……『神魂』ですか。」

女の子の手にはさっきまで無かった仄かに光る物体を手に入っていた。

神威「『神魂』《じんこん》？」

女の子「はい。これは読んだ通り神の魂です。神は必ず1人一つの能力を持ち、そして、神を殺す事でその魂が現れ、吸収することでその能力を得る。」

神威「だったら、それは……………」

女の子「その通りです。今私が持っているこれはさっきの神の魂でそして能力が宿っているものです。」

手に持っていた神魂を女の子は静かに胸の前に寄せた。すると神魂は女の子の中に入っていた。

女の子「これで私は能力得て、『やっと』神殺しになりました。」

神威「どう…ゆう事だ？」

女の子「言った通りです。私は今さっきまで神殺しでは無かったですよ、高杉神威さん。」

神威「何で俺の名前を知ってる。」

神威は殺気を飛ばしながらその女の子に聞いたが、女の子は平然と顔色一つ変えずに返答する。

女の子「それは私が……貴方と同じ『転生者』だからです。」

神威「なっ!!!!!!!!!!」

神威は吃驚した。まさか自分の他に転生者が居るとは思わなかったからだ。そして考える、自分と目の前に居る女の子以外にも転生者が居るのではないかと。

女の子「大丈夫ですよ。私と貴方以外、転生者はこの世界に居ませんし、もう来ません。」

神威の表情に出ていたのだろう。神威が考えていた事は気鬱に終わり安堵したが、そこで疑問が出てきた、何故、彼女は他の転生者が来ないことも居ないことも知っているのか。

神威「何故そんな事を知っている？」

女の子「それは私を転生させた神様に教えて貰ったからです。この世界の事、神の事、そして先に転生した貴方の事を教えて貰いました。幸い貴方の次に転生した私は神に能力を貰う代償に他の転生者を来させないようにしました。」

女の子「流石に能力が無いと神と戦えないので一度だけ神を殺すことが出来る武器を貰いました。それがさっきの刀です。そしてあの神を殺すことでやっと神殺しになったんです。」

神威「何でそんな事を……。」

女の子「他の転生者を来させない事ですか？それは、デメリットがあるからです。」

神威「デメ…リット？」

女の子「他に転生者が現れたら神が来る確率が減ります。それはデメリットしかないでしょう？それでは能力を得られない、強者には成れない。」

神威「何だよそれ。強者に成れないって何だよ！！！！」

女の子「そのままの意味ですよ。私は弱者にはもうなりたくない、それだけです。」

女の子はそう言って踵を返した。

女の子「目的は果たしました。もうここに用はありません。それと……………私の名前は『神裂雪』、夜の王の協力者です。それでは高杉神威さん、今度は闘い（殺し合い）しましょう。」

神威「待て！！！！！！」

その女の子『神裂雪』は張ってあつた結界を能力で壊し、いつの間にか夜になっていた街に消えていった。

神威「クソ！！！！まだ聞きたい事が在るのに！！！！……………」

…はあ、とりあえず帰るか、これから大変になるかもな。」

神威はこれから起こる出来事に不安を感じる。

神威「しっかし、両親に何て言い訳すりあいなんだよ？」

だが、これから起こる出来事の前に他の不安があった。

神威の両親は親バカだったりする、その一人息子の身体中が傷だらけで、

しかも夜に帰って来るとなれば両親は間違いなく気絶して倒れる、それをどうするかずっと考えながら家に帰った。

そして物語が動き出す

神威はこれからどのように生き、これから出逢う人とどう接していくのか。

□ 第8話 □ (後書き)

それでは、

アンケートの結果発表！……！！

まずは今後についてから。

？ 7票

？ 3票

となりました……！！

続いてヒロインは…

第三位……！！

クリス 1票

平松 1票

アリエル 1票

サラス 1票

第二位……！！！！

セラ

6票

第一位！！！！！！！

ユー

8票

となりました！！！！！！！！

ユーが断トツでしたね。

しかし、セラも多かったので、ユーとセラをヒロインにしようと思います。

皆様のご協力ありがとうございました！！！！！！！！！！

これからも頑張りますのでよろしく願いします！！！！！！！！

感想、待ってます。

□ 主人公設定 □ (前書き)

ども、東方不敗です。

一旦区切りを付けるために主人公設定を書きました。

また次から原作に入っていくのと、この小説のオリジナルキャラや設定などを今後書いていきます。

よろしくお願いします。

では、どうぞ。

□ 主人公設定 □

主人公設定

現在

名前 高杉神威

歳 6歳（18歳）

性別 男の娘 ♪

身長 同い年の男子より少し低い

体重 同い年の男子より少し軽い

誕生日 10月21日

一人称 俺

血液型 A型

職業 神殺し・小学生

好きな食べ物、飲み物

緑茶・母親の手料理

嫌いな食べ物、飲み物

特になし

趣味 散歩、料理

特技 料理

大切なもの 家族

苦手なもの 神、天使、神裂雪

FATE風 ステータス

クラス 神殺し（ゴットブレイカー）

筋力 B - 耐久 C -

敏捷 C + 魔力 /

幸運 C 魅力 S

保有スキル

【直感】 A

戦闘時、未来予知に近い形で危険を察知する能力。

【仕切り直し】D

戦闘から離脱する能力。

【神性】C

神霊適性の高さ。高ければ高いほど、神との交わりが深いことをしめしている。

【黄金律】A

人生でどれだけ金銭がつきまとうかという宿命を示す。

宝具

名称

【孤独な勝利者】

ランクEX

種別

対軍宝具

レンジ

1～99人

最大補足

1000人

発動条件

瀕死状態

発動キーの詠唱

ランク表

EX	↓創造神
S	↓上級神・魔神
A	↓中級神・魔王
B	↓下級神・堕天使
C	↓大天使・大悪魔
D	↓天使・悪魔
E	↓達人
F	↓一般

〔+は一時的に1ランクup
-は一時的に1ランクdown〕

□ 第9話 □ (前書き)

やっとこさ更新、つ、疲れた。ども、東方不敗です。

今回で、やっと原作開始です。

ただ原作キャラはこんなじゃない!!!
となるかも知れません。

ここはこうした方がいいやアドバイスなどは非言って下さい。
駄作ですが第9話
どうぞ。

□ 第9話 □

くく 第9話 くく

皆さん、お久しぶり。

この小説の主人公、高杉神威16歳だ。

あれから俺は高校生になった。

え？、時間が飛びすぎだって？それは気のせいだ、深く考えるな。

まあ、あれから10年いろんな事があった。

闘いで死にかけたり両親に女装させられたり、また闘って死にかけたり、また女装させられたりまた、.....

.....あれ？その2つしか
思い出せないのは何故だ？もっと他にあったはずなんだ！！！！良い
思い出が！！！！

思い出せ、思い出すんだ俺！！！！！！

うおおおおお！！！！！！！！！

30分後

黒歴史がああああ！！！！！！！！

1時間後

はあ、はあはあ。な、何とか収まった。すまない、良い思い出じゃなく、黒歴史が出てきてしまった。

と、とりあえず話を変えよう。べ、別にもう思い出たくない訳じゃないからな……………止めよう。ツンデレは男がするもんじやねえ。

ゴホン。

まあなんだ、もう原作開始だ。前よりかは強くなっただが、これからは、もっと厄介事が増える、面倒だなホントに。

神威「はあ…。」

？「何、ため息吐いてんだ？」

神威「別に。何でもねえよ、『歩』。」

歩「そうか？ならいいけどよ。」

コイツは『相川歩』。

知つての通り、これゾンの主人公だ。

歩とは中学の頃からの友達で、いろいろと遊んだりする仲だ。それと訳あって歩の家に居候中だ。

それと、あと一人『織戸』って友達も居るが居候の話しとまた今度、話す。

歩「早くコンビニ行こうぜ。」

神威「ああ。」

今俺達は、コンビニに向かっている。歩がコンビニに好きの『コンビニマニア』だからだ。

その俺もコイツのお陰で少しコンビニマニアになってしまったがな。

そんな事を考えている内にコンビニに着いた。

神威「今日は新しい商品が出てるのか……………ん？どつした歩？」

歩はコンビニのドアを開けたと思ったら、いきなり、

歩「すみません。もののけ姫を信じますか？」

……………何言つてんだコイツ。いきなり、銀髪の女の子の方に行っ
たと思ったら変な事言い出しやがった。

しかも顔、背けられたし。

あ、落ち込みやがった。だったら最初からやるなよ。

神威「お前、バカだろ。いくら何でもナンパにその言葉は無いぞ。初対面相手にもののけ姫ってどこのジブリ好きだ。」

歩「ちよつと間違えたただけだ！！そうだ！見てろよ神威、この変な空気を吹き飛ばしてやるよ！！」

そう言つて歩は走り出した。

今度は、何する気だよ。

歩「見る！！俺のツ、ウルトラC……　　グキ　　あああああああ
っ！！　足首があああああっ！！」

走り出して、そのまま足首捻つて滑る。体張りやがって、芸人の鏡
だな。（神威は勘違いをしています。）

俺は足首を抑えて地面に倒れてピクピクしてる步と、ふるふる震えている女の子の所に歩いた。

とりあえず……………。

神威「久しぶり、『ユー』。」

そう言って俺は、銀髪に西洋の鎧と籠手を付けた女の子に話しかけた。

ユー『久しぶり』

ユーは紙に文字を書いて見せてた。

歩「って、神威の知り合いか？」

神威「ん？……………ああ、まあな。」

コイツ、スゲーな。もう足首直ったのかよ。ギャグ補正か？

クイクイ

ユーは歩の服を引っ張り、

ユー『面白かった』

歩「……へ？」

意外にユーには面白かったようだな。

神威「良かったな。」

歩「あ……ああ。」

カキカキ

また書き始めて、

ユー『だから二度とするな』

そう書かれていた。

それを見た俺は、とてつもなく悲しくなった。

歩「??、どうした？」

神威「いや、何でない。」

そんなやり取りをしていると。

ユー「あなたは何者？」

ユーは歩にそう書いた紙を突き出した。

それを見た歩は、

歩「……………。どんな人間に見える？」

神威「何言ってるんだよ。」

歩「まあ、いいだろう？」

神威「はあ、ユー。とりあえず何か書いてくれるか？」

俺がユーにそう言つと、

コク

頷いき、歩の横を見て回り。

ユー『どう見ても怪しいバカ』

と書かれていて、それを見た俺と歩は、

神威・歩「あっはっは（確かにノそうだな）！！！！！」

大笑いした。

少し落ち着いて、俺はユーに。

神威「ユー、腹減ってないか？歩が何か買ってきてやるってさ。」

歩「俺かよ！！！」

神威「うるさい。んで、何がいい？」

ユー『ファミチキ』

神威「だってさ、歩。早く買ってきて来い。」

歩「分かったよ。ちょっと待ってくれ。」

歩は渋々コンビニ入って行った。

歩がコンビニに入っただけを見た俺はユーに喋りかけた。

神威「本当に久しぶりだね、ユー。」

ユー『さっきと話し方が違う』

え？そうだった？？

神威「そう？？多分、ユーにだけだと思っよ？」

俺がそう言つとユーは少しだけ頬を赤く染めた。

ユー、可愛いな。

ユー『何で？』

神威「何でだろうね？」

ユー『答えになってない』

神威「じゃあ、秘密」

ユー『分かった』

……あれ？もうちょっと続けたかったんだけどな。

そうしていると。

歩「買ってきたぞ。」

神威「ああ。ほらユー、ファミチキ。」

歩からファミチキを受け取りそのままユーに渡す。

はむはむ

歩「うまいか？」

はむっ

歩がユーに聞くが、ユーはファミチキに夢中だった。

歩「俺、そろそろ帰るは、神威はどうする？」

歩は立ち上がりながら聞いてきた。

神威「俺は散歩してから帰るわ。」

俺も立ち上がりながら歩に言った。

歩「そうか。じゃあまたな！」

神威「ああ、また後で。」

ユー『気をつけて』

俺は歩とは別な方に歩いていった。

少ししてから、俺は立ち止まった。

神威「何か嫌な予感がするな。」

さつきから、嫌な感じが身体に纏わりついていた。

神威「何なんだ？ いったい。……………まさか！！！」

最初から臆気に覚えているだった原作は、もう16年も経ってる俺にはほぼ無いと言ってよかった。

だが、直感的に今、俺は少しだけ原作を思い出し、歩が居るで在ろう所に走り出した。

そこは住宅地の一軒家。
そこに俺はいた。

神威「多分、ここだ。」

何故だか分かんないが、何となくここだと思った。

神威「とりあえず、入るか。」

自分でも不法侵入と分かっているがそんな事を言ってられないので入ることにした。

ガチャ

その家の中は静かだった。最初から人が住んで居かったみたい、そのまま廊下を歩いていく。

歩いていくと、目の前に黒い何がいた。

神威「なんだ？あれ？」

そう言つて黒い何かに近ずいていくと……………それは。

神威「歩！！！」

『歩』だった。床に倒れ胸の真ん中を何かで貫かれ血が溢れていた。

神威「しっかりしろ！！！！歩！！！！」

必死で呼びかけるが返事が無い。

神威「くそ！！どうすりゃいいんだ！！！！」

必死で考えるが全く思いつかない……………その瞬間、

クイクイ

服を引っ張られた気がして後ろを振り向いて見ると、そこには、

神威「ユー。」

ユーが俺の服を引っ張っていた。

神威「ユー。歩が、俺はどうすればいい？どうすればコイツを助けられる！……！」

俺はユーの方を向き聞く。
だが、

ユー『神威じゃ出来ない』

そう書いてユーは俺に見せた。

神威「ッ……！だったらどうすりゃいいんだよ……！」

ユー『私なら出来る』

神威「ユーなら？」

コクン

ユーは頷いて俺の目を見た。
その目はとても力強い目だった。

神威「……………分かった。ユーを信じるよ。俺に出来る事はある?」

ユー「人が居ない場所を教えて」

神威「了解。人が居ない場所だね?ならアソコだな。」

俺は歩を担ぎ上げユーと一緒に家をでた。

着いた場所は墓場。

夜の時間帯に人が全く来ない場所と言えば此処しか無いだろう。

俺は歩を地面に置きユーを見る。

ユー「離れて」

俺はそれに頷いて、ユーと歩から離れる。ユーの『■』が聞こえない所まで。

ユーは俺が離れた事を確認すると歩の方を見て、ユーが何かを喋った。

その瞬間、歩が起き上がる。

歩「あれ……お前——」

神威「歩、大丈夫か！?!」

歩「神威?………お、おう、大丈夫だ。それにしても俺どうしてこんなトコに?」

歩はそんな事を言いながら下を見ると、自分の胸に穴が空いていた。

歩「なッ………なんじゃこりゃあああああああ!?!?!」

まあ確かにびっくりするよな。何せ胸に穴が空いてたらな。

歩「って痛くない。これは……か……神威がやったのか?」

神威「いや、俺じゃない、やったのはユーだ。」

ユーの方を見るとユーは頷く。

ユー『私が死なないようにした』

歩「ははっ、なんだよそれ……俺はゾンビにでもなったのかよ、ネクロマンサーかお前は!!」

歩はユーに聞く……がユーは、

こくん

頷いて、

ユー『私も命を狙われているだから1人で居ない方が良い』

紙を見せる。

歩「ッ……待て待て!! 犯人がまだ俺が生きてるって知ったらまた命を狙いに……!!」

ユー『心配ない私と一緒に居る』

神威「それに俺も居るからな。」

歩に向かってそう言つと、

歩「……お前、この子がネクロマンサーだって事知ってたのか？」

神威「まあな」

歩「何で言わなかったんだよ！！！！」

神威「言つたて信じなかっただろお前。」

実際そうだろう。いきなりこの子はネクロマンサーです。とか言つたら変な目で見られるし、誰も信じないだろ。

歩「うっ。それは、そうだが。……でも、その子がネクロマンサーだって事は、神威、お前何者だよ？」

神威「俺？俺は………まあ神殺しだな。」

歩「はあ？神殺し??」

神威「そうだ。なあ、ユー。」

俺はユーに聞く。

コクン

頷いてくれた。

歩「マジかよ。」

神威「マジだ。とりあえず帰らないか？話しは家に帰ってからしよう。」

俺がそう言つと……。

ユー『神威も一緒？』

ユーがそう質問してきた。

神威「そうだよ。俺は歩の家に居候中だからな。」

俺はユーの質問に答えた。

ユー『分かった』

ユーはそう書くと少しだけ嬉しそうに見えた。

歩「じゃあ帰るか。」

俺と歩とユ一は3人で歩の家に帰った。

□ 第9話 □ (後書き)

作者「どうも、作者の東方不敗です」

神威「どうしたんだ？急に？」

作者「いやね？原作開始だから少しぐらい後書きで話さないじゃん？」

神威「ふん。んで、何を話すんだ？」

作者「……………何話そうか？」

神威「決めてねーのかよ！！」

作者「まあね。でも書いてる途中で気づいた事があるんだ。」

神威「何だよ。」

作者「神威のヒロインってさユーとセラじゃん？」

神威「まあそうなってるな。それがどうした？」

作者「たださ、あとの女の子全員さ歩のヒロインになるわけ？」

神威「……………多分な。」

作者「ただのハーレムだよね？」

神威「それがどうしたんだ？」

作者「いや、何かあんまり納得出来なくてさ。」

神威「何で？」

作者「この小説の主人公お前だよ！？！な、なのに歩に他のヒロインを取られるなんてオリ主そんなんでもいいのか！？！？」

神威「でもお前がアンケートして決めた事じゃん。」

作者「そうなんだよね〜どうしよう？」

神威「俺に聞くなよ。」

作者「ここは読者様の意見を聞いてみようと思う！……！！！」

神威「作者、お前行き当たりばったりだな。」

作者「それは言わない約束だZE」

神威「キモイし約束してねーよ。」

作者「とりあえず、意見を聞かせてくれると作者は大変感謝致しますのでよろしくお願いします。」

神威「読者の皆様こんな駄作者ですがどうか見捨てないでくれ。」

作者「それでは、」

神威「次の話まで、」

作・神「さよなら……！！！」

□ 第10話 □ (前書き)

初めてこんなに書いた。
東方不敗です。

しかし疲れた、手が痛い。

まずは、人類最弱さん、泊廻さん前紙さんたまごさん感想ありがとうございます！！！！

これからも頑張っていくのでよろしくお願いします！！！！

では第10話です。
どうぞ。

□ 第10話 □

くく 第10話 く

歩がゾンビになってから1ヶ月、俺と歩がこの高校に入って、初めての夏がやってきた。

梅雨も過ぎた快晴、太陽の光を浴び俺は数学の授業をしっかりと受けていた。

別に前世で受けていて、今更受けなくてもいいのだが成績が良い方が何かと便利なので面倒だが教師の話を聞く。

授業を受けながら前の席を見る、ソイツはぐったりと机の上に倒れていた。

暑いのか？と思いながら窓を見る。その時ちょうど風が窓から流れ込んで夏の日差しには気持ちいい。

窓から流れ込む風を楽しみながら授業を受けていると前から、

歩「神威、カーテン閉めてくれね？」

と、椅子を傾け言ってきた。

神威「分かった。」

俺は席を立ち後ろにあるカーテンを歩の所まで閉める。

歩「サンキュー」後ちよつとで脳みせが力キ氷みたいに溶ける所だったぜ。」

神威「ゾンビだからな。」

歩に聞こえるぐらいの小声でそう言う。

そう、歩はよくアニメやゲーム、映画に出てくるゾンビだ。まあ、もう一つ付け加えるなら『魔装少女』らしい。

男なのに少女。変態だと思っ人も居るだろう、それには色々訳が

在るのだがそれをこれから話そうと思う。

19時20分ぐらいだったと俺は記憶している。

その日も俺と歩は、学校で太陽が去り行くまでのんびりと過ごし、夜を待つて校門を出た。

なんで夜まで待ったのかと疑問に思うだろう。だがさっきも言った通り、歩はゾンビだ。日差しの中を歩いたら、すぐさま地面に倒れる。

それは、居候中の俺には面倒なので、（背負って家まで行くのが）こうして一緒に夜まで待っている。

学校から歩の家までは、歩いて5分の場所にある。何時もは寄り道せずに戻るのだが、その日俺と歩は寄り道をして帰る気分だった。

歩の家の近くの墓場、歩をゾンビにしたところだ。そのせいか歩は

この場所が大好きらしい。そんな俺も能力のせいかな？結構気に入っている。

そうして俺と歩は不謹慎だが墓石の上に腰を下ろし、買ってきた才二ギリを頬張る。

俺と歩はこの時が一番の至福の時だ。

静寂で俺達意外、誰も居らず、のんびりとする。最高だ。

そんな時、歩はテンションが上がっていたのだらう。飲み干した緑茶のペットボトルを思いっきり空へ放り投げた。

俺はそれの投げられたペットボトルをボーッと眺めていた。そのまま眺めていると、何か別のものが光る。

何だ？　と思いながら俺と歩はその場から離れる。

ドゴーン!!!!!!!!!!!!!!

と大きな音がして、さっきまでいた場所に穴が開いていた。

俺と歩はその穴の開いた場所まで近づいてみた。

？「いたたたたたた」

そこには学ランを着たツキノワグマとその上にいる腰に手をあてている女の子がいた。

そして歩の立っている横には、何故かチェーンソウが置いてあった。

ん？？これは13日の金曜日か？だったらどこかにジェイソンが！！！！

などと、思っている間に歩は女の子に声を掛けていた。

歩「大丈夫か？」

？「あ……っ！」

口を大きく開けた女の子は歩の方を指差した。

女の子「あたしの魔装錬器！返せっ！！早く！急げ！！すぐさま刹那の内に早々に早々と即行で！！瞬く間に束の間に一瞬でたちまち今すぐさっさといますぐさま返せ！！」

凄いな良く息継ぎもしないでそんなに早口で言えたもんだ。

歩「待て。待て待て。魔装錬器ってなんだ？」

えーと俺の記憶が正しければ確か、チェーンソウだったはず？

女の子「あんたが持っているそーれーだ！！それがないとあたし攻撃魔法が使えないんだからな！」

とか言ってる間に服が消えていったな。

歩を見ると……うわー、キモイ凄いニヤケてやがる。それに女の子気づいてないし、歩も言わないしな、可哀想だな。確か俺ジャージ持ってたはず。

神威「はい、これを着てくれないかな？」

俺は持っていたジャージを女の子に渡す。

女の子「????何だよ？」

神威「君、服消えてるし、そこの変態は知ってたのに言わなかったからさ。」

女の子「ほえ？」

俺がそう言つと女の子は下を見た、2秒ほどの間を置いた後、頬や耳、顔全体が赤く染まり、俺が手に持っていたジャージを奪つて、

女の子「こつち見んなっ！この変態っ！エロスペシャルがっ！」

あれ？？俺もなのか？

歩「エロスペシャルで……ウォーズマンの必殺技みたいに言つなよ。」

変態歩の代わりに言つてあげたのに、俺もなのか？

女の子「うつさい!!！」

その瞬間歩の顔を思いつきり足蹴にすると、ジャージを着て、近くの墓石に隠れてしまった。

神威「なあ？俺もエロスペシャルなのか？」

俺は女の子に聞いた。

女の子「????何言っただ？あんた女だろ？」

………なるほど。俺はエロスペシャルではないけど、女と間違っているんだな。………なんか、複雑だな。

俺がそうやって落ち込んでいると、

ズガガガガ！………！！！！！！

と音が歩の方からしたので見てみると、墓石に激突していた。

歩は起き上がり、クマと対峙する。

歩が持っていたチェーンソウは手から離れいて、女の子が恐る恐る触ろうとすると、バチッと火花が飛んで拒絶？した。

女の子「痛っ！！なんで！」

何度も何度もチャレンジするが、落ちているチェーンソウに触れない。火花が飛ぶだけだった。

女の子がそうしていると歩が。

歩「一つだけ聞くが、あのクマは何だ？」

女の子「そいつは凶悪女子高生クマツチだ！早く逃げろっ！じゃないとあんたなんかすぐに殺されちゃうんだからなっ！」

これは驚いた、あのクマ、女子高生なのか！！学ラン着てるけど？………もしかして！！？好きな男子の学ランでも盗んで着てるんじゃない？！

歩「凶悪そうに見えんか？」

確かに、可愛いぬいぐるみたいだな。毛並み綺麗だし、モフモフしたいくらいだ。

女の子「ばか！ほんとにばか！あんた相手の力量も測れないねか？これだから、この世界の人間は！あをたもアイツに何か言えよ！！！」

女の子は俺にそう言ってきた。

神威「ふむ。歩、力貸そうか？」

歩「別にいらん。」

神威「だつてさ。」

女の子「なっ！?!」

女の子はびっくりしたようだ。その間に歩はあっけなく吹き飛ばされ、女の子の隠れていた場所に落ちた。

女の子「うわっあ！なんであたしのところにくるんだよ！！分かっただろあんたになんかメガロは倒せないって！！」

女の子は歩に野次を飛ばす。

俺はただ静観している。まあ、歩だし、大丈夫だろ。なにせゾンビだしな。

歩はもう一度、距離を詰めて、真正面から、顔面を鷲掴みにするつもりらしい。

俺はそれをする前に足に力を入れ能力を使う。地面からクマの下脚に槍が出て両脚を貫き固定する。

再びゾンビの腕にクマの手が絡みつく。だが、今度は止まらず逆の学ランの袖を掴んで引き寄せ、もう一方の手でクマの巨大な鼻をつかんだ。

そして月夜に吠えるクマの頭を両手を持ち、首を回す。

ゴギヤ

っという効果音とともに。

そのままクマの首は涎を夜空に飛ばしながら、数回転して止まり、大きな身体をしたクマは、ズシンと音を立てて倒れ込んだ。

人間は力を100%使えないって話を聞いたことがないか？

100%の力を出してしまうと体が耐えられなくなるので脳が勝手に力をセーブするらしい、

ホントの危機が迫った時に、
たまにその力が出せるらしい、火事場のなんとかだな。

だが歩は体が耐えられたりする訳だ。これは、ゾンビだからこそ出来ることだな。

歩「で、あのクマは何なんだ？」

女の子「さっき言ったじゃんかつ！凶悪悪魔男爵クマツチだっ！」

女子高生じゃなくなってる！？！自称だったのか？

女の子「それにしても、B級メガロのクマツチを一撃で倒すなんて
- -」

歩「一撃じゃないだろ。神威にも助けられたし。それに普通首が一回転したら普通死ぬだろ？あれで死なない奴は、今の所一人しか知らないね」

バレてたか。それと歩だけだなそれは。

女の子はクマが着ていた学ランをジャージの上から着て袖を何回も折りたたみ、地面を引きずる。

大きな目は睨みつけるような感じで、口もむすっとしている。それ

と、今俺は気づいたがアホ毛がありそれがやけにペコペコとゆれて
いた。

あのアホ毛は生きているのだろうか？

女の子「あたしの魔装錬器、取って」

すぐ側にあるが、さつきみたいになるのだろう。歩に指示を出して
拾わせる。

歩が触っても電撃は出なかった。

女の子「全く。なんであたしがミストルティンに拒絶されなきゃい
けない訳？」

と、歩に聞いてきたが歩は、

歩「さあ？」

と首を捻った。

女の子「よし、……………ちょっとあんた達の家に連れてけ。電話しな
きゃ」

歩「電話？電話なら……………」どこにあるぞ？」

歩はズボンのポケットから携帯電話を取り出す。

女の子「何よその魔道具……」

黒い携帯電話を前に、一歩あとずさり、バグ転して体を抱くような仕草を見せる。

携帯電話を知らないらしい。歩が突き出すように前に出すと、避けるような動きをみせる。

歩、楽しんでるな。

神威「ただの携帯電話だ。」

女の子「本当か？あたしを騙したらそのクマツチみたいくなるかな」

指差した方を見ると、クマはキラキラと光りの粒子状になり消えていった。

恐っ！！！！

女の子「まあいいやちょい貸せ！」

と言って歩から使い方を説明され、「ふんふん」と頷いて聞いている

た。

使い方が分かったのかどこかに掛ける。

プッププッププ………プッルルル、プルルル、プ-

女の子「あ、大先生ですか？あたしです。リフレイン年ライジング組のハルナです！」

あの子ハルナっていうのか。

歩「なあ神威？」

神威「何だ、歩？」

歩「あいつは多分別の世界から来たんだよな？」

神威「多分な。」

歩「電波って世界を越えるんだな……」

神威「………だな。」

歩「あと、リフレイン年ライジング組ってどんなセンスだよ。」

神威「語呂は最悪だな。」

ハルナ「え？あ、まだ見つかってません……すみません。それよりですね。実はミストルティンがあたしを拒絶するんです。」

さっきも言っただけあのチェーンソウはミストルティンって言うんだな。

ハルナ「え、はい。こう、ばちばちと。あ、はい。魔力枯渇ですか。なるほど……まさか！こんな世界の人間がそんな魔力持っている訳ないじゃないですか！」

ハルナって子は何か驚いて、ウロウロし、アゴに手をやり、何やら考えているみたいだ。

ハルナ「なるほど。確かに、それしかないですね。わかりました。とりあえずこの世界で出来ることを先にやります。帰る手段は、また……はい。すみません。お忙しいところを……はい。ではまた。」

どうやら話が終わったようだ。歩が手を差し出すと、ぱしっと携帯電話を乱暴に返された。

ハルナ「あなた、あたしの魔力奪っただろ。」

歩を上目遣いで睨みつける。

歩「なんのことだかさっぱりだ。残念だが。」

ハルナ「あんた達何者？この天才美少女悪魔男爵ハルナちゃんの魔力を根こそぎ持っていくなんて、ありえないくらいの魔力がないと出来ないって大先生が言ってた！」

この子自分の事、美少女って確かに美少女だが言うか？、あと悪魔男爵って君、魔装少女じゃなかったのかよ。

ハルナ「さつさと言え！あんた達何者？まさか、この世界の魔法使い！あ、あたしを滅多刺しにするつもりだな！」

君の中の魔法使いはとんだDSの残虐野郎なんだな。

歩「神威、どうする？」

神威「いいんじゃないか？言っても。」

歩「分かった。……俺はゾンビだ。」

ハルナ「ほえ？」

歩「ただの生きる屍。死人だ。」

ハルナ「不死者！不死悪魔だん「悪魔男爵ではない。間違いなく。」

」

歩が途中から台詞を被せた。

しかしこの子は本当に悪魔男爵が好きなんだな。

ハルナ「そう。……なるほど。死人なら剣で刺されても……」

スゴい発想力だ。しかしこの子歩が刺殺されてることを知ってる？

歩が巻き込まれて死んだ連続猟奇殺人事件。

その犯人は歩を剣で刺し殺した、この子はいったい何を知ってるんだ？

歩「おい、お前殺人事件と関係があるのか？」

ハルナ「……じゃあ、あんたもゾンビなのか？」

歩の話を完璧にスルーしたな。まあいいや、歩もあとで聞くだらう。

神威「俺は違う、……俺は神殺した。それと俺は男だ。」

ハルナ「なるほど。神殺しか………って男?! あ、あんた男なのか?!?!」

ビックリするところはそこなんだな。

ハルナ「………こ、こんな顔した奴が男? ありえない。」

流石にそれはひどくないか結構気にしてるんだ。

その時歩が俺の肩に手を置き、笑顔を浮かべながらサムズアップしてきたので、俺は歩の腹をボディブローした。

歩は前のめりに倒れたが、

俺は反省も後悔もしない。

倒れる歩に向かって、

ハルナ「あんた、責任とって貰うからなっ!」

とハルナが言ってきた。

歩「せ……責任、とは?」

歩は腹を押さえ膝を、ガクガクさせながら立つ。

ハルナ「あたしの任務は、この腐った世界でアーティファクトを探し出すこと。それと、魔装少女としてこの世界に現れるメガロを倒すこと」

歩「あー、『魔法少女』ねー。そうじゃないかと思ってたんだ。」

それだったら、あの某白い悪魔がいる、リ。カ。な。は、だよな。

ハルナ「はあっ？あたしは『魔装少女』だ！そんな陳腐なもんと一緒にするな！」

ち、陳腐だと！？！この子絶対いつかあの人に O H A N A S I されるよ！！？！！恐ろし過ぎる。

歩「違いがわからん。で、メガロってのは、あのクマのことだな。」

ハルナ「そう。さっきの恐ろしい奴だ。」

歩「なんであんなのと戦ってるんだ？」

確かに歩でさえ、少し手間取ったのにこんな女の子じゃ命にかかわるだろう。

ハルナ「メガロってのはね、あたしの世界を壊そうとする害虫だ。一匹残らず駆逐しないと、あたしら魔装少女に未来はない。つまり、あたしは戦士な訳。すごいっしょ！」

歩「なるほど、天敵って奴だな。お前の世界を壊したいんなら、なんでわざわざこんな世界に現れるんだ？」

俺でいうと天使とか神か。

ハルナ「じゃあ聞くけど、あんたは自分の家で戦争がしたいのか？」

いや、だからって他人の家でやることではないだろ、どうでもいいが。

ハルナ「とにかく、あたしは戦えなくなっただから、あんたがやれ！」
そう言っただけを差す。

歩「は？」

ぶっ！？！な、何言っただこの子！！？！

ハルナ「あんたは今、現時点を持って魔装少女だっ！光栄だろっ！」

歩にびしつと細い人差し指をさした。

歩が魔装少女……………クツクツク、シ…シユール過ぎる。

歩「待て待て。その、まほ、魔装少女……………だっけ？俺は少女どころか男だぞ？やめたほうがいいって。」

お、男で魔装少女。た、ただの変態だ。

ハルナ「知るかつ！やれっ言ってるだろっ！」

や、ヤバい、わ、笑いが堪えきれない。

歩「考え直せつて。重要なことなんだろう……………つつか密かに笑ってんじゃねえ！！神威！！！！」

神威「い、いやだつて。ぶっ！！！！あっはっは！！！！ダメだ笑いが堪えきれない！！！！！」

歩「なあ？こいつでもなれるんじゃないのか？」

歩がハルナに聞く。

コイツ笑いやがったこと根にもちやがったな！！！！

ハルナ「分からない。でもやってみる価値はあるな。」

歩はミストルティンを渡してくるが、

バチッ

ハルナと同じように火花が散って拒絶された。

歩「な、なんで？」

ハルナ「多分、魔力があんたより少ないからだと思う。」

と、言うことは……………

神威「お前しか、なれないってことだな。」

歩「クツ。」

歩が悔しがってやがる。

ヤバい、めっちゃ嬉しい!!!

俺が何時も以上に喜んでいると、

ハルナ「その間……超スーパー究極ウルトラ不本意だけど、あんた
ん家に居させて貰うからな。」

あれ？喜んでいる内に話進んだみたいだな。

ハルナ「……あんた達、名前は？」

歩「歩だ。相川、歩………ていうか、やっぱり、もう少し考えて…
…」

ハルナ「……アユム。そう、アユムだな。あんたは？」

やっぱり歩はスルーか。

神威「神威。高杉、神威だ。」

ハルナ「カムイだな。」

歩「わかった。その……魔装少女とやらは、やってやる。」歩、諦めやがったな。

ハルナはピヨコンとアホ毛を、弾ませて、したり顔で頷いた。

ハルナ「そうと決まれば早速魔装少女になる練習だ！」

拳を天に突き上げ、小躍りしそうなステップで歩み出した。

歩「ただし、一つ条件がある。」

ハルナ「何？変なことなら、蹴るからな。」

俺も、蹴ろっかな？

歩「俺のことはお兄ちゃんと呼んでくれ。」

それを聞いた俺とハルナは思いつきり蹴った。

しな。しかつしまた厄介事が増えそうだな、まあいいけど、困るのは歩だ

□ 第10話 □ (後書き)

作者「こによによちわ〜!!」

神威「ケ。ちゃんだな。」

作者「です。一度はやってみたいからな。」

神威「分かる人には分かるよな。んで今日は何の話だ？」

作者「今回はちょっとした告知をしたいと思います!!!」

神威「何のだ？」

作者「もうすぐでPVが50,000になるので番外編を書こうと思います!!!!!!」

神威「マジか？」

作者「マジです!!!!」

神威「どんな話なんだ？」

作者「初めての番外編なので主人公がユーと歩と初めての出逢いを書こうと思います！！！！」

作者「歩との話は、ギャグを盛りだくさんに、ユーとの話はラブコメをと考えております。」

神威「お前に出来るのかよ。」

作者「うっ！！あ、あんまり期待はしないで頂くとありがたいです

(汗)」

神威「はあ。まあ頑張れ。」

作者「はい！！頑張ります！！！！」

作者「あと、感想もお待ちしております！！！！」

神威「じゃあ、」

作者「次の話まで、」

作・神「さよなら……!!」

□ 番外編 1 □ (前書き)

今回から少し小説の書き方を変えました。

まずは zero さんたまごさんチロルさん感想ありがとうございます！！！！

今回、グダグダの駄作ですがよろしくお願いします。

では番外編 1 です。
どうぞ。

□ 番外編 1 □

くく 番外編 1 くく

あれは俺が中学校に入っただばかりの頃の話だ。

その日、正確には土曜日だったはず。俺、高杉神威の疲労がピークに達していた日だ。

理由？まあ色々あるが強いて言えば闘いと……… 両親だな。

天使や神との闘い、あれは肉体的にキツイ。精神的にも勿論だが、『両親』に比べれば楽だ。

『両親』

それは、俺にとって恐怖の化身。

朝起きてタンスを開ければ両親により服が女物に変わっていたり、休みの日に母親と出掛ければ行く店は必ずランジェリーショップ。父親はカメラを片手に写真を撮り、もうアルバムが50冊になる。

そして今日も俺の疲労が溜まるのだろう。だから俺はその日両親の精神的攻撃から逃げてきた。

だがピークに達していた所為だろう意識が朦朧としている。

「ヤバい、目が霞む。いや、マジで。」

まあそんな事を言った所でどうにもならないんだが、やっぱり言いたくはなるよな。

「ダメだ。も…う…意識…が。」

そう言って俺の意識が落ちた。

「知らない天井だ。」

ああ、テンプレだ。

うーん、冗談抜きでやってみたがはつきり言って何の意味があるんだろうか？

「お！目が覚めたようだな。」

声が聞こえた方を向くとそこには俺と同じ位の少年がいた。

「お前が助けてくれたのか？」

「まあな。コンビニの帰りに君が倒れてたからな。」

「そうか、だったら礼言わないとな。『ありがとう』。」

俺は満面の笑みでその少年にお礼を言った。

「ッ！！！！あ、ああ。まあ気にするな。」

何故かその少年は顔を真っ赤にし、鼻を押さえていた。

何で顔赤くして鼻押さえてんだよ。

「助けてくれた礼に何かしたいんだが何か無いか？」

俺は助けてくれたその少年に聞いた。

「ん？いや別にいいんだがな？まあ、あるとしたら一つくらいかな？」

「なんだ？言ってくれ。」

「一回でいいんだ。俺の事を『お兄ちゃん』と呼んでくれ。」

.....はあ？

コイツはいったい何を言ってるんだ？

「すまない。よく聞こえなかったんだがもう一回言ってくれるか？」

もしかしたら聞き間違いかも知れないからな。と、とりあえずもう一度聞こう。

「ああいいぞ。俺の事を『お兄ちゃん』と呼んでくれ。」

き、聞き間違いじゃ、な、ないだと!?!
コイツ……………変態か!?!?

「変態が!?!?!?!」

「いきなり変態呼ばわりされた!?!?!」

「当たり前だ!?!?!このド変態野郎!?!?!男の俺に何を言わせようとしてんだ!?!?!」

キモイ!?!男の俺にお兄ちゃんだと!?!殺してやろうか。

「ドが付いた!?!?……………ん?男?!!?」

「あ?……………もしかして俺の性別、間違えてないよな?」

「女の子だろ?!!」

「……………」

「アハッハッハ!?!?!」

「笑ってんじゃね！！！」

ゴッ！！！！

「アベシ！！！」

俺はまず腹を殴る。そのあとに、アイアンクロー・肘鉄・膝十字固め、最後にコブラツイストをかける。

「はあ、早くこの家から出よう。」

俺はこの変態が居る家を出ようとした時に脚を掴まれた。

「ま…待って…くれ、さ…最後に…『お兄ちゃん』…と。」

それを聞き、俺は変態に向かってニツコリと笑って、

「H A N A S E。」

そう言って、今にも息絶えそうな変態に掴まれた脚を振り払った。

俺は今、あの変態の家からでてきて緑茶を飲みながら街を散歩中だ。

「しかし、あの変態どっかで見たことがあるんだよな。」

あれだ、思い出せそうで思い出せないやつだ。モヤモヤする。

どうにか思い出そうとしながら飲み終わった緑茶を道の横に置いてあったゴミ箱に棄てようとして投げたら、通りがかった数人の一人に当たった。

「ッ！！！ああ〜ん？誰だ！！ゴミを俺に当てたのは！！！」

「アイツだ！！！」

ふむ。どうやら当たった奴はリーゼントなど如何にも昔の不良のようだ。

その不良達は近付いてきて、

「お前かア？俺に当てたのは？」

はあ。面倒だ。

「はあ。」

「何ため息ついてんだよ……女のくせによ……！」

コイツ、イマナンツタ。

「……い……っ……た。」

「あ？」

「今、何って……」

「ちょっと待った！！！」

っ！！？」

「誰だ！？！！」

そこに立っていたのは、

「俺は……相k

「さっきのド変態野郎！！！」

最後まで言わせて！！？」

さっきの変態だった。

「アイツ変態なのか。」

「変態だってよ。」

「マジかよ。」

「引くわ。」

不良達にも変態には引いたようだ。

「俺は変態じゃねえ！！！！」

変態が何か言ってるけど変態は変態だから何言っても無意味だと思う。

「んでそのクソでキモイド変態は何か用か？」

あんだけやったのにもう回復してやがる。さすが変態。

「さっきより増えてる！！？！……いや、お前が不良に絡まれているから助けようと思ってさ。」

へえ。ただの変態だと思ったら意外に良い奴だな。

「おいお前！！関係ない奴は消えろ！！！」

俺がゴミを当てた不良が変態に言ってきた。

「関係ならある！！！」

別にないだろ。何言ってるんだよ。

「それは……俺がコイツの『お兄ちゃん』だからだ！……！」

コイツまだ懲りてないのか。後でたつぷりと

『O H A N A S I』

しないとな。

「ブルッ！……何だか寒気が……だ、だから俺はコイツを助ける！……！」

「上等だ！……ソイツの代わりにテメエをボコす！……ヤツちまえ！……！」

ついに始まった変態VS不良達のケンカ……俺はただ傍観しているだけ。

……5分後……

「おら！……！」

「そら！」

「くらえ！……！」

「くたばれ！……！」

「ふげ!!あべ!!ごひゃ!!」

「あははは!!!!!!」

あはは、見事にリンチだな。弱いなら止めればいいのにさ。

「はぁ、笑った笑った。しゃあない、助けるか。」

そう言って一瞬で不良の中心に入り、手加減して腹を殴り気絶させる。

「大丈夫か……ってコイツも気絶してるし。」

とりあえず、コイツ連れて帰るか。助けに来てくれたしな。

俺は変態の脚を掴んでそのまま引きずって帰る。

ん????コレでも俺なりに譲歩した方だぞ?

とりあえず変態の家に着いた。

「手当てもすつか。」

変態を俺が寝てた布団に投げて、傷薬なんかを探す。

「ん……あれ？俺……」

どうやら気づいたようだな。

「気づいたか？」

「お前…つつか俺の家？」

「ここまで運んで（引きずって）きてやったんだよ。」

「そうか、ありがとな。しかし顔が擦りむいたみたいにヒリヒリ

すんのは何でだ？」

「不良達にやられたからだろ。」

「その不良達は？」

「俺がボコしといた。」

「マジかよ、まあ……いいや。お前名前は？」

「お前、急に話変えんなよ。」

「いいだろ、別に。んで、名前は？」

「高杉神威。」

「そうか。俺の名前は、

「変態だろ？」

違う……！はあ、相川歩だ。」

相川、歩……ああ、どこかで見たことあると思ったらしい出し

たコイツ、これゾンの主人公じゃん。

「ふゝん。じゃあ、歩だな。」

「何がだ？」

「お前の呼び方。」

「じゃあ俺は神威だな。」

「好きなように呼べ。」

「だったら俺の事は『お兄ちゃん』と。」

「……………コロスゾ。」

「すいませんでした！……！！！」

綺麗な土下座だった。

これが俺と歩の逢いってやつだ。あんまり歩は今と対して変わってないがな。

ついでにあの後俺は歩にしっかりと

『O H A N A S I』

をしやった。

□ 番外編 1 □ (後書き)

作者「チワッス！！作者の東方不敗です！！！」

神威「主人公の神威だ。」

作者「今回から小説の書き方を変えたんですがどうだったでしょうか？」

神威「何で後書きは変えないんだ？」

作者「何となくです。それといつかは分かりませんが前書きも少し変えようかなと思ってたりします。」

神威「どんな風にだ？」

作者「西尾維新さん風に。」

神威「西尾維新さんが好きなのか？」

作者「はい！！！！特に化物語が大好きです！！！！」

神威「そうか。まあどうでもいいな。」

作者「ですよ〜。」

神威「次の話は言ってた通りまた番外編か？」

作者「です！！！！主人公とユーの話です！！！！これによりユーのキヤラがちょっとおかしくなるかも知れません。」

神威「キーワードに一部キヤラ崩壊って書いてたもんな。」

作者「そゆことです。
では次の」

神威「話まで」

作・神「また（ね／な）！！」

□ 番外編 2 □ (前書き)

更新が遅くなってすみませんでした。

今回から前書きを変えて小説の西尾維新さん風にしてみます。
本編や番外編の内容とは一切関係ありません。

『人は醜いそれ故に人は美しい』

それでは番外編 2
どうぞ。

□ 番外編 2 □

〳〵 番外編 2 〳〵

あれは俺にとって大切な『出逢い』。

どんな事よりも強く記憶に残ってる。

大切な『思い出』

チャオッス♪高杉神威ッス！今年で小学三年になりました！！

「くっ!!」

「そろそろ諦めたらどうだ？」

「誰が!!」

ん??俺が今何してるかだって?そんなもん神と闘ってるに決ま
ってんだろ!!!!

「はあ!!」

能力を使い、地面から石の剣を出し神に袈裟斬りをする。

「ふっ。」

それを神は拳で剣の腹を殴り剣の軌道をズラす。そのまま神威の
懐に入り横腹に蹴りを放つ。

「ガハア!!」

吹き飛ばされないよう脚に力を入れ、何とか踏みとどまる。

くそつ。何でこんな事になってんだよ!!!

散歩して道に迷ったと思ったたら草むらに出て、いきなり神が出てくるって、

それ、どんなポ。モン!?!!

何、神でも捕まえろと!?!?!チャンピオンを目指せというのか
!?!?!?

手持ちにモン。ター。ールなんて無いからな!?!?!

「何を考えてるか知らんが戦闘中にするものではないぞ?」

俺が考えてる内に目の前に神の拳が迫る。それを両腕をクロスして防ぐ。

「ぐっ!?!」

とっさに防いだ事で力が足りずに神威はそのまま吹き飛ばされる。

「ふむ。その程度でダウンか？」

「はあ、はあ。うるさい。」

……………フウ。落ち着け、俺。一々考えても仕方ない。冷静さを失えば勝てるものも勝てなくなる。まずは武器だな……………。

神威は地面に片手を置き、石刀を作り出し、そのまま右手で刀を持ち刀身を左手で支える、右片手平刺突。

『牙突』

最初の天使と神の戦い以降、ただ剣を振るうだけでは直ぐに殺されるのが分かったため、少しでも対抗するために我流ではあるが色々な修行をした。

「フウ。じゃあ行くぞ！！！」

神により身体能力が向上してるので普通の人がする突きより数十倍の威力・速度がでる。

狙う場所は………敵神の『心臓』!!!!!!

「おおお!!!!」

一気に速度を上げ飛び出す、敵神の心臓目掛け右腕を上半身が前のめりになった瞬間に突く。

普通なら一気に速度を上げて、トップスピードは出ないが。神威の身体能力はそれを可能に出来る。

「何!?!?!」

神威の速度は敵神の予想を超え、心臓に吸い込まれるように当たろうとするが、敵神は寸前で上半身を捻り避け、距離を取る。

クッ!!!!後少しだったのに!!!!

「凄まじい刺突だな。爆発的な突進・刺突く速度、それによる威力は心臓に当たれば神であろうと下手をすれば死ぬだろうな。全く持つて見事。」

敵神が言った時に敵神の横腹から血が吹き出す。

「今ので決めたかったんだがな。」

「ふっ。それは残念だな。では次はこちらから行こうか。」

神は拳を握り締め間合いを詰めてくるが、神威は間合いに入れな
いように、牙突で応戦する。

「逃がすと思うな！！！！」

だが神は牙突を左手の甲で受け流し、右拳で殴ろうとするのを神
威は左腕で受け止めようとするが、直感的に石刀で受けとめる。

その瞬間、神の拳が当たった石刀が爆発し砕け散った。

「なっ！！？！」

「驚いたか？これが俺の能力だ。」

厄介だな。アイツの両拳ともさっきみたいな能力がついてる可能
があるしな。

「はあ、面倒だ。」

だけどまだ死にたくないからな足掻かせて貰う。

敵神の拳を喰らえばほぼ一発で致命傷だな、…………『零式』を使
うかしかないか。

神威は牙突を構え直し、神もまた拳を握り構える。

「次で決めようか。」

そう言っ て敵神が飛び出してくる。

「ああ、行く……………ん？ツ！？！..！」

神威が後ろにいた何かに気づく。それは何故か銀髪の子が居
た。

「ここから離れる！！死にたいのか！！..！」

だが時間が足りない、もうすぐそこに神が来ている。

女の子に気を取られて迎撃が遅れた。

ここで俺が避ければ女の子に攻撃が当たる。

「クソつたれ！！！」

神威は両腕を前に固めて防御の形をとる。

「ガア！！！！！」

神の攻撃は神威の防御をすり抜けて、鳩尾に、入った瞬間に爆発した。

神威はそのまま崩れ落ちる。

「興醒めだな。しかしその少女には見られたからには死んで貰う。」

「さ……せ……る……か。」

「ほう、まだ息があるのかだがもう放っておいても死ぬか。」

クツ……今の爆発で喉が焼けて声が出せない。
でもここで死んだら女の子が死んじゃう。

自分でも何でこんなに女の子を逃がしたいのか解らない。

神威が何とか立ち上がろうとすると女の子が前に出る。

「なっ……早……く……逃……げ……ろ。」

何で逃げないんだよ。早く逃げてくれないと俺はもう一度庇うのは無理なんだ。それに意識が徐々に無くなってきてんだよ。

「早……く……逃……げ……てく……れ」

言って神威はその女の子の肩に手を置いて下がらせようとした。

『大丈夫』

そう書かれた紙を見せてきたと思ったら。

「眠って。」

その言葉を女の子から聞いた瞬間に急な眠気に襲われて意識が落ちた。

「ん……………こ…こは？」

俺が起きたらそこは寝室のベットだった。

何故に寝室？何故にベット？何だコレ！！？！

クイクイ

服の袖を誰かが引っ張る。

誰だ？俺は服を引っ張る方を見た。

「君はさっきの？」

そこに居たのはさつき、神との戦いでいた銀髪の少女だった。

『どこも痛い所は無い?』

そう言えばどこも痛くない。喉が焼けた痛みも無い。

「君が直してくれたのか?」

コク

「そっか、ありがとう。そういえばあの神は!?!?!」

『大丈夫、私が倒したから。』

……………マジ?

「……………マジ?」

コク

女の子は力強く頷いた。

はぁ、どうやら本当みたいだな。

「それにしても、ここはいつたいどこなんだ？」

『ここは冥界で私の寝室』

……………Why?

冥界だ…と。まあ神が居るんだから在るのかな？それに女の子の寝室？それにしても殺風景だな…なんて思ったり。でもド、ドキドキする。

って違う！？！…そんな事を考えるんじゃないぞ俺！？！でもこの女の子凄く綺麗な子なんだもん仕方ないさ！…！。

俺が女の子の方を見ると女の子は首を傾げる。

グハッ！…？！

何て破壊力何だ、うゝ今絶対顔が赤いぞ俺。

『大丈夫？』

「だ、だだだだ大丈夫です！！！！はい！！！！」

ヤバイ。どうしたんだ俺！！！！もしかしてこの子の事が好きに

なったのか？

ど、どうする、どうするよ俺！？！

落ち着くんだ。とりあえず先ずは、

「君の名前は？」

『ユークリウッド』ヘルサイズ』

長くない？つつか長くない？とゆうか外人さんなのかな？

「そっか。だったら『ユー』だね？」

『ユー？』

「うん、俺が呼ぶ君の名前。ダメ…かな？」
フルフル

ユーは首を横に振ってくれた。

「良かった。次は俺の名前だね？俺は高杉神威、よろしく。」

俺はユーに握手を求めるとユーも応じてくれた。
それが何よりも嬉しかった。

それから俺とユーは時間も忘れてずっと喋った。
こんな心休まるのはとても久しぶりだった。

『そろそろ寝た方がいい、体は治っても負担はあるから』

「そっか、そうだよな。」

正直言えば、寝るのに彼女と喋れないのが寂しかった。
こんなにもつと話していたいと思うのは俺が彼女、ユーの事が紛れもなく好きなんだと強く思う。

『起きたらまたいっぱい喋ろう』

そう言ってくれただけで俺の心が暖まるを感じる。

「うん、絶対だからね?.....それと『ありがとう』。」

俺はユーとまた喋れる嬉しさでユーに向かって満面の笑顔をした。

『うん』

ユーは顔を赤くして頷きながら言ってくれた。

「じゃあ、オヤスミ」

『オヤスミ』

俺は起きたらまたユーと喋れる喜びを胸に抱いて深い眠りについてた。

「う…うん、はあ。よく寝たな。」

ふあゝ、結構寝た気がするな。

「あれ？そういえばユーは？」

ここってユーの寝室だったはずだから近くに居るのかと思ったん

だけど。

「ん？手紙？」

ベットの横にはテーブルがあり、その上に手紙が置いてあった。

「ふむ。ユーのかな？……後ろに俺の名前がある、何でだ？」

手紙の後ろの端っこには俺の名前がしっかりと書いてあった。

「まあいいか、開けよ。」

俺は手紙を開ける。

「何々………っ！………！」

それを見た俺は寢室を飛び出し、最初にいた草むらに向かった。

手紙には………

「拝啓、高杉神威様。」

あなた様がさつき程までお喋りになられた、ユークリウッドへ
ルサイズ様をお預かりしました。

もし会いたいのならば、あなたが最初に居た草原にお越し下さい
ますよう、よろしくお願い致します。』

ここは冥界だ。しかも気絶してあの寝室にいたからどうやって草
原に行ったら分からない。

闇雲に走ってもたどり着けないのは分かってる。だけどそうせず
には要られなかった。

走って数分…何故か道の分かれ道に『矢印』があり、それには『
草原』と書かれていた。

神威は気にせず矢印の方向に向かって走っていった。

着いた場所は俺と敵神が闘っていた草むら。そこに居たのは、何故か二足歩行していて服を着ている犬。詳しく言えば『ドーベルマン』が居た。

「ようこそお出でなさいました、高杉神威様。」

「御託はいい。ユーはどこだ。」

「クッククク。そう焦らずにヘルサイズ様は無事ですよ。」

「もし、ユーに何かしてみろ。俺はお前を塵も残さず……
…『殺す』。」

目の前の敵に殺気を出す。

「ッ！……何とゆう殺気。流石『神殺し』ですね。」

「俺の事、知ってんのか？」

「ええ、まああなたは冥界でも有名ですから。申し遅れました、私

の名は『オストロス』。冥界の番犬ケルベロスの従兄弟に当たる者です。」

「何で冥界の奴がユーを攫うんだ？」

「ヘルサイズ様は力が強過ぎるため、その力を多くの欲する者が要るですよ。」

「その内の1人があんなって訳か。」

「さあ、それはどうでしょうか？」

話して気が付いたんだ、ユーの表情が余りにも乏しい事に、無理やり感情を押し殺しているのを。

聞きたかったけど、聞けなかった。それはユーの心に土足で入る事だと思ったからだ。

この事以外にも他に理由が在るのだろっ。だけど間違いなくこの事にも感情を殺してる理由に入ってるはずなんだ。

「ふざけやがって。ユーに力が在るから狙うのかよ。」

「ええ、あの御方の力は凄まじい。あの御方の血には不老の、手には傷を癒やす力を持っており他にもあります。故に命も狙われています。」

「命…も。」

「そして、近くに居る人達にもその影響がでるんですよ。そんな人の近くにあなたはいます。あなたは嫌になりますか？あなたにも命を狙われる危険があんですよ？」

「だからどうした！！！！そんなの関係ねえ！！！！」

「そうですか。お話は此までにしましょう。さあ、返して欲しくは私を倒しなさい。」

「……………分かった。お前を倒してユーを取り返す！！！！」

「では行きましょう。」

オストロスは前脚？を前に出すと、地面から大量の狼と犬が出現

した。

「命を造り出せるのか？」

「いえいえ、これは私の眷属ですよ。まあ『召喚』と言った方が分かり易いですかね？」

「そうか。まあいい、始めるぞ！！」

神威は地面から石鎌を造り出し構える。

「行きなさい。」

オストロスの号令により初見100匹の狼と犬が神威に一斉に飛びかかる。

「ハア！！！」

それを鎌で横薙にしながら斬りつけていき、オストロスに向かって一直線に走る。

「さすがですね。」

オストロスは一直線に向かってける神威を見ながら次々に召喚していく。

「クッ！……邪魔を……するなあ……！」

それに神威は、脚を地面に叩きつける。

「何！？！」

すると地面から石の棘が全ての狼と犬の腹に突き刺さりそのまま消滅する。

それにより神威を阻むものは何もなくオストロスの首に鎌を当てる。

「これで終わりだ。」

「その様ですね。」

「ユーはどこだ？」

「フッ、あなたの後ろですよ。」

クイクイ

誰かが神威の袖を引っ張る。

「ユー、良かった。」

本当に良かった。

神威は安堵感に満たされる。

『私は大丈夫だから鎌を下ろして』

「でもコイツはユーを攫った奴だよ？」

『大丈夫』

「……………分かった。だがユーに何かしてみろ、只じゃおかないからな。」

「肝に命じます。……………それにしても私が言った通りでしょう？ヘルサイズ様。」

コクン

???何の話だ？

「ユー、何の話なんだ？」

ユーが此方を向き紙を見せる。

『オストロスが言ったの、あなたなら私の事を嫌いにならないでくれるかも知れないって。』

「ヘルサイズ様、後は任せますよ。」

コクン

そう言ってオストロスは消えた。

え？どうゆうこと？

『だからオストロスが私を攫って、神威をおびき寄せた。』

「何でそんな事を？」

俺がユーを嫌いになる分けがない。まだ逢って少ししか経ってないけど俺はユーが大切な人になったんだから。

『神威も聞いたでしょ？私の事。』

「ああ、少しだけな。」

『それを聞いて私を嫌いになったでしょ？』

俺はユーの目に涙が溜まってるのが分かった。

それを見て俺の心が締め上げられる。

「そんな事無いよ。」

フルフル

ユーは首を横に振る。

『きっと私の事をもっと聞けば神威は嫌いになる。』

ついに、ユーの涙が流れた。

俺はユーをとっさに抱き締める。

！?!？

ユーがびっくりしてるけど知ったこっちゃない。

「ユー、話して。俺は絶対にユーを嫌いになったりしないから。」

ユーに泣いて欲しくない。

ただそれだけが俺の心を占めていた。

運命の糸というものはゆらゆらと横に揺れながら前へすすんでいる

揺れあい重なった糸と糸は出会いを生み――

そこに強い魔力の影響があるとその揺れは大きく激しくなる

故に強い魔力を持つ者はそれを抑えなくてはいけない

私の魔力は抑えることが不可能だった

動揺…不安……

心の動きで魔力がすぐに乱れてしまう

だから私は感情を出すことが許されない

言葉を出せないのは私の言葉には力が込められてしまうから

私の言葉を聞いた者はその言葉通りになる

私が寒いと言えばそれを聞いた者は炎の中でも寒さを感じる

私の言葉は重すぎる

いつどの言葉が力に変わるかはわからない

だから一言も発することは許されない

そして言葉が力に変わるとき私の頭に激痛が走るあれはもう……嫌

私の手には傷を治す能力

血液には不老の力があり

心臓は膨大な魔力を放出している

これらの能力は私が死んでも発動出来るだろう

だから私を殺したがる…体だけを手に入れるために

私が狙われる人数は把握できない

殺されそうになったことは数多くある

『これで全て』

話を聴いて俺は絶望した。

自分の所為で人の運命が変わるそのために感情をずっと必死に殺している、

辛い気持ちも、悲しい気持ちも、怒る気持ちも、そして何より嬉しい気持ちも殺している。

俺はそれが悲しくて、悔しくてだからこそ……

『やっぱり嫌いになったでしょ？』

「何でそう思うんだ？」

『私があなたの近くに居ればあなたの運命をねじ曲げてしまうこんなバケモノ…嫌いになる』

この子はやっぱり優しい子なんだな。

「ユー。」

ユーをさつきより強く抱き締める。

「俺はお前の側にいるよ、嫌いにならないよ。だから運命なんて関係ない、そしてバケモノでもないよ？優しくて可愛い女の子だよ。」

ユーも俺の背中に手を回してギュッと俺を抱き締める。

「だから泣かないで。ユーに涙は似合わないから、笑って？」

ユーから離れて手を握る。

そしたらユーは『笑顔』になった。
それは見惚れる位の笑顔だった。

これが俺がユーと出逢い。

この優しい女の子を絶対に守るって誓った日なんだ。

□ 番外編 2 □ (後書き)

作者「皆さん、後書きが始まりますよ。」

神威「ふざけてんの？謝罪は？」

作者「更新が遅くなってすみませんでしたー！！！！！！」

神威「理由は？」

作者「そのゝ実は、どう書いていいか分からなくなりちょっとした無気力になりました」

神威「最低だな。」

作者「面目ない。」

作者「では気を取り直してzeroさん感想ありがとうございます
！！！！それと今回の話はどうだったでしょうか？」

神威「グダグダとしか言いようがない。」

作者「ですよ〜。しかも、ユーじゃなくて主人公の方がキャラ崩壊してるよね若干。」

神威「確かに。」

作者「だから頑張ってヒロインをキャラ崩壊していいことと思います!!!!!!」

神威「いいのかそれ？」

作者「大丈夫だと思いますZ E 旦那」

神威「キモイ。」

作者「からの〜」

神威「キモイ。」

作者「やっぱりですよ〜。」

神威「どうでもいいな。」

作者「と言うわけで次回から本編に戻ります。」

神威「何がどう言うわけなんだよ」

作者「気にしない、気にしない。」

神威「はあ、そうかよ。」

作者「それと息抜きに新しい小説を書くようになって思っております。」

神威「今ので一杯一杯なの？」

作者「はい。まあ息抜き程度だし、不定期更新でしょうな。」

神威「あつそ。」

作者「では次の」

神威「話まで」

神・作「さよなら!!!」

□ 第11話 □ (前書き)

『生きるのに意味なんて無い、だって死んでも世界は変わらないから。』

□ 第11話 □

くく 第11話 くく

と、まあこれが歩が魔装少女になった出来事だ。

ふむ。この事を話していたら次の授業が始まって、もうその授業も終わりのようだ。

「歩、起きろ昼時だ。」

「うん？あゝ分かった。」

次の授業は無く、昼時だ。とりあえず弁当を出そう。

それと俺は歩を起こす。

そこで取り出すのは手作り弁当。まあ作ったのは俺で歩の弁当は天才美少女悪魔男爵ハルナが作った弁当だ。

ハルナの隣で作っていたらハルナが、

「あたし、卵焼きには自信があるんだ！」

と言いながら、意気揚々と作っていたよ『卵焼き』を。

「勘弁してくれ。」

歩が気づいたようだ。俺が歩の弁当を見たらそれは黄色一色の弁当だった。

その歩の弁当は緑でギザギザしたビニール製の仕切りが牧場の柵のように囲って飾ってある。

綺麗に敷き詰めてるな。

「相川。お前が普通の弁当ってめずらしい……」

そこに、一人の男が俺と歩の前に現れた。

こいつの名前は織戸。茶髪でツンツン頭にメガネを掛けた、男子。歩曰わく、どこにでもいるただのウザいクラスメイトらしい。

歩とは保育園の頃からの腐れ縁で、俺とは歩と同じ中学からの友達だ。

「うわあ……」

織戸は歩の弁当を見てドン引きしていた。

「さすがにそのボケは体張りすぎだろ？やりすぎは笑えねえ。」

首を横に振りながら、織戸は隣の席から椅子を引っ張ってきて、極々普通の弁当箱を歩の机に広げる。

「それに対して神威のは凄く旨そうだな。」

織戸は弁当を広げながら俺が食べている弁当を見る。

「まあな。」

俺の弁当はバランスの採れたのだからな。

「何で俺のが卵焼き一色なのに神威のは旨そうな弁当なんだよ！！」
「！」

「自分で作ってるからだボケ。」

そんな事を言うんだつたら自分で作れ。

「はあゝまあいいや。俺、卵焼き好きだからな。」

言い訳してんじゃねーよ。

歩は弁当を食べようとしたら織戸が、

「なあ、相川。」

「ん？なんだ？」

「いつからだっけか？相川、自分の席で食べよって言わなくなったよな。」

「そうなのか歩？」

「じゃあ、自分の席で食べ。こつちくんな。」

「まあ、いいじゃねえか。」

織戸は満足げに笑顔を見せる。どうやら嬉しいようだな。

歩は教室の後ろにある、カギも掛けられない個人ロッカーから割り箸を取った。

何本ストックしてんだろうな？

歩は恐る恐るハルナが作った卵焼きを一口分を口に運び、パクリと食べた。すると、

「ふむっ！」

と変な声を出した。

気持ち悪いなコイツ。

死ねば良いのに。

変態なんだから誰かコイツを捕まえてくれ、そしてもう刑務所から出なければいいのにな。」

「神威。お前心の声漏れてるからな。」

むっ、どうやら漏れてたようだ。

「次からは漏れないように頑張ろう。」

「謝りはしないのか？」

「ハッ！！」

「鼻で笑われた！？！」

俺が謝るのはユーだけだ変態が。

「おい織戸。俺は今、とてつもない卵焼きを持っている。少しでもいいから、その日本人の魂と交換してくれ。マジで。」

と歩が織戸に交渉していた。そうそう、俺の弁当にもハルナの卵焼きは入ってるぞ？弁当作ってる時に味見して美味しかったから、入れて貰ったよ。

「はあ？だったら最初から飯いれてこいよ。変なボケをするから――」

と文句を言いながら、交換をしてくれていた。

俺が交換しないのかだって？するわけ訳ないじゃん。

織戸が卵焼きを食べた瞬間に目を丸くした。

「なんだこりゃ。」

と言いたげな顔を歩に向けて席を立った。

「おい！相川の弁当の卵焼きがすごいぞ！今なら白飯と交換してくれるそうだ！」

織戸がクラスメイトに大声で伝える。歩は満更でもないような笑みを見せているが俺はこの後起きるであろう事に対し歩に贅辞を送った。

まず、その織戸の言葉を聴き、何人かが歩の許へとやってくる。歩は更にニヤケ顔になって交換していた。交換しなければ良かったのにアイツは気付いてないようだ。

今やクラス中が『相手さん家の究極卵焼き』を大盛況であったことで、歩の黄色一色の弁当が、ご飯のみが詰められた弁当と化していた。

そのご飯には所々いろいろなふりかけが付いていたのは各家庭の味なんだろう。

まあ、自業自得以外の何ものでもないな。まさかさっきまで最高級の卵焼きが全て白飯に変貌するとは思わんな。

その歩も苦い顔して何も言わないのは、女子たちが笑顔で「おいしいおいしい」と言っているからだろうな。

そしたら歩は俺の方を向いて、

「神威、おかずを貰えないか？」

と、ほざきやがったので俺は笑顔で言っただけだった。

「I Y A D A」

そしたら歩は崩れ落ちた。

□ 第11話 □（後書き）

作者「やって参りました後書きコーナー！！イエーイ！！！」

神威「誰もやらないからな。」

作者「ノリが悪いぞ、神威。」

神威「うるさい。」

作者「まあいいですよ。まずはたまごさん感想ありがとうございます……！」

神威「ありがとうございます。」

作者「いやーやっぱり感想貰うと嬉しいよね。」

神威「だな。」

作者「では、話を戻してまずは今回から少し話を少なくしていきます。」

神威「確かに今回は少なかったな。」

作者「まあ理由としては前回から言った通り新しい小説を考えていまして、同時進行するところになってしまっ訳です。」

神威「最悪だな。」

作者「すいません！……ですが少なくした分更新スピードを上げようと思います。」

神威「だったらさっさと書けよ。」

作者「頑張らせて頂きます！……！」

神威「もう終わりか？」

作者「ですね。」

作者「じゃあ」

神威「次の話まで」

作・神威「さよなら!!!!!!」

□ 第12話 □ (前書き)

『潔く死ぬのとみっともなく生きるのどっちがいい?』

『見苦しく逃げる』

□ 第12話 □

くく 第12話 くく

午後の授業も無事に終わりを迎えた。俺はノートに重要な事を書き、仕舞う。

まあ、何時もと変わらず歩は寝ていたがな。

この後は太陽が完全に沈むのを待ち、家に帰るだけになる。

それまで俺と歩は夕焼けに照らされたグランドで、部活をしている人を見ながら時間を潰す。

「なあ神威？」

「なんだ？」

「ブルマを考案した人間は偉大だな。その人の気持ちがよくわかる。」

「……………」

ダメだ、コイツ早く何とかしないとユーが危ない。

「無視するなよ。」

歩の話は無視して俺はグランドから教室に目を移す。

今、教室に居るのは俺・歩それと織戸だけ、後は皆や部活などで青春を謳歌している。

そして織戸もカバンを背にして立ち上がり、あくびを一つする。
どうやら帰るようだ。

「相川に神威。そっいやお前ら、最近帰るの遅いな。学校で何やってんだ？」

「「寝てる。」」

「あんだだけ寝てたのにか？それに神威、お前もかよ？」

織戸はケラケラ笑いながら歩の背中を叩く。

俺の場合コイツのお守りだな。

「家が近いから、別に大丈夫だろうけどさ。最近、殺人事件が多いじゃん？それと神威は家、遠いだろ？だから気いつけるよ？」

俺は、織戸に歩の家に居候しているとは言っていない。別に言ったところで意味がないからな。

織戸とが俺と歩を心配したのにも関わらず歩はふつと鼻で笑った。まあ歩にとって織戸はうざいクラスメイトらしいからどうでも良いのだろう。

それにしても殺人事件か。

最近連続殺人事件が頻繁に起こっているな。歩を殺したのもソイツだろう。

「まあ、俺は殺人犯に会いたいけどね。」

コイツ相当根に持ってるな。……当たり前か、誰でも自分を殺した奴を許したりはしない。

「そうそう、忘れてた。会いたいと言えばな、相川。俺の妹の友達なんだけどな、その連続殺人事件に遭遇したらしいんだ。京子っていうんだが、知ってるか？」

……ん？生き残りだと？可笑しいぞ、その連続殺人は生存者が誰一人いなかったはずだ。歩はある意味生存者だが、一回死んでいるんだぞ？

「知らない名前だな。どんな子だ？」

「歳は、妹と同じだから十四だな。中学生にしては少し背が高くて、でも童顔で、胸がデカかったな。俺の妹の数倍可愛い子だ。」

「心当たらないな。神威は？」

「俺もだ。」

「その、京子ちゃんが俺になんの用だよ。」

「ふむふむ。相川は知らないが、京子ちゃんは知っている。つまり、相川に一目惚れと見た！」

にへら。と、織戸は笑顔になる。だがその笑顔は変態だ、目にも現れてる。

やはり変態の友達の変態か。……………ということは俺も変態なのか？

否、断じて否！！！！

俺は変態ではない！！！！

「それだけで決め付けるのは、どうかと思うが。」

……………ありがとう歩。だよな、それだけで決め付けるのはどうかと俺も思う。

「どれだけお前のことを聞かれたか……。絶対お前に恋してるって！両親をなくして可哀そうな中学生の女の子に、好きな男を会わせてやりたいこのダンディズム。わかんねえかな。ま、会うだけいいから、頼むよ、な？」

あ、俺に言ったんじゃないんだな。

織戸が手を合わせてはにかんだ笑顔になる。
それにしても生存者か。手がかりになりそうだな。

「全然OKだ。俺もその子に興味がある。」

「……相川……お前、やっぱりロリコンだよな。」

「仕方ないそれが歩だからな。警察に追放しないと。」

「断じて違う。性的意味で興味がある訳じゃないんだ。お前こそ、手を出してんじゃないのか？あと、神威今すぐその携帯をなおせ。」

「チツ。」

「舌打ち！？！」

「おい相川、お前と一緒にすんなよ。俺は大人な女性が好みなんだ。」

「俺はどちらかと言えば貧乳派というだけであって、ロリコンじゃない。」

「わーった。わーった。そうムキになんなよ。ロリコン。」

「まったくだ。変態ロリコン。」

「よし。お前らが今、一番好きなものを教えてくれ。――全力でバカにしてやるから。」

「誰が教えるかこのロリコンが言いふらすぞ」

「すみません。それだけは止めて下さい。」

余計な事を言うからだ。

俺の一番好きなものはユーだからなバカにした瞬間この世から消す。

「とにかく、だ。今日にでも会いたいってうるさいんだ。」

「わかった。明日の夕方でもいいなら、会いにいかせて貰うよ。神威もそれでいいよな?」

「ああ。」

「いくと言えば、最近相川ん家行ってねえな。昔はあんなに通いつめたのに。」

「久々に寄っていいか？」

歩の家に今来たらユーとハルナが居るな。流石に困るなそれは、この先もずっと。

「ダメだ。ほら、……色々大変なんだよ。一人暮らしたのは気楽なもんだが、忙しいんだよ。」

歩も今来たら困るようだな。

「それは仕方ないな……。」

織戸は悲しそうな顔をして目を窓の外に向ける。外では部活で汗を流す高校生たちの、とても楽しそうな声が聞こえてくる。

「すまん。そうだ、今度ボウリングでもいくか？今の俺は勝てんだろうがな。神威もいいよな？」

「何で俺も行かなきゃならないんだよ。」

「まあ、そう言っつなよ。」

「はあ、分かったよ。」

「よっしゃ！久々な漫画本一冊賭けて勝負だ！明後日いこうぜ！」

織戸は腕をぐりんぐりん回して、口の端を吊り上げて笑う。織戸は、ボウリングが大好きらしい。

こうして、その後も他愛ないお喋りを楽しんから、織戸は退室していった。足音が消えるのを聞きながら、教室を見渡す。

他の人が居ない教室は静かで居たときはまったく違う印象を出す……そんな事を考えていると。

「ん？なんだあれ？」

歩が何かを見つけたようで、俺も外に顔を向ける。

すると耳障りのする激しい音を立てて窓を破り、何かが教室に突っ込んできた。煙が無くなるとそれはザリガニだった。

学ランを着た、人より大きいサイズの怪物。まあメガロだな。

「魔装少女の魔力を感じてきてみれば……。」

ザリガニは学ランに降りかかったた窓ガラスの破片をハサミで叩き落しながらキョロキョロと教室内を見回す。そしてそのクリとした可愛いらしい丸い目を歩に向け、

「魔装……少女………？」

どうやら腑に落ちないようで首を傾げる。

まあ、言いたい事は分かるがな。

「何者だ？男の魔装少女とは珍しい。それに、ずいぶん小さい魔力だ。貴様、本当に魔装少女か？」

珍しいっていう事は他にも居るのかよ、男の魔装少女が。

「否定したいんだが、一応魔装少女ということになっている。」

実際、心の中はきっと嬉しいはずだ。何せ変態だから。

「おい神威。今失礼な事考えなかった？」

「いや、何も。」

変態は勘も良いようだな。

「……まあいい、この辺りには複数の反応があるな。そちらに期待しよう。」

『複数』？魔装少女は歩とハルナの二人だけの筈だ、他にも魔装少女がこの世界に来て居るのか？

「ん？一つはここに向かっておるな……好都合だ。魔装少女を二人も殺せるとはな。」

そのとき、ゆらゆらと風に揺れているカーテンの横に、ソイツは現れてた。

Tシャツにストライプのパンツ一枚。手にチェーンソウと持った格好で、ハルナは開いた窓から現れた。

ズボンぐらい履けよ。

「アユム！何やってんの！早くメガロをけちよんけちよんにしろ！」

『けちよんけちよん』って言うと、ボコボコにしろっていう事な

のか？

といか歩の家にはズボンも無かったけ？流石、変態！！！！やっぱ警察に後で通報しないと。

「ふおっふおっ！これはこれは！またハズレだったか！残りに期待させて貰うとしよう……貴様らを殺してな！」

ザリガニのメガロはハサミをガチガチ動かしながら笑った。

笑い方からしてバ。タ。星人を連想させるな。根本的に違うけどあれ宇宙忍者だったはずだから。

「アユムにカムイ、早くやつちゃえ！
って、こらっ！こっちみるな！」

苛立ったハルナの言葉を聞いて歩と俺は席を立ちザリガニと対峙する。

ハルナが赤い顔をしていたのは、どうやらパンツが見えてしまっているのが恥ずかしいようだ。

ズボンを今度買って上げよう。

「そんなことより、この教室はどうなる？」

確かに。窓ガラスは割れてるは机や椅子も壊れたり、散乱してるからな。

「はん。そんなのあんたが直せる。魔装少女なんだから。」 便利だなく魔装少女。

「それなら安心だ。とりあえず、あのザリガニだな？」

「そう、あいつこそダブルA級メガロ、魔法使いザリー」

それを言うなら魔法使いザリーだろ。

「違った。極悪非道のザリーだったかな？」

どこを間違えたら極悪非道が魔法使いになる。しかも疑問系って、自信ないのか？

「ふおっふおっふお！さあ、始めようかつ！」

突如として、ザリガニを中心にぶっと生暖かい一陣の風が吹いた。

何かを解放したのか？身体にまとわりつくような、紫色の気味の悪い風。すると、ハルナが、

「うくっ」

っと低い声を出し、体を抱く。

「何、これ……嘘。」

「どうした？大丈夫か？」

「ア、ユム……何このゾクゾクした感じ……。」

ザリガニが一步こちらへ近ずくと、ハルナが目を閉じ、ビクリと肩を上げた。

「お前、もしかして怖いのか？」

「ふ、ふざけんな！あたしが、メガロに恐怖するなんて……そんな……。」

そこで、ハルナの言葉が切れる。力が抜けたようにペタンと座り込んでしまう。

眉間にシワを寄せ、奥歯を噛みしめ、震えを押さえようとしていた。

そこで歩が距離を詰めて攻撃しようとするが、歩の手首から先はザリ―に攻撃する前に地面へと落ちた。

「ふおおう？見かけによらず、なかなかやるな……男の魔装少女よ！」

目を大きなハサミで押さえながら、ふおっふおっふおと笑う。

「アユム！」

ハルナ叫び声が教室き響く。ハルナが心配するのは無理もない。なにせ歩の手首から血がしたたり、手首から先は床に落ちてしまっているんだから。

ザリ―は動きが早く、簡単に挟まれてしまったようだ。かわりに片目を潰したようだ。

「俺を忘れるなよ？」

俺は歩が距離を詰めた瞬間に石剣を作り出しザリーの横に回り込んで攻撃を繰り出す。

「ふおっ！?!」

だがザリーは石剣をハサミで受け止めたが、そのハサミを切り裂いた。

ザリーは反対のハサミで俺を攻撃するが、バックステップで歩の所まで下がる。

「ふおっふお。貴様、普通の人間ではないな？」

「まあな。歩大丈夫か？」

「ああ、だが右手は困るな……せめて左なら良かったが。」

歩の利き腕は右か。ポタリポタリと歩から出る血の音が時を刻み、ザリーと一緒にじりじりとすり足をする。

ザリーも俺と歩、同じことを思っているようだ。

――隙がない。

下手に動いたら負けだ。

「アユム！さつさと魔装少女になれよな！」

ハルナがいきなり歩にチェーンソウを投げ渡した。

こんな時にか！？！

歩はそれを後ろに飛びながら取ろうと動いた瞬間にザリーが距離を縮める。

「クソ！！！！」

それを俺は間に入って石剣で受け止めるが、吹き飛ばされ、黒板に激突する。

「神威！！！！」

歩が吹き飛ばされた俺を呼んだがその歩もザリーにハサミで貫かれ、口から血を出し前屈みになったら頭突き。鼻血を出しながら黒板に背中を打ちつけた。

「呪文を唱えろ！」

ハルナが言った後に歩を横殴りにする。歩は教室の机や椅子を散乱させながら転がった。

その間に俺も黒板から抜け出す。

「魔装少女になるのだけは、嫌だったんだがな。」

「歩。俺が時間を稼ぐさつさと呪文を唱えろ。」

「分かった。」

「ノモブヨ、ヲシ、ハシタワ、ドケダ、グンミーチャ、デー、リブラ！」

歩の呪文を聞きながら俺はザリーと戦うが何せ相手は早すぎる、

当然此方が防戦一方になるが、歩が呪文を詠唱し終わったので距離を取る。

そしたらいきなり歩の制服がはじけるように破れ、光が集まる。

次に光が一つに集まり、歩の身体にコブスレ衣装がコーディネートされる。それはハルナと最初の出逢い頭に着ていたものと同じで、スカートも女の子が着ていれば可愛らしい下着も丸見えになっていた。

それを見て俺は吐き気を催し、鳥肌が立った。

まあ見た目に反して力はそうとう上がっている。

魔装少女となった歩を、ザリーはかなり警戒しているようだ。ハサミの手をボクサーように構え直して、じっと俺と歩の動きを窺っている。

「こらアユム、カムイ！早く……早く行けよなっ！」

ザリーを指差し、アホ毛ピコピコさせながらハルナが叫ぶ。

俺は石剣を新たに作り、歩は左手に持つチェーンソウを大きく振りかぶる。

それに合わせてザリーの手が動いた瞬間に、歩は手首から先のな

い手で右ストレートを叩き込み、俺が石剣で切り、ついでに歩が蹴りをお見舞いし、廊下へと吹っ飛ばした。

廊下の壁にもたれかかるように倒れ込むザリーに、チェーンソウを振り下ろす。魔法の力でチェーンソが赤く発光しながら歯が動き出す。

だが流石にチェーンソウは防御される。ハサミでうまく挟み込まれてしまう。

そして歩は殴り飛ばされて、また一定の距離から出方を窺う形になる。

「ふおっふおっ。打たれ強い奴だな。私はこれまで六人の魔装少女を殺したが、貴様が一番厄介だ。その奴もな。それに……………奇怪だ。」

そしてザリーはふっと鼻で笑うような音を立てた。

「それはどうも。奇怪なのはお互い様だろ？」

「それに俺も入れるなよ？」

「いや、お前もだろ。いきなり石の剣何て誰も出せねえよ。」

「……………黙れ。」

「凶星だろ。」

「ザリガニの前にお前を消すぞ。」

「すまん。」

今のでさっきまでピリピリとした廊下の空気が霧散した。

……と言っても直ぐに元に戻るけどな。

狭い廊下では、真っ直ぐ正面から戦うしかない。戦術何て思い付いてもあまり意味は無いだろう。

次の瞬間にザリーの右手が動いた。前に突き出すような形だ。

そしてその大きなハサミが、『飛んだ』。

「うわっっっ!」

まったくビツクリした。

ハサミが切り離しが可能なんてな。

ミサイルのように飛ぶそれを俺と歩が横に飛んでかわそうとしたのだが、そのときに俺と歩は気づいた。

歩がまったくもって情けない声を出した瞬間、背後から同じような情けない叫びを発した人物が居たことに。

□ 第12話 □（後書き）

作者「後書きだよ！！全員集合！！！！」

神威「俺とお前しかいないけどな？」

作者「その通り！！何せ後書きまで奴らを出したら俺の身が保たん
！！！！」

神威「頑張れよ。」

作者「すみません。明日から学校が始まるもので。」

神威「更新はどうなるんだよ？」

作者「できる限り更新はしていくつもりです！！」

神威「そうか」

作者「まあ、他に報告する事は無いので。今回は終わりかな?」

神威「分かった。」

作者「では次の話しまで」

神・作「サヨナラ!!!」

□ 第13話 □ (前書き)

『なによりお前には、速さがたりない』

『ならお前には、速さ以外のすべてがたりない』

□ 第13話 □

くく 第13話 く

そこに居た人物とは……

- - - 織戸だ。

まあ織戸が去ってからザリガニのザリーが来たのは大して時間はたつてないからな。

教室から騒音が聞こえて何があったのかと見に戻ってくるのはあり得ないことではない。

そんな事を考えている間に歩の身体に、ハサミがぶつかった。それはまるでトラックにひかれるような衝撃があった。

歩はあつけないほどに簡単に体が宙に舞い、廊下のは端まで吹き飛ばされ、ハサミはザリーの元に戻った。

「相川……」

織戸は目を丸くして歩を見ている。足や手は震えており、恐怖で動けないのだろう……。

「何だよ、その格好……笑えねえよ」

……そっち？

怖いのはザリガニじゃなくて、歩の格好だったのか！？！！

「早く逃げろ。殺されるぞ」

「織戸、今すぐ逃げろ。」

俺と歩の忠告の言葉が聞こえてないようで、織戸は人形のように固まっている。

「おいハルナ！一般人がいる！頼む！」

歩は教室にまだ居るハルナに呼びかける。ザリーはちらりと教室の方を向く。

――ここだ！

俺と歩は同時に廊下を踏み潰すくらいに強く踏み切り、距離を縮める。

歩は跳び蹴りから入りチェーンソウを振り回す、そして俺は石剣で切り上げる。

それをザリーが避ける……………俺と歩の考えは同じのようでハルナを狙われないようにそのまま廊下の奥まで追いやるように半ば強引に攻める。

ザリーはエビのようにピョンピョンと後ろに飛びながらチェーンソウと石剣をかわす。

「ハルナ！早くあいつを頼む！」

「うつさい。わかったから、あたしに命令すんな」

ハルナは寒気を押さえているのか、腕をさすりながら、ゆっくりと教室から出て行く。

歩の脇腹に裏拳ならぬ裏ハサミが入る。よそ見していた歩が悪いのだが。

ザリガニの口が微笑を浮かべている。ザリーは、勝ち誇ったが。歩はハサミをつかみ、捻り上げながらザリーの巨体を引き倒す。

歩は馬乗りになって、ルビー色の光に包まれたチェーンソウをザリーの襟元に当てた。

「甘いわっ!」

ザリガニの足は二本ではなかったようで。学ランから突き出た何本もの足が歩の身体を貫こうとした。

「お前もな」

それを俺は石剣でザリーの隠してあった足を斬り捨てる。

「ぐおおおお!!!」

「ナイスだ神威!」

歩がチエーソウで音を立ててザリガニの首を削る。ザリーは足を斬られた痛みに耐えている時に、だ。

ザリーの目が驚愕に見開かれ。ザリーは震えるハサミを歩へ向けた。さっきの、すごい勢いでハサミを飛ばす攻撃をする気のようにだ。

だが切り取ったザリガニの首を放り投げる。力を失ったザリーの右ハサミは力なく落ちる。そのとき、歩に向けて放たれるはずだったハサミが

- - 爆発した。

「うおっ
うおっ」

情けない声を上げて、歩は立ち上がる。まるでロケットのように、それを歩の足元を通過していった。それは、ザリガニの最後の悪足掻きのようだ。

俺と歩は後ろを振り返る。

そこにはまだ織戸がいた。

まだいたのかよ。

確か歩がハルナに避難させるようにと言ったはずだが？
聞こえなかったのか？

俺が考え事をしていたら歩がいきなり超低空ダイブをしていた。
ついに頭が狂ったかと思っていたら、ザリガニのザリーが最後に放ったハサミは、一直線に織戸へと目指していたようだ。

俺は気づくのが遅く、出遅れてしまった。普通の人間の織戸では一瞬の内に死んでしまう。

歩が左手に持つチェーンソウを限界まで伸ばし、粒子をキラキラと飛ばしながら直進するハサミを追った。

もう少し。――あとちょっと。そこだ。……そうだ。

――無理だあああ！

全然届いてねええー！！！！

歩が持っているチェーンソウでハサミの軌道をずらすとするが全く持って届かない。

「っけえ！」

だが歩は手首のスナップだけでチェーンソウを投げた。

普通は無理だが、ゾンビの歩は、それを可能にした。

俺と歩の憂いを払うように、チェーンソウはハサミを弾く。ハサミは軌道を変え、廊下の壁を穿つ。

弾け飛ぶコンクリートの破片が、手足を上げた体勢で身体を守ろうとしている織戸に降り注ぐ。

俺は安堵のため息を吐く。

それにしてもハルナはどこに行ったんだ。

「なあ、背の低い女の子見なかったか？」

「え？ああ、あのめっちゃ可愛い子か？赤い顔しながらトイレどこだーってこっちを睨みつけて、教えたら何も言わずにトイレに入っていたけど？」

織戸が廊下の先を見る。そこは俺たちのクラスの横。

トイレって……またこんな時に凄いな感心するわ。

「お前ら、何者なんだ？」

織戸は真剣な目で俺と歩を見る。
歩は俺に目で確認してくるので俺は頷く。

「俺は、すでに死んでる、ただのゾンビさ」

「ゾンビになると、そんな格好になるのかよ？」

まあ、もっともな意見だな。映画とか漫画とかのゾンビはそんな

コスプレみたいな服装はしないな。

「神威は？」

「ん？俺か？……お前等が知っている言葉で言えば『能力者』とかだな。実際は神殺しだが。」

「神殺しって……お前、神様を殺したのか？」

「まあな。」

織戸はあまり納得はしてないようで歩の魔装少女コスチュームの事から俺の能力の事などを順に追って説明していると、トイレからすっきりした表情のハルナが現れた。ぴっぴつと両手を振り、水を払っている。

「あ、終わった？じゃー」

ハルナはすました顔でこっちに来ると、洗ったばかりの手で織戸の額に触った。

すると織戸はその場に倒れ込んだ。

「お、おい、何をしたんだ？」

「記憶操作。この辺一帯は今のあたしじゃ無理だから、あんたがやれ」

「そんなのが出来るなら、先に言えよ。俺と神威は全てを打ち明けてしまったとこれだぞ」

「知るかっ！早くやれって言ってるだろっ！」

「無茶苦茶だな」

「うるさいっ！」

ホントの事を言っただけなのに怒られた。

歩はハルナのわかりにくい指示の下、歩は慣れない魔法を使うべく教室にチェーンソウを向けた。ルビー色の光がチェーンソウから伸び、傷ついた教室を包んだ。

一定範囲の『時空間なんか』を『なんか』させるとかで、記

憶操作もその方法を応用したものらしい。

……聞いてると『なんとか』が多いな。

あれか、考えるな感じろって事なのだろうか？

それでも歩はちゃんと成功させていた。

………凄いな。

教室はザリーが来る前の状態の完全に戻った。

やっぱり便利だな。魔法。戦いの痕跡を消せるわけだ。

カッコいいな魔装少女、あんな格好でなければ俺も憧れたんだがな。

次に歩は寝息を立てて廊下に転がる織戸にチェーンソウを向けた。

ん？……殺す気か！？！

「歩、殺すのだけは止める。お前はまた罪を重ねる気が」

「ちげーよ！ハルナがさつきやったが、それだけじゃ不安なんだよ。つか、またって何だ！またって！俺は一回も罪なんて犯してねえよ！」

「な、なんだと」

「何で驚いてんだよ！？！」

「お前がまだ一回も犯罪を犯してない事にびっくりしたただけだ。気にするな。」

「気にするわ！！」

「うるさいっ！早くやれよなっ！」

また怒られました。
世知辛い世の中だな。

歩はハルナのよくわからない解説を聞きながら、記憶操作を行っ

た。

これで織戸が今回の事を忘れるんだな。

ただ歩のコスプレ姿だけは覚えていて欲しい。

俺は心から切に願った。

□ 第13話 □ (後書き)

作者「後書きコーナー……!!」

神威「はいはい」

作者「何時にもまして、テンション低いな神威」

神威「うるさい」

作者「まあいいや。ではまず、たまご様、zero様、前原圭一様、j.i様感想ありがとうございます……!!」

神威「ありがとうございます……!!」

作者「……態度違うない？」

神威「当たり前だ」

作者「そ、そうですか。………そつだ今日は色々報告があるんですよ……!!」

神威「何だ？」

作者「まずたまご様から頂き物があるんです！！それは……
テレッテッテッテレ〜」

性転換薬500ml」

神威「はあ！！？！」

作者「いやゝありがたい。初めての頂き物感謝します！！！」

神威「おい、それをどうする気だ。」

作者「……………テヘ」

神威「殺す！！！！！」

作者「ほゝそんな事を申しますか？そんな事言っていいんですか？」

神威「グウ！！！」

作者「ほら言うことあるだろ？言いなよ？」

神威「ヌググッ！！」

作者「うゝん何て？」

神威「……て……け………か。」

作者「聞こえないな？」

作者「や、止めて頂けませんか。」

作者「だが断る！！！」

神威「があああああ！！！」

作者「まあそれは置いといて、次の報告を。」

神威「はあ、はあはあ。」

作者「大丈夫？落ち付いた？」

神威（ギロツ！！）

作者「（サツ）え〜とですね。次の報告は10万PVを越しました！！（汗）」

神威「……………」

作者「で、ですから、番外編をし、します！！ま、まあまだ何を書くかき、決めてませんがもう少ししてから書きます。（汗）」

神威「……………」

作者「さ、最後の報告を（汗）」

神威「……………」

作者「えっとですね。新しい小説の報告です。只今書いてるこの小説の他にオリジナルの小説を書いています。それと、もう一つ、リカルなのはの小説を書きます。よろしければ見て下さい。」

神威「……………」

作者「か、神威さん？（汗）」

神威「（ボソ）死ねよ。」

作者「ヒイ！！！（泣）」

神威「……………」

作者「か、神威様、ば、番外編でユーとラブラブの話も考えますから、き、機嫌を直してください！！（泣）」

神威「（バツ）絶対だぞ？」

作者「は、はい！！！」

神威「ならいい。」

作者「（ホッ）それでは、サヨナラ」

□ 第14話 □ (前書き)

□ 第14話 □

ザリガニの襲撃から間もなく、歩は人目をきにしながら家へと帰った。

なぜなら、あのコスプレを解除すると裸になるらしい。

あの服か裸かどっちか選ばないといけない。

俺はどちらでもいいから人目について警察に逮捕されて欲しいと思う。

まあ横で歩いてるのはTシャツにパンツ一枚の裸足の子だし、もう1人は男なのにコスプレして、手にはチェーンソウ。

何コレ怖い、怖すぎる。

一緒に歩いてるのさえ嫌になってくる。街中でこんな奴が居れば俺はすぐさま通報が目を逸らすに違いない。

そんなこんなで、あえて選んだのは暗くて静かで狭い道を3人で歩く。車も通らないほどの細い道。ここを通り抜ければ歩の家まですぐだ。

やっとか。と思っていると、歩が、

「お前、魔法の世界にでも帰れよ」

「はあ？あたしの世界にはヴィリエってカッコイイ名前が付いてんの！意外な言葉で表現すんな！」

「わかった。わかったから、やめろ！」

ハルナは歩の鼻の下に親指を押し当て、ポケットティッシュを開けるように左右に摩擦させる。

痛そうだな。

「とにかく、ヴィリエってところに帰れ」

「は？帰れる訳ないじゃんか！」

当たり前のことを聞いてくるなど言いたげな、嫌な顔を歩にした。

「なぜ？」

「それは俺も思っ」

「あんたが魔力を奪ったせいで帰れないの！そんなくらいわかれよなっ！」

歩の所為らしい。最低だな。

「最低だな歩」

「俺の所為かよ！……ともかくなんとか帰る方法はないのか？手伝ってやるから」

「じゃあ、魔力返せ」

「どうやって？」

「知るかっ！なんとかしろよなっ！」

それっきり、ハルナはそっぽを向いてしまい、歩はわしゃわしゃと自分の髪を掻き乱した。俺はそれを見て苦笑いした。

目の前にあるのが歩の家だが、五十、六十坪だったか？
確かその位だったはず二階建て住宅だ。

今この家にいるのは3人、いやハルナを入れれば4人か。

歩の両親は新婚旅行という名目で、もう5年ほど帰って来てないらしい。

弟もいるらしく、その弟は歩の両親についていたらしい。そんな歩は1人東京に残ったんだ。

そういえば俺の両親の話をしてないな？少しだけしよう。

まあ、俺の両親は海外で仕事をしている。

それで俺の両親は親バカだから俺も海外に無理やり連れて行こうとしたんだが当時俺は中学生であつたため遠慮した。

そんな両親は俺の1人暮らしが心配らしくてことある事に電話をしてくるので、うんざりしてた時に知り合いだった歩の家に居候させてもらったって訳だ。

家に着いたので、中に入る。何故だか知らんが歩はポケットとしていたので先に入って鍵を閉めようとしたら、

「鍵を閉めるな！」

と怒られた。

何故だ、変態コスプレ野郎と言うなの変質者が家に入ってくるから鍵を閉めようとしただけなのに。

家に入ってから俺は居間に向かう。ハルナは先に入っていてどこ行ったか知らんが歩は玄関にチェーンソウを置いて、変身を解除して裸になってからそのまま二階に上がった。

はつきり言おう……キモイと。

いきなり変身を解きやがったから歩が二階に上がる前について反射的に殴ってしまったよ。

当たり前だがこれに俺は反省も後悔もしてない。

何か歩が「り、理不尽だ」とかぬかしやがったがそれを無視して俺は居間に入る。

居間の中は四角い大きなテーブルと大きなプラズマテレビが置いてある。

今日もバラエティ番組の楽しそうな笑い声がテレビから聞こえて

くる。

その前で湯飲みを持ちながらじっと正座しているのは、1人の少女。

「ただいま、ユー」

その少女に俺は笑顔で話しかける。

ユーは俺の方を向いき小さく頷いて、またテレビをじっと見つめる。

ただユーは頷いた時、少しだけ笑ったような気がした。

ユーの隣に座って一緒にバラエティ番組を見ていたら、歩が入ってきた。

「今日は大丈夫だったか？」

ユーは歩に目だけを動かして歩を確認すると、一つ頷いた。

そのままユーは向きを変えずに持っていた湯飲みを四角いテーブルの上に置き、右手で横に転がっている黒のボールペンを手に取り、左手でテーブルにあるメモを一枚切り離れた。

メモの上にボールペンを置く。そして、トントンと2回、テーブルをノックする。

これはメモを見るといふ合図だ。

そのメモには、丸ゴシック体のような字体で、こう書いてた。

『飯の用意を』

『ユー、お腹空ちゅった。ねーお兄ちゃん。何か作って？ダメ、かな？』

……今のは歩の脳内副音声だ。

最初の方がユーの書いた方でもう一つが歩の妄想だ。

ユーの言葉を可愛らしく妄想するそうだ。

何故だか分からんが俺にまで聞こえてくるから謎だ。

「何か食べたいものは？」

その間に、メモが一枚切り離され、すぐさま2回、ボールペンがテーブルを叩く。

『スティーブン・セガール』

『ユーね、どうしてもスティーブン』

「ユー？それは食べ物じゃあないよ？」

すまん。限界だ。

いくらなんでもそれは無理だ。 歩の脳内副音声が中断してしまうぐらいに危ない。

俺が口を挟まなかったらどうなっていたか。

俺と歩がぶるぶると首を振り、さっきの事を振り払う。

するとそこにハルナが現れた。格好はさっきとあまり変わってないが、裾を何度も折ったジーパンを履いていた。

ハルナは歩の横を通り抜け、ユーの右横、歩とは反対側であぐらをかき、テーブルに肘をついてユーへ視線を向ける。

それは珍獣でも見るような眼差しだった。

ユーはハルナのことをなんとも思っていないのか、そんな嘗め回すような視線を浴びても動じることはない。

静かにお茶をすすっている。

昨日、俺と歩がハルナを連れて帰ったときもこんな感じだった。

歩がハルナを紹介しても、目を向けることもしない。

ハルナも声を掛ける事はしないで、今みたいに、じっと見ている。

歩が「ハルナ、ユーが気になるのか？」と聞いても、「別に」と

素っ気ない返事をするだけだし、「ユー、お前は魔装少女と関係あるのか?」と聞いても完全に無視。

俺は俺でそれをだつた見てただけだし、途中で歩が助けを求めて来ても気づかないふりしてたから歩が落ち込んだ。
実際どうでも良かったし。

「アユム、ご飯まだ? お腹空いたんだけど?」

『肉がいい』

「俺もユーと同じだ」

「豚キムチでいいな?」

「うん。それでいい」

ハルナは笑顔を見せると歩はにやけた顔になった。
変態が、下心が丸見えだ。

『素敵』

『ほんと！やったあ！お兄ちゃん大好き！』

……いつも思うが歩の解読は気持ち悪いな。
頭が逝つてゐる奴みたいで嫌だ、マジで。

「神威は？」

「何がだ？」

「いや、笑顔で何か誉めてくれよ」

コイツ本当に頭が逝つてやがるな。
顔がにやけ過ぎて歩を見てると吐き氣してきた。

「わかったよ。……さつさと飯を作れ、K A S U」

一応、笑顔で応えてやったから歩は満足だろ。
誉める？俺の言葉に歩を誉めるものは一つもない。

そのまま歩は燃え尽きたボクサーのように真っ白になりながらト
ボトボと台所に歩いていった。

□ 第14話 □（後書き）

作者「作者と」

神威「神威の」

作・神「後書きコーナー!!」

作者「h a k i様、たまご様、感想ありがとうございます!!!!!!」

神威「ありがとうございます!!!!!!」

作者「ではでは、今回の話はまあ普通でしたね」

神威「おい、番外編はどうした?」

作者「それはですね〜。まだ決まっていなくてですね〜」

神威「約束が違っぞ」

作者「まあまあ。いつか絶対に書きますから」

神威「納得いかん」

作者「すみません」

神威「はあゝ。まあいい、それと前書きはどうした？」

作者「うつ・・・それは、あの・・・ネタが出なかったんです（涙）」

神威「自業自得だろ。そもそもお前、そつゆうの苦手だろ」

作者「でも、書きたかったんだーーーー！！！！」

神威「ダメだコイツ早くなんとかしないと」

作者「それはそうと、今私は新しい小説、リリカルなのは書いてます。よろしければそちらの方も見て下さい」

神威「全くの駄作だが見てくれるとありがたい」

作者「あと、こんな番外編を書いて欲しいなどの要望をお待ちします！うまく書けるか分かりませんが、頑張りますのでよろしくお願いします！」

神威「もう終わりか？」

作者「あい！」

神威「じゃあ次の話まで」

作・神「さよなら！」

□ 第15話 □ (前書き)

『正義の対義語ってなんだと思う?』

『正義じゃね?』

『じゃあ正義の類義語って?』
『狂気だろ』

□ 第15話 □

居間で四角いテーブルを囲みながら、みんなで食事だ。

テーブルの上には、ご飯が盛られた3人分の茶碗と味噌汁。そしてかなり多めに作られた豚キムチが並んでいる。

歩の座る場所の横には炊飯器と鍋がある。

俺、ユ一、ハルナのおかわりを歩がよそうからだ。

なぜ、茶碗と味噌汁が3人分かと言うと、歩はコンビニ弁当で十分らしい。

『ハンバーグ弁当になんの不満があると言うんだ？ コンビニ弁当を笑う奴にはゾンビの奥義にて応えねばなるまい』

とか言ってたし。

まあ、ハンバーグ弁当は確かに旨いな。

それにしてもゾンビの奥義ってなんだろうな？

「アユム、おかわり！」

元氣良くハルナが茶碗を歩に渡す。ついでにユ一もおかわりしてる。

俺は味噌汁をおかわりするか。

「歩、味噌汁」

「はいはい」

言って歩は味噌汁をつぐ。

「この世界のご飯がこんなに魔力回復にいいなんて知らなかったなあ。もうミストルティンに拒絶もされないし、このままだとすぐに魔装少女に戻るかも！　かもかも！」

笑顔で豚キムチを突っついている。

動くたびに頭のとっぺんでアホ毛が揺れる。

どうなってるんだろうな？

アレ。

神経通ってるのか？

切ったらどうなるだろう？

「そう言えば、今日の卵焼き、うまかったぞ」

歩はにっこりと微笑んでハルナの頭を撫でた。

「確かに。ハルナが入れてくれた卵焼きとっても美味しかった」

俺はウンウンと頷きながら豚キムチを食べる。

すると、

クイクイ。

袖を引っ張られる感じがした。見てみるとユーが引っ張っていた。

「どうしたの？ ユー」

『美味しかった？』

「卵焼き？」

そう質問すると コクリ。と頷いた。

「そうだね。美味しかったよ？ユーが作ってくれた卵焼き」

そう言って笑顔を向ける。

そうなのだ。

実は俺の弁当の中にはユーが作ってくれた卵焼きが入っていたのだ。

朝にハルナと俺が弁当を作っていたらユーが起きてきて『私も作りたい』と言ってきたのでハルナと同じ卵焼きを作ってまらおと思
い、作り方を教えて一緒に作ったのだ。

歩の弁当の中にユーの卵焼きを入れたかだって？

俺がそんな事をするとも？

ユーの卵焼きは俺だけの物だ。

俺が言った感想にユーは嬉しそうに笑ってくれた。

そんなやり取りをしていると。

「あ、当たり前だ。あたしを誰だと思ってんだよ」

ハルナが頭を撫でられているときはおとなしい。

歩はいつの間にかニヤニヤ気持ち悪いほどのゾンビスマイルをハルナに向けていた。

「何笑ってんだよ。気持ち悪い・・・死ね！　バーカっ！」

頬を紅潮させて罵詈雑言の嵐が起こる。

ふむ。

照れ隠しか。

とか思いながら味噌汁を飲む。

・・・そのとき。

パン。

と乾いた音がして、歩は驚愕に目を見開いた。

何故かというと、ユーが身を乗り出して、ハルナの赤くなった頬を叩いたからだ。

歩とハルナはいきなりのことに啞然とする。

俺が驚かないのは、その理由が分かるからだ。

そして、普段食事中には絶対ペンを走らせないユーが、ハルナへ向けてメモを突きつける。

『軽々しくその言葉を使うな』

『もっつ！ お兄ちゃんに悪口言っちゃダメ！』

毎度毎度の歩の脳内変換だ。・・・しかし、今のはイラッときたな。

今は、ユーが行動してるから我慢するが。
後で殴る。

眉一つ微動だにしない表情だったが、その内には怒りがこみ上げているように見えた。

「ユー、気持ちはありがたいが、ハルナも本気で言ってる訳じゃないんだぞ？」

「いや、本気で死ねよ。そっちの根暗マンサーも死ねっ！」

・・・殺すか？

歩ならまだしも（ゾンビだから死なないし）ユーにまで死ねと？

殺すか？ 殺そう。

そう思って立ち上がろうとすると。
また、乾いた音が鳴る。今度は二つ。
ハルナが反撃したようだ。

『死ぬのは つらい』

その一文に、俺も冷静になり座り直し、歩も変換はしなかった。

さすがのハルナも言葉を失っている。
ユーの青い瞳が、悲しみに満ちていた。

沈黙を破るように「だあーっ！」と猪木ボンバイエな奇声を上げ、ハルナはご飯を口の中に掻き込む。
ユーも、何もなかったように澄ました顔で食事に戻り、俺もご飯を食べ始める。

「アユム！ おかわりだ！ めっちゃおかわりだっ！」

「はいはい」

歩は茶碗に山のようなご飯を盛り、ハルナに渡す。すると、ハルナは白い歯を見せて笑顔を作った。ふっとこつちまで頬が緩むような、素敵な笑顔だ。

俺はそれを見た後に、ユーの方へ顔を向けると、青く大きく綺麗な目から一筋の涙が流れ、頬を伝った。

流石の俺もこれには驚いた。いつも感情を出さないようにしてるユーがいきなり泣き出したからだ。

「おい、ユーっ！ どうした？ あー、えー、つとだな」

この事態に歩も気づいたようで慌てていた。

ポタリ、ポタリ。

嗚咽も漏らすこともなく、表情が崩れることなく、目の端から涙はこぼれ落ちていく。

ユーは左手を頬になり、涙のあとを指でなぞる。

そうしてやっと、自分が涙を流したことに気づいたようだ。

俺はいきなりのものでどうしていいかわからなかった。

歩もまたどうしていいかわからずハルナに助け舟を要請するが、簡単に却下される。

とりあえず俺はユーのサラサラの銀髪を撫でることにした。

俺は何が出来るか、ユ一の涙を止められるか考えていると、テーブルに置かれていた茶碗に目が映った。

その茶碗の中には何もなかった。
そう、空なのだ。

――これが――！

「歩！ 今すぐにユ一の茶碗にご飯をつけ――！！」

「！！！！・・・分かった！」

俺の言った言葉を直ぐに理解し、歩はユ一の茶碗にご飯をつぐ。

「ゴメンね、ユ一。気づかなくて」

そう言っユ一の頭を撫でていると、歩がご飯を大盛りにした茶碗をユ一の前に出した。

ユ一の顔色を窺うと、ユ一の目からはもう涙が溢れていなかった。

ユ一の涙が止んだのを見て俺は安堵の溜息を吐いてまた飯の続きをしようとした時だ。

「私は味噌汁を頂きたいのですが？」

此処には知らない女性がいた。

□ 第15話 □ (後書き)

今回は後書きなしです。

まあ、最後を見てくれる人がいるか分かりませんが(ρ _ ;)
それと皆さん本当に更新出来てなくてすみマセンでした - - - - -
!!!!!!!!!!

これからは余り期間を空けずに更新頑張りますので宜しくお願いします。(; _ ;)

では次回までさよなら。

□ 第16話 □ (前書き)

『同情するなら金をくれ』

『同情しないから金やらん』

□ 第16話 □

テーブルを囲んでいるのは歩、俺、ユー、ハルナ、ともう一人いた。

その人は女性だ。

デニムのローライズにキャミソールと、そこらにいる普通の女の子な服装で、長い髪をゴムで束ねている。
俗に言うポニーテールだな。

「ポ、ポニーテールだと！我がポニーテールに、勝る萌え無しっ！」

・・・歩の心の声が漏れました。

何だろう・・・イタイ子に見えるよ。

これからはもう少し優しく接して上げるかな。

「な、なんだよ？」

「いや、別に」

歩が俺の視線に気付いて聞いてきたが、それをはぐらかす。

話を戻して、その女性は容姿端麗で、ユーやハルナとはまた違う凛とした雰囲気を出している。

そして一番目に付くのは、その女性のヒスイ色に煌めく瞳だ。女性と言ったが、歳は俺と歩と多分同じくらいだ。そしてどこことなく大人っぽさがにじみ出ている。

歩はいきなり現れて驚いているようだが、俺は入ってくる気配は気づいていた。

まあ、敵意や嫌な気配ではなかったので、そのまま放置したが。それと他の奴は知らないが俺はこいつを知らない。

「でさ、アユム。こいつ誰？」

ふむ。

ハルナの知り合いではないらしい。

そうなるか……

俺と歩の視線が横で黙々と食を進めている、ネクロマンサーのユーに注がれる。

その後には歩がユーから視線を外し、その女性に味噌汁をお椀に注いで渡しながら、

「一応……自己紹介とか、してくれないかな？」

「わかりました。私の名前はセラフィムです」

自己紹介をするように勧め、そしてその女性、セラフィムは自己紹介を始め、俺は名前の後の言葉を待つ。

「・・・・」

そのままセラフィムは威風堂々な態度でじっと前を見据える。その間に俺は味噌汁を飲む。味噌汁をすすする音だけが、静寂な居間を支配していた。

「・・・・」

ん??

自己紹介、終わりなのか？

俺はそう思っでセラフィムを見ようと目を向けた瞬間にハルナが、

「それだけ？好きなものとか特技とか、趣味とかあるじゃん。あ、あんたもしかして魔法使いか！あたしを爆破するつもりだな！」

魔法使いって意外に過激なんだな。

多分、ハルナが言う魔法使いはきつと良心とか欠片もないんだろう。

「好きなものは秘剣、燕返し。特技は秘剣、燕返し。趣味は秘剣、

燕返しです」

・・・全部燕返し!?

あれ!?

何でみんなツツコミ入れないの!?

だって、おかしいだろ!?

好きなものも、特技も、趣味も全部燕返しっておかしいだろ!?

何?!

俺がおかしいのか!?!?

「なんでここにいるんだ?」

「任務です」

「どんな任務だ?」

「ユークリウッド・ヘルサイズ殿に、お力をお借りしたい」

えー。

結局みんな何も言わないの?

やっぱりおかしいのは俺なんだろうっか?

まあ、いいや別に。

話を聞きながら、俺は横にいるユーに目を向ける。

ユーは先ほどと相変わらず黙々と食を進めていた。
周りの事はどうでもいいといった感じた。

それにしてもユーに力を借りたい、か。
ユーの命をねらうのでなく。

ユーの力のはっきり言って喉から手が出るほど欲しいはずだ。
これまでに何度もユーの命を狙う奴がこの家に来た。

そのほとんどが『吸血鬼』だった。
だから俺は『吸血鬼』という奴が嫌いだ。

「もしかしてお前、吸血鬼か？」

歩がセラフィムにそう質問した。
質問をされた当人のセラフィムは目を丸くして

「どうしてそれをつ！」

とか言う台詞が似合う態度を一瞬見せるが、すぐに凜とした表情に
戻ると、一つ頷いた。

「その通り。私は、吸血忍者です」

忍者？鬼じゃなくて？

・・・・・・どうでもいいか。

結局こいつも吸血鬼と一緒にユーの力目当てみたいだな。

少しでも変な態度をすれば対処すればいい。

俺はセラフィムが自分が吸血忍者と言った瞬間に少し警戒する。

そして警戒を始めると同時にセラフィムの話を聞いた。

要するに人の生き血を吸うことで若さと力を手に入れた忍者ということ。

山奥でひそかに暮らしていたのだが、頭領が死んでしまい跡継ぎ戦争が勃発。

百年以上も続いているらしい。

それを鎮圧するために死んだ頭領を蘇らせて欲しいということらしいということ。

そして話を聞いた歩が今まで此处に来た奴らは全員吸血忍者なのか？

と尋ねてみると、セラフィムはこくりと頷いた。

セラフィムの頷きにより俺のセラフィムの評価はすでに地中深くの底。

今すぐにも此处から出て行って貰いたい。

今は食事中だから我慢しているが、直ぐにでも殺したいぐらいに目の前にいる奴が嫌いだ。

「そうです。彼らはヘルサイズ殿の命を奪い、その類まれな力を我がものにしようと企んでいました。それは、私たちの目的を阻止することと同義です」

味噌汁を喉に流し込み、空になったお椀をテーブルに置くと言葉を続ける。

「私の任務は、ヘルサイズ殿へ同行を求めることと、その命を守ることにあります。誘拐しろという強硬な考え方を持つものも確かにいますが、私たちはヘルサイズ殿のお力に敬意を払っております。できるだけ、ご本人の意志でお越し願いたい」

食事の時間は終わり、皿だけが残ったテーブルの上に、ユーがメモを一枚置いた。

そして、ボールペンが載せられる。

トントン。

二回テーブルが叩かれた。

『歩 かまわない 追い返せ』

交渉は決裂。

まあ、妥当だな。

さっきの言葉でユーの意志を尊重する考えは良しとしよう。

だが、結局それはそっちの問題だ。

こっちにまで問題を持ち込まないで欲しい。

セラフイムがいる所はまだ許せるとしても、強行派は最悪だ。どちらかという俺の評価は強行派の所為で低いままだしな。

「今回は、戦う必要はないんじゃないか？」

歩が何か言ってる。

戦う必要が無いとしても厄介事をユーに押し付けてるから話し合う余地もないな。

ていうか、歩は女性に弱くないか？

・・・どうでもいいか。

歩の問いに、

トントン。

とテーブルが叩かれる。

ユーが今見たメモをもう一度見ろと言っている。

それにはこう書き加えられていた。

『歩 かまわない いいから追い返せ』

それを見て歩は困った顔をしてハルナに視線を向けるが、

「そうか。忍者ならいきなり消えたり現れたい出来るな」

歩の目線にも気付かずにハルナは何やら一人で納得して居間から出て行った。

そして歩はハルナから俺に目線を変更した。

「ユーの意見に賛成」

そう言つて俺は湯呑みにお茶を入れて飲む。

飲んでる最中にいきなり嫌な気配がしたが、気のせいだと思いきや、そのままお茶を飲んだ。

「あなたは、あなた達はヘルサイズ殿の何なのですか？」

歩と俺を交互に見てセラフィムは質問する。

「ん？なんと言つか」

トントン。

と音が鳴る。

此処にいる全員がユーの書いたメモを見ると、

『歩は下僕』

流石ユー歩の事を良く分かってる。
俺がウンウンと頷いていると歩が、

「お、俺が下僕ならユー。神威は？」

そう言って歩がユーに問い掛けた。
それにユーは、
トントン。
とまたテーブルを鳴らした。
そのメモには、

『神威は』

と書かれていた。

俺は湯呑みを飲みながら心の中でガッツポーズをしていた。 歩
は歩で orz になっていた。

「ならば、私も下僕となります。私のことはセラとお呼び下さい」

ユーが俺の事を書いたメモを見たときに少しだけ引きつた表情になるが、直ぐに真剣な表情で、セラフィムは言った。

歩は下僕と書かれたメモに、ユーは新しく書き足す。

『下僕は 一人でいい』

『ユーには、お兄ちゃんだけでいいの!』

死ねば良いのにな?

あ、ゾンビだから死ねないのか残念だ。

「でしたら、あなたはいいませんか?どうみても頭がわるそうですし」

この数分で歩の対処の仕方が分かっただ、と!!
今の言葉にセラフイムに対する俺の評価が鰻登りだ!!

そして、ゾンビと吸血忍者はにらみ合い。
ずっとセラは立ち上がる。

「どこか、人けのいないところへ参りましょう」

どうやら、やり合っらしい。歩は食器も片付けないまま立ち上が

り、俺も居間を後にした。

□ 第16話 □（後書き）

作者「作者の後書きコーナー!!」

作者「えーと。今日は私一人で致します。」

作者「とりあえず、読者様の皆さん更新遅れて申し訳ありません」

作者「この前からリアルが忙しくて更新が出来ませんでした。ストックがある作品は更新をしていたのですがこの作品はストックすら書けない状態でした」

作者「本当に申し訳ありませんでした!」

作者「ですがもうすぐで夏休みなので更新は速く出来ると思います」

作者「ですので此からもこの作品をよろしく願います!」

□ 第17話 □ (前書き)

『人は死ぬ事には平等だ。
だが、生きる事に関しては不平等だ』

□ 第17話 □

その日の墓場は今日も静かだった。

まだ人が寝静まるには早い時間だが、夜の墓場に来る奴は不良でもあまりいない。

何せ此処には、歩（変態）というゾンビが出るからだ。

「おい。今、変なこと考えなかったか？」

「気のせいだ。お前が気にすることじゃない」

初めてハルナとメガロ、『凶悪女子高生クマツチ』だったか？ いや、『凶悪悪魔男爵クマツチ』だっけ？

まあいいや。

とりあえずクマツチが空から出現したときのクレーターは綺麗に無くなっている、あのとき粉碎した墓石も輝いている。

それにしてもクレーターが綺麗に無くなっているし墓石もある。業者さんが頑張ったんだな。歩に代わって謝ります。すみませんでした。

整列した墓を見下ろしつつ通り過ぎ歩とセラは巨大な木の下へ。
俺は近くの墓石に座る。

歩の所は巨大な木の周りには何も無く、行動が制限される心配もない。

安心して戦えるだろう。

歩が安心してるかどうかは知らないが。

ざわざわと木の葉が揺れる音を聞きながら歩達を見る。

両者はにらみ合った。

セラの背は歩とほとんど変わらず、ポニーテールの長い髪が風に乗って流れていた。

その威厳溢れる表情は、今からこうして殺し合いを始めようというときも全く変わらずに綺麗だった。

そうして二人を見ていると二人は話し出した。

「一つ、聞いていいか？」

「何か？」

「吸血忍者とやらは、人を襲うのか？」

「もちろん。と言っても、殺したりしません。少し血を分けて貰うだけです」

「強行派の連中もか？」

「絶対とは言い切れませんが、絶対にしません」

どっちだよ。

「でもさ。今、俺を殺す気なんだろう？」

「目的のためでしたら、仕方ないでしょう？何よりあなたは、人間ではない」

ごもつとも。

歩は人間ではない変態だ！！

・・・さて、と行くか。

「歩、少し用事が出来た。そっちは頑張ってくれ。じゃあな」

墓石から腰を上げて墓場から出て行く。

「一つ、此方からも質問していいでしょうか？」

「・・・なんだ？」

セラは歩に質問をする。

それに対して歩は居心地悪い表情をしていた。

「あの方は何しに来たのですか？」

「俺に聞かないでくれると助かる」

墓場を出てきてから数分たった他に誰もいない場所に俺はいた。

「そろそろ出て来たらどうだ？」

誰も居ない場所に向かって俺は睨み付けながら声を掛ける。

「やはりバレていましたか」

すると誰も居ない場所に何時の間にか女の子が立っていた。
それは、

「『何がバレていましたか』だ。俺にだけ向けて殺気出してやがっただろ」

「ええ、その通りですよ。久しぶりですね高杉神威さん」

「そうだな。神裂雪」

もう一人の転生者で神殺しの
神裂雪だった。

□ 第17話 □ (後書き)

皆様おはこんばんわ

東方不敗です。

まずはアザトク様、たまご様感想ありがとうございます!!!
今回は短かったですね。
すみません。

次回はセラVS歩の話です。

短いかもしれませんが見てくれると有り難いです。

では

□ 第18話 □ (前書き)

『悪には悪の正義があり、
矜持があり、
生き方があり、
そしてなにより誇りがある。』

□ 第18話 □

ヒスイのような綺麗な瞳が真っ赤に染まり、全身を覆うような黒いマントが現れた。

それは戦闘態勢に入った合図だった。

セラが両手を広げると、どこからか緑色の葉っぱが落ちてきた。大きな木が揺れて多少の葉が堕ちてくるが、その量は異常の一言に尽きる。

「では、いきます」

その一言を残し、セラの姿が歩の視界から消えた。と、同時に歩の胸元を斜めに斬られた。

歩は咄嗟に一步下がって、致命傷を避けるがもし下がっていた時の事を想像して冷や汗を掻く。

歩は目の前にある綺麗な長い髪と凜然とした赤い瞳。

- - - 美しい。 - - -

歩は身震いするほどだった。

そのとき、歩の頭の中に響いた言葉は、セラの自己紹介の一文だった。

『好きなものは秘剣、燕返し。特技は秘剣、燕返し。趣味は秘剣、燕返し』

燕返し――浅く斬りかかり、相手をひるませたあとに真の一撃を打ち込む。

みないな奴だったわけ？

あれ、神威がやった奴は三つ同時に来る奴だったはず？

使う奴で違うのか？

とにかくだあれは神威と違う連撃だ。

歩は神威の使う燕返しに違いを比べて考えていると大地を蹴り、下がった。

下がった結果案の定、切り返して歩の身体はぱつぱつと斬られ大量の血が砂利だらけの地面に落ちていった。

かっついて歩はかわそうとしたが斬られていた。

さすが忍者。

と心の中で賛辞していた。

「見事です。私の燕返しを二度もかわすとは」

「まあな、こつちにもあんたと違う燕返しを使う奴がいて毎日シゴかれてるんでな」

実はあの斬り返しのあと、同時に動作が繰り返されたのだ。ちよつとした四連斬。

そのあとも、逃げる歩を追いかけながら、幾重の剣閃が歩の身体を切り刻む。

それに歩は、一発も交わせなかった。致命傷は貰ってはいないが。

チエーンソウを持って来るべきだったと少し後悔する。

今更後悔しても遅い。

此処は不死身の身体をうまく利用するべきだと思い行動に移る。

あえてセラの斬撃に合わせて前に出た。

セラの刃は歩の心臓に届くくらいに深く切り刻まれたが代わりに、歩はセラに思いつき殴った。

その拳は、一枚の葉に阻まれた。たった一枚の、あのひらひらした
たった一枚の葉っぱに、歩の渾身の一撃を止められた。

だが、止まったのは一瞬で、力をさらに込めると抵抗がなくなった。

そのまま歩の拳はセラの綺麗な顔を殴り飛ばした。

その後には歩は自己嫌悪に少し落ちるが、何もしないで殺されるのは
二度とごめんだと気を引き締める。

すぐさま起き上がると、セラはいきなり距離を縮めてくる。

彼女の両手には、刃物のようなものがある。

剣……と言っているのか分からないが。

それは、葉っぱだった。

細く長くなった葉は、剣に似ていなくもない。

って、もしかして、ここにゆらゆらと飛んでいる葉っぱ全てが剣に
なったりするの？

と思っていると、歩はまた斬られた。

今度は首を狙われ、その動きに対応しきれない歩の首から鮮血が飛
び散る。

すぐに距離をとろうとしたが、逃げられなかった。

見れば細い草のような葉が突き刺さっている。
やはり、これが全部刃なのだろう。

「もらった！」

目の前にいる凜乎とした少女が剣を横に払う。
首の半分くらいを斬られ、噴出するように血が出る。
普通は死んでる量だ。

「まだ、終わってないぞ？」

「なっ！」

歩は、驚愕しているセラの手を取った。

ぐいっと引き寄せ、頭突きをかます。

ぐらりと頭が揺れた瞬間に、ボディブロー。

それは、また一枚の葉に阻まれたが、きにせずそのままボディブロー。
！。

そして膝蹴りを喰らわして、右ストレートを叩き込む。

その力は人間が出せる力の二三〇%。

砂利を巻き上げて、音を立てながらセラは地面を転がる。それを見ていた歩は何かが飛んできたので防御した。

飛んできたものは、紅葉の葉のようなものだった。

ちよっとした手裏剣なのだろう。

腕に突き刺さったそれを引き抜くと、二三〇%の歩の力でも折り曲げられないほどの強度を誇っていた。

・・・あの体勢で反撃してくるとは。

と驚いていると。

・・・って、おいおい。殺す気で殴ったんだぞ？俺は。

セラは何時の間にか立ち上がっていた。

「甘くみていました・・・」

黒いマントを翻し、セラは剣を持った両手を広げる。

彼女の背中から、緑色の翼が現れた。

一枚一枚の小さな葉っぱは、抜け落ちた羽根に似てもなく。それが集まって刃の翼になった。

「いきます」

第二ラウンドが始まる。

□ 第18話 □ (後書き)

作「作者と」

神「・・・神威の」

作・神「「後書きコーナー」」

作「どうも皆さんおはこんばんわ作者の東方不敗です」

神「久しぶりだな後書き」

作「はい」。申し訳ない(汗)」

神「・・・この駄作者が」

作「(; A ;)」

神「だったら早く続きを書け」

作「はい(涙)」

神「それと狐唄様、h a k i様、たまご様、アザトク様、木原クウ
ウウウウウン!!!様感想ありがとうございます。」

作「今後とも見ていただけると嬉しいです。よろしくお願いします
!!!」

神「じゃあ」

作「次の話まで!」

神・作「さよなら!!!」

□ 第19話 □ (前書き)

『「愛している」という言葉が最高の言い訳になるように」「正義」という言葉は最低の正当化にできる。』

□ 第19話 □

「いきます」

さつきよりセラの速度がます。しかも上空からの攻撃からの攻撃。翼が羽ばたくと、何枚か木の葉が舞い落ち、それが本当の羽根に見えた。

「秘剣、燕返し。――八連！」

その言葉と共に、八方向から一気に切られる。彼女の持つ剣だけじゃなく、歩の周りにある葉も剣になっているから出来る攻撃だ。

――まずい。斬り返しが来る。・・・だったら！

「なっ！」

身をよじりながらセラの方に向かって進む。

刹那、歩の身体はバラバラになった。

だが、右腕だけ吹き飛んで、それ以外は何とか繋がっていた。地面

に落ちた血と切り傷で歩の身体は力が入らなかった。

「まさかあれをかわすとは」

「ギリギリだけどな。腹の血を見ろ、バツサリだろ」

そう言いながら歩は地面に膝をつく。

「そうですね。そろそろ終わりにしましょう」

目の前に降り立った黒いマントの天使は、その瞳を歩に向ける。

両手に持った緑色の剣と、長い髪。
どっかで似たようなものを見たな。

確かあれは、両手に長細いものと、長い髪。

俺が覚えている、『俺を殺した奴』

二刀流で切り刻むなんて余程の達人でも難しいぞ。

約一名。出来る奴を知ってはいるが。

そう言えばハルナが

「そうか。忍者ならいきなり消えたり現れたり出来るな」と言っていた。

吸血忍者なら侵入するのも容易いはずだ。

――ハルナはやはり、事件にかかわりがあるのだろうか。
今度聞いておこう。

「・・・三〇〇」

俺は落ちている手を拾いに足に力を込めて走る。
いきなり動いた歩に驚いたのか、セラは空に飛び上がる。

「・・・四〇〇」

「こいつ、まだ動くのですか！」

ばさつと背中から音が聞こえる。
あの緑色の翼が羽ばたいた音だ。

「五〇二」

歩は右手をくつつけながら方向転換して大地を蹴り、跳ぶ。

「秘剣、つ・・・」

歩は歯を食いしばり、思いっきり殴る。
セラはそれを身体を隠すように翼で防御されるが、六〇〇%にまで
上げた歩の渾身の一撃は簡単に貫き、殴り抜けた。

だが、残念ながら、歩が殴ったのは、黒いマントと丸太。

変わり身の術ってやつか？

忍者って卑怯すぎね？

「やりますね」

木の上から降りて、歩たちはまた睨み合った。

翼に使った葉が全部だったのか、あれだけ辺りを飛んでいた葉っぱがなくなっている。

両手にある二枚のみだ。

「一つ、聞いていいか？」

冒頭と同じ言葉を歩は吐く。

「何か？」

冒頭と同じ返答を、セラはする。

「本当に、人間は殺さないのか？」

「はい。それが何か？」

じつと目を見つめる。

相変わらず真っ直ぐで・・・綺麗だった。

セラは何故か剣から手を離れた。

それは小さな葉へともに戻り、ハラリと地に落ちる。
赤い目もヒスイ色に戻っていた。

一息を吐いて、少し楽しそうな表情を見せる。

「参りました。残念ながら、あなたを倒させないようです。渡しの秘剣秘技をもつてしても。修練が足りませんね。奥義を出す気にもなりません。新しい技を考えないと」

どうやら、戦いは終わりらしい。

「じゃあ・・・」

「ええ。私は家に帰らせて頂きます。そういえば、さっきの方はあなたより強いのですか？」

「ん？ああ、俺より強いぞ？普通に」

「そうですね。それは楽しみですな」

その後にはニーテールをふあさふあさせながらくるりと背を向けて、早々とその場をあとにした。

背を向けたその時のセラは笑っていた。

歩は考えながら家に向かって歩き出す。

神殺しの神威

魔装少女のハルナとメガロ

ネクロマンサーのユーと吸血忍者。

最近、妙なことが起こりすぎる。

これも俺がゾンビになったせいかな？

墓場から出て、ゆっくり歩いて家へと帰る。それにしても、派手にぶった切られたもんだな。

神威よりかはまだましかな？

いや、でもこんなに動きづらいのは初めてだ。

そう思うと神威の方がましなのか？

家の中に入ると、玄関に靴が置いてあった。

当たり前のことを今言ったが、これがおかしいことなのだ。

だってさ、ユーの分と、帰ってきたのか神威の分と、もう一足あるだぞ？

もちろん俺のものではない。

ハルナの靴はまだ買ってないんだ。

下着は神威がユーに買ったものを使っているようだが。

あと神威の靴はこの目の前にある一足しかないんだ。

まさかと思い、俺は居間へ向かった。

――そこには、所々包帯を巻いた神威と、凜々しい吸血忍者の
姿が。

なんでまだいるねん。

家に帰ったんじゃないのかよ。つか、俺と別れた後に何があった神威。

――ん？あ、なるほど。俺の家に帰ってきたんだ。
勘弁してくれ。
こいつも居座るつもりか？

トントン、いつものあれが呼びだ。

『どついつこと？』

『お兄ちゃん。なんでこの人ここにいるの？』

ふっ。

俺が聞きてえよっ！

何故か視線を感じる。

見てみると神威が

『何こいつ、キモいんだけど』

と言いそくな、表情をしていた。

とりあえず気にしないことにして目をそらす。

べ、別に傷ついた訳じゃないんだからね！

やって自分で少し凹んだ。

どうやらセラは最初ユーの下僕である俺の下僕になるらしいと言っていたのだが、それをやめて神威の下僕になるらしい。

そしてそれを神威は了承した。

その時何故か知らないが神威は何かを必死に耐えている表情をしていた。

ところで、何で神威の下僕になったのかと言うと。

下僕ってのは何でも言うこと聞くんだよな？

俺のことをお兄ちゃんと呼ばせてもいいんだよな？

最高じゃないか。

ということをセラに提案したところ。

「嫌です。気持ち悪い」

とまあ、きつぱりばつさり断られたさ。

嫌なことを嫌とはつきり言える性格だそうだ。

どこまでも凜々しいお方で。

「じゃ、せめてご主人様とかマスターとか呼んでくれ」

「嫌です。このクソ虫がつ。やはりあなたの下僕になるのは止めです。神威さん、あなたの方がこのクソ虫と比べられないくらい、ましです。私はあなたの下僕になります。いいでしょうか？」

いつもの綺麗な目が、この世で一番下等な生物を見るかのように冷たく突き刺さり、言葉を切り刻まれた。

「別にいいけど？確かにこの変態の下僕になるくらいなら他の人の方がいいもんな」

どうやら彼女は、いや彼女達は、『言の葉』すら刃に変えられるよ
うだ。

□ 第19話 □ (後書き)

作「作者と」

神「神威の」

作神「後書きコーナー」

作「いやはや、頑張って3日連続投稿！頑張った、俺。頑張った！」

神「それが普通だ」

作「これでも頑張ったんだよ！？少しぐらい労ってもいいんじゃないかな、かな？」

神「キモイ、そしてキモイ」

作「二回言う必要あった(涙)？」

神「あった」

作「(´・ω・´)」

神「今回言う事はそれだけか？」

作「(´・ω・´)」

神「……（イラッ!）」

作「……ゴメンナサイ（涙）」

神「さっさとしろ」

作「後少しで20万PVになります。皆様本当に読んでいただいてありがとうございます!!!」

神「終わりか?」

作「ふあい（涙）」

神「それじゃさよならだ」

作「次の話は神威VS神裂の話です。良ければ見て下さい」

□ 第20話 □ (前書き)

『そんなこんな
そんな感じの
そんな風の
そんな訳で
僕は此処では
前置かない』

□ 第20話 □

歩がセラと戦闘を開始した時間。

俺は目の前に居る俺と同じ転生者で、もう一人の神殺しの神裂雪と話していた。

「で？俺に何の用だ」

「用ですか？そうですね。確認ですかね？」

「確認？」

「はい。確認……です！」

その言葉と同時に神裂は手に炎で作られた剣を持って俺の目の前で迫り、下から斜め上に剣を振り上げた。

「・・・っ!!」

それを無意識にバックステップで下がりながら石の刀を地面から作り上げて何とか防ぐ。

しかし、自分が無意識にしたバックステップと相手の剣の当たる勢いにより、少し吹き飛んだ。

「なるほど。今のを防ぎますか」

神威は感嘆の声を上げながら自分が出した火剣と俺を交互に見る。

「お前・・・!」

「どうしたんですか? そんな怖い顔をして」

「何がどうしたのですか? だ。いきなり攻撃して来やがって」

俺は神裂を睨み付ける。

「そんな事どうでも良いじゃないですか。それと余りに気を抜いていると・・・殺しますよ?」

「ッ！！！」

神裂の殺気に俺は反射的に石剣を出して構えた。

「それで良いんです。さあ、続けましょうか」

神裂は火剣を片手に持ち、先ほど出した殺気を凌駕する闘気を出す。

「行きます」

さつきより速い速度で接近してくる。

目でギリギリ捉えられて、火剣を右薙で斬り付けようとするのを石剣で防ぐが、石剣と火剣が触れた瞬間、火剣の熱で石剣が触れた所ですっぱりと切れた。

火剣の熱で頬が少し火傷する。なおも追撃を図る神裂に俺は、何とか石楯を地面から出現させて防ぐ。

「はぁ！！」

それを物ともせず、火剣で刺突を石楯に放った。
放たれた刺突は石剣と同じく火剣が石楯に当たった瞬間に溶け楯を

貫いて、俺の心臓めがけて突っ込んできた。

それをとっさに身体を捻って避けた、が右肩を少し斬られる。

「ぐう!!」

「先ほどより、動きが良くなってますね。良いことです」

満足そうに神裂は頷きながら俺を見る。

表情は無表情だがその目は確かに歓喜と取れる目をしていた。

「じゃあこれはどうです？」

神裂は火剣を持ってない方の手を上に挙げる。

その次の瞬間に神裂が挙げた手の上空に火が集まりその形を変えていく。

出来上がった形は槍。

火で出来た大きな火槍。

大きな火槍は分裂して数を増やす。

その数は約50。

「・・・行け」

神裂が手を俺に向けて降ろすと同時に火槍が一斉に降り注ぐ。

「くそ!!」

悪態を吐くが迫ってくる火槍が消える訳じゃなく、より速度を速めてくる。

考えてる暇はないが、何とか兎に角防ぐ方法を考える。

「一か八か・・・行け!!!」

手を地面に降り下ろす。

地面に手が着いた瞬間、石で出来た石槍を作り出して火槍に当てて相殺させる。

ただ、さっきみたいに溶かされる可能性があるので、数を火槍の3倍、約150。

火槍に石槍が当たる。

火槍一本に石槍を3本。

石槍と火槍が当たった瞬間、爆発が起こる。

爆発が数秒続いたと思ったら煙の中から数本の火槍が降ってくる。

「ちい!!!」

石槍では数本、防ぎきる事が出来ずに火槍が煙から出てくる。それを防ぐため石槍を自分の周りに出して自分を覆い尽くす。

数秒後、石楯に火槍が当たる音が聞こえる。

火槍は石楯を溶かすが石槍により減らされた事で何とか石楯で防ぐ事が出来た。

「はあ、はあ、はあ」

「まあ、こんなものでしょうね」

俺を見ながらそう言った神裂。その表情はさっきとは違い、落胆の表情だった。

「それでは、そろそろ私の新しい力を出しましょうか」

その表情を無表情に戻して、神裂は右手を何も無いのに自分の前で横に振る。

「なっ！！」

何も無い空間から何かが出て来た。

それは白く普通の狼より大きな姿をしていた。そして何より、とてつもない殺気を出して。

俺はその狼を知っている。この世界じゃない、それは生前にあるゲームで知った……。

「プ、プライミッツ・マードー」

『プライミッツ・マードー』

死徒二十七祖第一位、「霊長の殺人者」「白い獣」「アルトルージュの魔犬」「ガイアの怪物」。

その星の抑止力のひとつ。

その世界では主・アルトルージュにのみ従う。

死徒ではないが、主であるアルトルージュの真似をして人間の血を吸うようになったので二十七祖に数えられる。

もともとこれを御するには七騎の守護者が必要とされており、冬木の聖杯戦争におけるサーヴァントはこれになぞらえられているらしく、人類に対する絶対的殺戮権を有するとされる。

「さあ、第2回戦と行きましょうか」

無表情だったのを笑顔に変えて神裂はそう言った。

□ 第20話 □ (後書き)

皆さん、おはこんばんわ。
東方不敗です。

更新遅れて申し訳ありません。今回の話はとうだったのですか？あと2話ぐらい続きます。

それと活動報告でも書いたんですがお知らせを。

自分の名前『東方不敗』を変えようと思います。
理由は活動報告に書いてますのでそちらを。

変える名前は『深刻の溝』デットクレパスです。

一応、次の更新の前に名前は変えます。

今後とも『深刻の溝』デットクレパスでよろしくお願い致します。

では。(。・ω・。) /

□ 第21話 □ (前書き)

『前置いた』

□ 第21話 □

「さあ、第2回戦と行きましょうか」

そう言った神裂は無表情だった表情を笑顔に変える。

「どうしてお前がそいつを従えている!!!! 本来ならこの世界に居ないそいつを!!!!」

俺は混乱して声を張り上げた。この世界に居ない筈の、所謂イレギユラーに動揺した。

「やはり知っていましたか。……ですが、貴方は間違っていますよ?」

俺は怒りをぶつけるが、神裂はそれをものともせず淡々と言葉を紡ぐ。

「何を言って・・・」

俺は神裂の言葉を聞いても意味が分からなかった。

「確かにこの子はあの『絶対殺害権を持つ霊長の殺人者』に似ていますよね？ 私も最初会って殺す（・・・）までは勘違いをしていましたよ」

困りますよね。と言って神裂は溜め息を吐いた。

「まさか・・・!」

この神裂の含みのある言葉で俺は気が付いた。

神裂が目の前にいる狼を出すその前に言った言葉。

『私の新しい力を出しましょうか』

そして神裂はこの世界には居ないはずの狼を殺した。

なら殺したそれが神と付く者なら？

「ええ。貴方の考えてる通りですよ？ この子は『狼神 フェンリル』です」

俺が考えに至った事を察して神裂は答えを提示した。

『狼神 フェンリル』

フェンリルは、北欧神話に登場する狼の姿をした巨大な怪物。ロキと、巨人族の女アングルボダの間に生まれた3匹の魔物のひとつ。おそろしく凶暴な狼で、世界をのみこむほど巨大に成長したため、神々によって捕縛された。ドワーフ（黒小人）がつくった魔法のひもによって岩に縛り付けられ、上あごと下あこの間に剣をつきたてられている。

「神と言われる存在は本来人間には姿が見えませんが。もし見えたとしたらそれは見る人のイメージで変わります。ですから私もフェンリルに初めて会った時は混乱しました」

その狼の頭を神裂は撫でる。

撫でられた狼も気持ちよさそうに目を細めていた。

「フェンリルを殺してその力を得たとき私が出したこの子は全く一緒でした。まあ、能力までは一緒ではありませんでしたけど、流石に」

撫でる手を止めずに言葉を続ける。

「一応この子の能力の名前を言っておきましょう。この子の名前は【創造する神狼】です」

狼、フェンリルを撫でる手を止めて神裂はフェンリルの名前を言う。
フェンリルもそれに応えるように空に向かって吼えた。

『■■■■■■！！！』

吼えただけ、なのに身体が震えた。

手が、足が震える、目の前にいるモノに自分は恐怖している。その圧倒的な存在感に。

「能力は無いですが力はあるの『プライミッツマダー』より遥かに強いですよ？ この子に対して貴方はどう対処しますか？」

神裂の表情は今までに無いぐらいの笑顔を魅せていた。

ただ、その笑顔は新しい玩具を目の前にして嬉しそうにしている子供と同じに見えた。

『■■■■■■！！！！』

もう一度、フェンリル空に向けて吠える。

その吼え方は相手を威嚇するような吼え方だった。

そして俺の方を見た、その目は敵意と殺意に満ちていた。

それに、俺は身構える。

脚が恐怖で震えるが手で脚を叩き震えないように治す。

そうしなければ死んでしまうから。

「始めましょう。フェンリル・・・遊び（殺し）なさい」

神裂の号令と共にフェンリルはその場から・・・消えた。

「え？・・・ッ！！！」

目をフェンリルから離さないように瞬き一つせずに凝視していたのにも関わらず消えた。

だが何かが前から来ると脳からの警報によって身体を瞬時に横に捻り、出していた石剣で横腹を防ぐように持った。

次の瞬間、風を感じたと思ったら石剣が3つに分断され、横腹も薄くだが斬られた。

そして、後ろから何かが止まる音が聞こえる。

この間、僅か1秒も満たしていなかった。

「そんなん、ありかよ」

後ろを振り返える。

其処にはやはりフェンリルがいた。

フェンリルは此方を向いて俺を睨み付けていた。

もし避けていなかったらと考えると冷や汗が流れる。

いくら通常の人間より丈夫に出来ているとはいえ死ぬときは死ぬ。

「はは。だったら・・・先手必勝!!」

嫌な思考を中断する。

地面に手を付けて能力を発動させる。

地面からフェンリルに向かって広範囲に棘を発生させる。

それをフェンリルは上空に飛んで避ける。

だがそれは予想済み。

だから――。

「これで・・・どうだ!!!!」

上空に飛んだフェンリルに石剣・石刀・石槍・石矛・石斧といった考えられるありとあらゆる武器を創り出してフェンリルに投げ飛ばす。

その数や神裂に投げた石槍の数150を超えて500。

最後に駄目押しで山岳をも叩き斬れる石太剣を作製し投げつけた・
・が、しかし。

.....! ! !

フェンリルは吼えた。

飛んでくる500の武器に向かって吼えた。

それは音の衝撃波。

武器がフェンリルに着弾する前に武器は跡形も無く砕け散り、衝撃波は地面に創り出した棘さえも壊して平地に変えた。

「なに!!!」

吼えただけで武器が砕けた事に驚く。

上空にいたフェンリルはそのまま空から降り立ったと同時にまた姿を消した。

直感で横に避ける、が横ではなく後ろから殺気を感じて後ろを向いた次の瞬間。

[illegible]

右腕に激痛が走った。

激痛が走る右腕を見ると右腕は肩から血が吹き出し肩先から先が消えていた。

今にも意識が飛びそうになるがなまじ身体が丈夫だから意識が飛ばず余りの激痛に顔を歪ませる。

「
■ ■ ■ ツ
」

そしてフェンリルの方に顔を向けると、フェンリルは俺の右腕をしっかりと口にくわえていた。

「ぐっ！！はあ、はあ。ぐう！！！！」

激痛を何とか堪えるが、それは難しく我慢すれば我慢するほど激痛が身体を駆け巡る。

激痛のあまり膝を地面についてしまう。

「・・・はあ」

・・・誰かの溜め息。

ほんの微かな呟きだったが、それは確かに俺の耳に入った。

此处に居るのは目の前にいる狼と自分と後1人。

狼が溜め息を吐いた訳でなく自分も吐いてはいない、なら考えられ

るのは――。

意識が朦朧としながらも目線をその人物に向ける。

目線に向けた人物は・・・神裂。

その神裂の表情は心底つまらないといった表情だった。

「・・・まさかこの程度とは、正直ガツカリです。それならいつそあちらで闘っている2人を相手にした方が良かったですかね？そして殺したら貴方はもっと死ぬ気で闘ってくれますか？」

その声に感情は籠もっていなかった。
だが、その目は本気だった。

「・・・ッ！！！」

コイツは何を言ってる？

アイツは歩を殺すと言っているのか？

「いえ、それなら貴方が仲良くしている方、全てを殺した方がいいかも知れませんね。・・・ああ、そう言えばネクロマンサーの方だけは殺さないようにしないと、『あの人』がネクロマンサーに用事があるはずでしたから、ふむ、抵抗されてもあれですし手足をモいだから連れて行きましょうか」

神裂は、1人考えながら納得している。

それより、アイツは俺と仲良くしている奴、全員殺すと言った。歩もハルナも殺すと。

何より、ユウの手足をもいでどこかに連れて行くとも言った。

そんな、そんな事……。

「ゴホッ!!ゴホッ!!!!……そんな事、させるかよ……!!」

激痛が走る身体を無理やり動かして立つ。

「そんな身体でどうすると？貴方は黙って仲間が殺される所を見ていなさい!!」

少し苛ついたように神裂は語尾を強めて言った。

「やら、せるか……やらせる、かよ!!歩も。ハルナも。ユウも。誰一人殺させないし、連れて行かせない!!」

誰も殺させないように。

誰も奪われないように。

その意志を込めて。

左手を前に出して静かに詠唱を始める。

「『我、常に勝者である』

『我、人生に敗北はなく』

『虚しい勝利だけが全てを示し語る』

『その人生は孤独であり、隣に立てるものなど誰もいない』

『いつ何時でも常に勝利し、億千万全ての命を奪う』

『私の言葉に敗北は無く、死することなどありはし無い』

『その者の名は【孤独な勝利者】』

詠唱が完成される

それと同時に周りの景色が変化する。

空は夕暮れで、周りに在るもの全てが『墓標』。

それ意外何も無い世界。

その真ん中に立っていたのは、右腕が治った銀髪紅眼の神威がいた。

□ 第21話 □（後書き）

『作者と』

『神威の』

『『後書きコーナー！！』』

『皆さん、おはこんばんわ。作者の深刻の溝です。今回の第21話
どうだったですか？ 作者は戦闘描写が苦手なので『何だコレ？』
となったかも知れません。すみません。』

『だったら最も頑張れよ』

『コレでも頑張ってるんですよ？ 試行錯誤して頑張ってるんです
よ？』

『・・・ハッ！！！！』

『鼻で笑うのは酷いと、作者は作者は悲しみに暮れてみたり』

『・・・』

『無視ですか。そうですか。』

『お礼はどうした？』

『・・・unlimiter様、雑魚といったら魚に失礼な男様、
感染爆発様感想ありがとうございます！！！！』

『遅えんだよ』

『すみません。すみません。すみません。すみません。すみません。』

『もう帰りたいんだが？ ユウとイチヤイチヤしたいんだが？』

『・・・はい。えっと、次も戦いが続きますがどうか見ていただくと有り難いです』

『それじゃあ』

『次の回まで』

『『サヨウナラ』』

□ 第22話 □ (前書き)

「称えよ、奉れ、そして祈れ
全てをすれば願いが届く」

天使か悪魔かはたまた神か
善悪、問わずに願いは届く

願いは叶うか分からずとも
けれど愚者の願いは届かない

□

□ 第22話 □

空は夕暮れで、周りには十字架の墓標しかない場所に、俺と神裂、神裂の能力により創り出したフェンリルは居た。

「アハハ、アハハハ!!」

神裂はこの夕暮れと十字架の墓標という景色と右腕を治し銀髪紅眼の俺の姿を見て笑う。嗤う。

「コレです。コレを待ってました。やっと本気で闘ってくれるんですね?」

心底、嬉しそうに神裂は笑顔になった。
そして。

「見せて下さい貴方の本気を。フェンリル、・・・行きなさい」

笑顔を絶やさずに神裂は横で自分の主の指示を待つ、そんなフェンリルに声（指示）を掛けた（出した）。

「
■ ■ ■ ■ ! !」

神裂の言葉に応えるように声を上げて、フェンリルは戦闘形態に入る。

身を低くし、脚に力を込める。地面を強く踏みしめ、地面を駆け出したと同時に地面は余りの力に陥没する。

それはまさしく神速だった。

普通の人間には認識する事さえ出来ない速さ。
音速を超えた速さ。

ただ、今の俺ならそれを、その速さを認識できる。
近くにある十字架の墓標に手で触れて、石槍を造り槍の真ん中に左手を添え右手を一番後ろを持って腰を低くし構えた。

フェンリルは俺が自分の速さを捉えていると気付くと右、左と移動にフェイントを入れながら進んでくる。

後、俺とフェイントの距離が5メートル以内といえる距離でフェンリルはそこで、地面を今までより強く踏みしめて飛ぶ。
ただそれは上に、ではなく前にだ。

その速さは、駆けていた今までの速さを超えていた。

フェンリルが狙う場所を予測する。

直感的に左腕に来ることを予測した。

その直感は当たりフェンリルは自分の前脚の爪で俺の左腕を切り取るように振りかぶってくる。

俺はそれに合わせて石槍をフェンリルの前脚を撫でるように触れながら横にズラして受け流す。

受け流す瞬間に石槍を反転させながら身体をフェンリルの横腹の下に入り込んだ。

ここだ！！

「ハア！！！！」

横腹の下に入り込んでそのまま石槍を上を持ち上げながら斬りつける。

そのままフェンリルは俺の後ろを通り過ぎた。

斬った感覚はあった。

が、手応えは全く無かった。

その証拠に石槍の刃先を見る。

フェンリルの身体は堅く石槍が触れた瞬間に刃こぼれた。

「そう上手くいかないか」

刃こぼれた石槍を見ながら溜め息を吐いた。

仕方ないと思い、手にある石槍を創り変える。

石槍はその形状を変え、刃先が横に伸びて石鎌になった。

「戦闘続行と逝こうか」

石鎌を後ろに持ち構える。

フェンリルは律儀にも待っていて俺が構えたのを見ると走り出した。

「だったら・・・！」

フェンリルが走り出したと同時に俺も走り出す。

地面を蹴っていくと速度が上がる。

フェンリルと俺は地面を駆ける度に速度が上がり先ほどより早くに攻撃範囲内にどちらも入った。

「
■ ■ ■ ■
！」

声を上げながら今度は口を大きく開けて俺の顔を噛み砕こうとする。それを即座に身を低くし石鎌をフェンリルの首に当たるように添えて思いっ切り振り下ろす。

「オラァ！！」

何かが折れる音が聞こえる。

そのままフェンリルは俺の頭上を越えた。
フェンリルが通り過ぎた瞬間に石鎌を確認しながら振り返る。案の定、何かが折れる音は石鎌の刃で、フェンリルが噛み砕いた跡が付いていた。

それを見ながら振り返った時にはフェンリルも身体を回転させて振り返り、口から焰を吐き出した。

「ッ！？！」

驚いて反応が遅れる。

目の前一杯に広がる焰を何とか石鎌を前に出し、回転させて自分に当たらないように霧散させた。

やがて焰は無くなり視界がクリアになる。

だが焰を出したフェンリルがそこには居なかった。
視界から消えたフェンリルを探す。

周りを探すが無もない。

その瞬間、殺気が上空から降ってくる。

すかさず、首を上空に向ける。そこには前脚を振り上げて上空から降りてくるフェンリルがいた。

ギリギリ、バックステップで攻撃を回避するが、素早く体勢を整えたフェンリルがそのまま、地面に着いたと同時にバックステップで避けた俺に向かって飛び掛かり前脚の爪で切り裂いてくる。

その攻撃を身体を捻ってやり過ごすが避けきれずに少し切り裂かれる。

「クソッ・・・！」

悪態を吐いて、振り返りながら距離を取る。

フェンリルは距離を取られないように、詰めてきた。それを見ながら近くにある2つの墓標に両手を掛けた。

フェンリルが、近付いてくる。それを見てもまだ動かない。

後少しでフェンリルの攻撃範囲に入ろうとした時に、両手で触れていた墓標の1つを5本の短剣に変えて投げつけた。それを左右に避けて、フェンリルは口を大きく開けて俺の身体を咬み千切ろうとする。

「残念それはブラフだ」

もう1つの墓標を楯に変えてそれを防いぐ。

と、同時に周りの墓標を石鎖に変えて、フェンリルの身体中を地面に縛り付けて大きくバックステップで距離を開ける。

距離を開けて視界に入る十字架の墓標を全て武器に変える。

今までの出した数を越えてフェンリルの上空を武器が取り囲んだ。

手を挙げて止まる。

フェンリルが石鎖を引き千切ろうとした瞬間に手を振り下ろして、上空に浮いていた武器を落とした。

フェンリルに武器が当たり爆風が起こる。

それを見て、次の動作に入る。

左手に石弓を構え、右手に石矢を創り、構える。

石矢を能力で捻り曲げ、力を石矢に込める。

そして、フェンリルに向けて捻れた石矢を放った。

「『螺旋狂え（ねじくるえ）』・・・！！」

捻れた石矢は空気を挟りながら前へと突き進む。

煙が上がってちゃんと武器が着弾したフェンリルに最後の一押し
の石矢が着弾した。

その爆風は今までのより大きかった。

爆風は止み煙が晴れる。

フェンリルは石矢の攻撃がしつかりと入っていて、少しよろめいた。
それを好機と見て、すかさずフェンリルの両脚を全て足枷を創り捉
える。

そして、素早く足枷から石綱を伸ばし平らな石にフェンリルを縛り
付け、石を地中深くに落とし巨大な石を打ち込んで石綱をかける杭
にした。フェンリルは暴れてこれを噛もうとしたので俺、は下顎に
柄が上顎に剣先がくるように石剣を押し込んでつつかえ棒にした。

「■■■■■■！！！」

フェンリルはそれでも尚暴れる。

それは奇しくも神話と同じ様になったからなのか、それとも単純に

抜け出そうとしているのかは言葉を話せないフェンリルの心情は分からない。

ただ、ただただ。

もがき、喋れないはずの口から声にならない大声を出し、抜け出そうとして暴れる。

それを見ながら俺は右手に持つ石剣を両手に持ち変えて、思いっ切りフェンリルの心臓目掛けて振り下ろした。

「■■■■ツ――」

声にならない悲鳴を上げ、フェンリルはその場所から光の粒子になっ
て消えていく。

フェンリルがいた場所にはただ石剣が墓標のように地面に突き刺さ
っていた。

光の粒子になったフェンリルを見送った後、俺は神裂の方を振り向
いた。

振り向いて見た神裂は自分が創り出したフェンリルが殺されたのに
も関わらず神裂は笑顔だった。

「ふふ、嬉しいですよ神威さん。貴方が頑張ったので私もサービ
スしないといけませんね」

笑いながらさつきまでの闘いを讃えて俺に向かって歩き出す。

「【全ては我が目に映る】」

言葉を発したと同時に神裂は両手に炎の双剣を出した。

その手にした炎双剣は藍青色と黄色の炎だった。

それに合わせて俺も石双刀を出して前に双剣を右を前に左を後ろに交差させて構える。

神裂の構えは両手をダランと下げた自然体。

神裂と俺は構えたと同時に地面を駆ける。

2人の速さは互角。

両方が双剣の間合いに入った瞬間に持っていた双剣の片方を神裂の右横腹を狙って振り切る。

「見えていますよ」

それを神裂は左手に持った双剣の片方で受ける。

それを見て左側の双剣で上から斬り付けようと動作を開始した瞬間、もう俺の左手に持っていた剣は弾かれていた。

「なっ!?!」

それは俺が上から斬り付ける事が分かっていたような弾き方だった。だが、それよりも俺は神裂に隙を見せてしまった。それを神裂が見逃すはずが無く――。

「『灼熱と散れ（しゃくねつとちれ）』・・・!!!!」

神裂は両手に持つ双剣をクロスさせて同時に斬りつけた。

「ガアッ!」

斬りつけられて余りの熱さと痛さに声が出る。

『斬る』と『焼く』の同時攻撃だが、何時もの熱さを遥かに超えた攻撃・・・熱量だった。

攻撃を受けて身体が仰け反る。何とか足に力を込めて耐えて、神裂に顔を向けた。

「気になりますか？この2つの炎が」

視線に気づき、2つの色の炎を掲げて神裂は聞いてくる。

「この藍青色の炎は高温で黄色の炎は低温です。温度差のある2つの炎を交わらせることで鋼鉄の融解点をも軽く超える灼熱の炎になります。そして、この2つの炎を使えばこんな事も出来るんですよ？」

両方の双剣を両脇の後ろに構えてから同時に横薙に振った。

すると、俺の周りから音が消えたと思つたら横にあつた墓標が炎の円状に燃え消えていった。

「こんな風に交えて気圧に変化を生じさせて巨大な竜巻を作つて広範囲を瞬く間に燃やせます。そして・・・」

神裂は振り切つた双剣を引つ張りながら戻す。

「なっ・・・」

すると、身体が神裂に近付いていく。

「その強力な竜巻は全てのものを吸い寄せます」

そして、そのまま双剣を振り下ろした。

「があっ・・・！！！」

斬られた余りの熱さ、痛さに地面に膝をつく。

「ふう。そろそろ飽きましたね。【反逆せずして我在らず】」

つまらなそうに神裂が呟いたと思ったら。
いきなり頭上からスパイダーネットが降ってきて、動きを制限された。次に巨大な釘が両手両足に縫い付けられて、首をギロチンで固定された。

「がああああ――！！！」

釘の痛さに絶叫する。

巨大な釘はほぼ根元まで深々と刺さっていた。

精神が乱されて能力が解除される。

夕暮れの世界に罅が入る。

罅は広がり続けやがて夕暮れの世界は碎けて散った。

「そろそろ終わらせましょうか神威さん」

俺を見下ろしながら神裂は言う。

「そういえば、まだ私が今さっき使った新しい能力言ってませんでしたね？」

「まずは、【全ては我が目に映る】から説明しましょうか。まあ、私もそろそろ帰りたいですから簡単にね」

「この能力は言ってしまうえば予知能力です。貴方が攻撃をするならばその攻撃をする前に潰す事が出来ます。この能力の主は『北欧神話の主神 オーディン』です」

「次に【反逆せずして我在らず】ですが、これは『邪神、ロキ』の能力です。まあ、簡単に言つと罨を張る事が出来ます」

「こんな所でしょうかね？」

神裂は説明を終わらすとゆっくりと俺に近付いて来る。

「神威さん。貴方、今のままではそのうち死にますよ？仲間も守れず、大切な人も守れず死にます。今の弱いままでは」

感情が感じられない冷たい声音で神裂は淡々と喋る。

「ッ・・・！！！」

その言葉は俺の心を抉った。
何も言い返す事が出来なかった。

「黙りですか。まあ、いいです。それじゃあサヨウナラ、神威さん。
出来れば次、会うときはもっと強くなっていて下さいね」

そして、神裂は踵を返して帰って行った。

神裂が帰ったお陰か神裂が使った能力は解除されて両手足にあった巨大な釘も首にあったギロチンも無くなった。

痛みが走る身体を反転させて夜空を見上げる。

夜空は綺麗な星がいっぱい広がっていた。

夜空を見ながら、神裂の言葉を思い出す。

『仲間も守れず、大切な人も守れず死にます。今の弱いままでは』

「分かってるさそんな事・・・」

畜生。

「つつ！・・・帰るか」

身体を無理起こして家に向かって歩き出した。

家に帰ると歩とセラはまだ帰って来てはいなかった。
居間に入るとハルナは居なかったがユウが居た。

「ユウ」

居間に居たユウに声を掛けた。ユウは驚いた顔をして俺に向かって飛びついてきた。

『どうしたの神威!!』

飛びついてきたユウは目に涙を溜めていた。

ユウ。

「落ち着いてユウ、俺は大丈夫だから。だから心を落ち着かせて」

俺は落ち着かせるようにユウを抱き締めて声を掛ける。

『ほんとに?』

今にも涙を流しそうな表情で問い掛けるユウ。

「うん」

安心させるように笑顔を見せた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3893r/>

これはゾンビですか？～いいえ。神殺しです～

2011年11月27日18時45分発行